秋田県文化財調査報告書第311集

御　嶽　公　園　館　跡

—緊急地方道路整備事業象潟矢島線に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—

2001・3

秋田県教育委員会

御嶽公園館跡

—緊急地方道路整備事業象潟矢島線に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—

2001・3

秋田県教育委員会

序

新世紀における彩り豊かな県民文化を創造するためには、先人たちが幾多の苦難を乗り越えて守り、現代に生きる私たちに伝え残してくれた数多くの貴重な文化遺産を保護し、適切な活用を図る努力が不可欠であります。

本教育委員会では県民と一体となって各種施策の展開に積極的に取り組んでおります。

この度、緊急地方道路整備事業象潟矢島線に係る御嶽公園館跡の発掘調査を実施しました。調査の結果、中世城館の一端が確認され、また縄文時代や近世における生活の痕跡も僅かに検出されました。

この発掘調査報告書が、本県の歴史を正しく理解していく上での一助となれば幸甚に存じます。

最後に、本調査の実施ならびに本書の刊行に際し、ご理解とご協力を賜りました秋田県由利建設事務所、象潟町、象潟町教育委員会をはじめ、関係各位に対し深甚なる感謝の意を表します。

平成 13 年 3 月

秋田県教育委員会

教育長　小野寺　清

例　言

1. 本書は、緊急地方道路整備事業象潟矢島線に係る、秋田県由利郡象潟町字横山138外に所在する御嶽公園館跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本遺跡の発掘調査は、1999(平成11)年6月7日から10月13日まで秋田県教育委員会が実施した。
3. 調査の内容については、すでにその一部が『御嶽公園館跡発掘調査資料』および平成11年度『秋田県埋蔵文化財発掘調査報告会資料』や平成11年度『秋田県埋蔵文化財センター年報18』などによって公表されているが、本報告書を正式なものとする。
4. 本書に使用した地図は、建設省国土地理院発行1:25,000地形図「象潟」「小砂川」、同1:50,000地形図「象潟」、通商産業省工業技術院地質調査所発行1:50,000地質図「象潟」、秋田県由利建設事務所提供の1:50,000地形図「秋田県由利建設事務所管内図」、同1:1,000地形図「主要地方道象潟矢島線整備工事測量成果平面図」である。
5. 本書に使用した空中写真と地形図の一部は、株式会社シン技術コンサルに空中写真測量委託したものである。
6. 本書に使用したグリッド配置図は、株式会社風間設計に水準測量および方眼杭設置委託したものである。
7. 本書に使用した土色表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』1999年版に拠った。
8. 本遺跡の出土試料に関する自然科学分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、その結果報告を本書第5章「自然科学的分析」として編集し、掲載した。
9. 本書の草稿執筆は、下記のように分担した。

   第1章、第3章の第1節・第2節、第4章、第6章……小林芳行

   第2章の第1節・第2節……佐々木政任

   第2章の第3節……太田　剛・佐藤茂樹

   第3章の第3節……山中　徹
10. 本書の編集は、本間美紀子の協力を得て、小林芳行が行った。

凡　例

1. 本書に収載した地図及び遺構実測図に付した方位は、国家座標第Ｘ系による座標北を示す。本遺跡のグリッド杭座標原点ＭＡ50(X=-88703.9730, Y=-78774.529)とした位置における座標北と磁北との偏角は西偏7°40′である。
2. 各遺構・遺物に付している略記号は下記のとおりである。

   遺構　　ＳＤ：空堀跡・溝跡　　ＳＦ：土塁　　ＳＫ：土坑　　ＳＫＰ：柱穴様ピット
   　　ＳＸ：その他の遺構

   遺物　　Ｓ：礫
3. 遺構番号は、種類に関係なく検出順に通し番号を付した。
4. 遺構の計測値のうち、深さについては確認面から最深部までの計測値とした。
5. 遺物実測図の番号は、各頁毎に一連番号を付し、遺物観察表、写真図版とも対応できるようになっている。ただし、実測図もしくは写真図版のみの掲載とした遺物もある。
6. 遺物観察表中の法量計測値については、遺物の各計測部位が一部欠損している場合は計測値に( )を付し、推定値とした。
7. 土層番号に用いた数字は、ローマ数字を遺跡基本土層に、算用数字を遺構土層に使用して区別した。
8. 挿図に使用したスクリーントーンは、下記のとおりである。それ以外については各挿図中に凡例を示してある。

地山

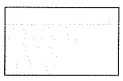
焼土

炭化物

現代の水路跡

整地層

Ｓ1の加工痕


非実測域

目　次

序
例言……ii
凡例……iii
本文目次……iv
挿図目次・表目次……v
図版目次……vi

第1章　はじめに……1
　第1節　調査に至る経過……1
　第2節　調査要項……2
第2章　遺跡の環境……3
　第1節　遺跡の位置と立地……3
　第2節　遺跡周辺の地形と地質……3
　　1　本遺跡の自然地理学的環境……3
　　2　本遺跡の地質学的環境……6
　　3　象潟の古環境……8
　　4　本遺跡の人文地理学的環境……9
　第3節　歴史的環境……10
第3章　発掘調査の概要……16
　第1節　遺跡の概観……16
　第2節　調査の方法……29
　第3節　調査の経過……31
第4章　調査の記録……33
　第1節　検出遺構……33
　　1　中世……33
　　2　縄文時代……36
　　3　その他の遺構……38
　第2節　出土遺物……47
　　1　縄文時代……47
　　2　近世以降……47
第5章　自然科学的分析……63
　第1節　はじめに……63
　　1　試料……63
　　2　方法……63
　第2節　分析結果……65
　　1　結果……65
　　2　考察……65
第6章　まとめ……71

図版
報告書抄録
あとがき

挿図目次

第１図　路線と遺跡……1
第２図　遺跡位置図……4
第３図　地形区分図……5
第４図　地質図……7
第５図　御嶽公園館跡と周辺遺跡位置図 …12
第６図　遺跡と周辺の現況地形図 ……17･18
第７図　遺跡推定範囲図 ……19
第８図　基本土層ベルト配置図 ……20
第９図　第1･2基本土層図 …… 21･22
第10図　第3･4基本土層図 ……23
第11図　第5基本土層図 ……24
第12図　段状地形エレベーション配置図 …25
第13図　段状地形エレベーション図 ……26
第14図　グリッド配置図 ……30
第15図　遺構配置概略図 ……34
第16図　SD01･SD02･SD09 ……39
第17図　SF06(1) ……40
第18図　SF06(2) ……41
第19図　SF08 ……42
第20図　SK03･SKP10･SKP13･SKP21･S1…43
第21図　SX04･SX05･SX07･SX15……44
第22図　SK11･SK16 …… 45
第23図　SK17･SK18･SK19･SK20……46
第24図　煙管参考図……49
第25図　SK17 出土遺物……50
第26図　遺構外出土石器……51
第27図　遺構外出土陶磁器(1) …… 51
第28図　遺構外出土陶磁器(2) …… 52
第29図　遺構外出土陶磁器(3) …… 53
第30図　遺構外出土陶磁器(4) …… 54
第31図　遺構外出土陶磁器(5) …… 55
第32図　遺構外出土陶磁器(6) …… 56
第33図　遺構外出土陶磁器(7) …… 57
第34図　遺構外出土陶磁器(8) …… 58
第35図　遺構外出土陶磁器(9) …… 59
第36図　遺構外出土鉄製品……60
第37図　遺構外出土銭貨……61
第38図　遺構外出土煙管……61
第39図　主要珪藻化石群集……68
第40図　植物珪酸体群集と組織片の産状……69

表目次

第１表　御嶽公園館跡周辺の遺跡一覧 ……13
第２表　柱穴様ピット一覧 ……36
第３表　SK17 出土石器観察表 ……50
第４表　遺構外出土石器観察表 ……51
第５表　遺構外出土陶磁器観察表(1)……51
第６表　遺構外出土陶磁器観察表(2)……52
第７表　遺構外出土陶磁器観察表(3)……53
第８表　遺構外出土陶磁器観察表(4)……54
第９表　遺構外出土陶磁器観察表(5)……55
第10表　遺構外出土陶磁器観察表(6)……56
第11表　遺構外出土陶磁器観察表(7)……57
第12表　遺構外出土陶磁器観察表(8) ……58
第13表　遺構外出土陶磁器観察表(9) ……59
第14表　遺構外出土鉄製品観察表……60
第15表　遺構外出土銭貨観察表……61
第16表　遺構外出土煙管観察表……61
第17表　分析試料一覧表……67
第18表　放射性炭素年代測定結果……67
第19表　珪藻分析結果……68
第20表　植物珪酸体分析結果……69
第21表　微細遺物分析結果……69
第22表　リン酸分析結果……69

図版目次

図版 1　御嶽公園館跡全景
図版 2　1．段状地形断面(第2基本土層の一部)
　　2．SD01断面(C—D)
図版 3　SF06縦断面
図版 4　1．SF06横断面(E—F)
　　2．SF06横断面(G—H)
図版 5　1．SF06横断面(C—D)
　　2．SF06横断面(A—B)
図版 6　1．SF08断面
　　2．SD09断面
図版 7　1．SF08完掘状態
　　2．SD01断面(A—B)
　　3．SD01断面(E—F)
図版 8　1．段状地形調査前状況
　　2．段状地形と基本土層観察用トレンチ
　　3．作業風景
図版 9　1．SX05確認状態
　　2．SX04確認状態
　　3．SX07半截状態
図版 10 1．SX15確認状態
　　2．SX15半截状態
　　3．SK17完掘状態
図版 11 1．SK18完掘状態
　　2．SK20完掘状態
　　3．SK11完掘状態
図版 12 1．SK16完掘状態
　　2．SK19完掘状態
　　3．S1検出状態
図版 13 1．SK17出土石鏃
　　2．スクレイパー
図版 14 1．陶磁器(擂鉢 他)
　　2．陶磁器(寺内焼系)
図版 15 1．陶磁器(肥前系)
　　2．陶磁器(肥前系)
図版 16 1．陶磁器(肥前系)
　　2．陶磁器
図版 17 1．陶磁器
　　2．銭貨
図版 18 1．煙管(雁首)
　　2．獣骨
図版 19 1．鉄製品(鎌)
　　2．鉄製品(蹄鉄、鍬)
　　3．鉄製品(火箸)
図版 20 植物珪酸体･珪藻化石･灰像分析
　　プレパラート内の状況

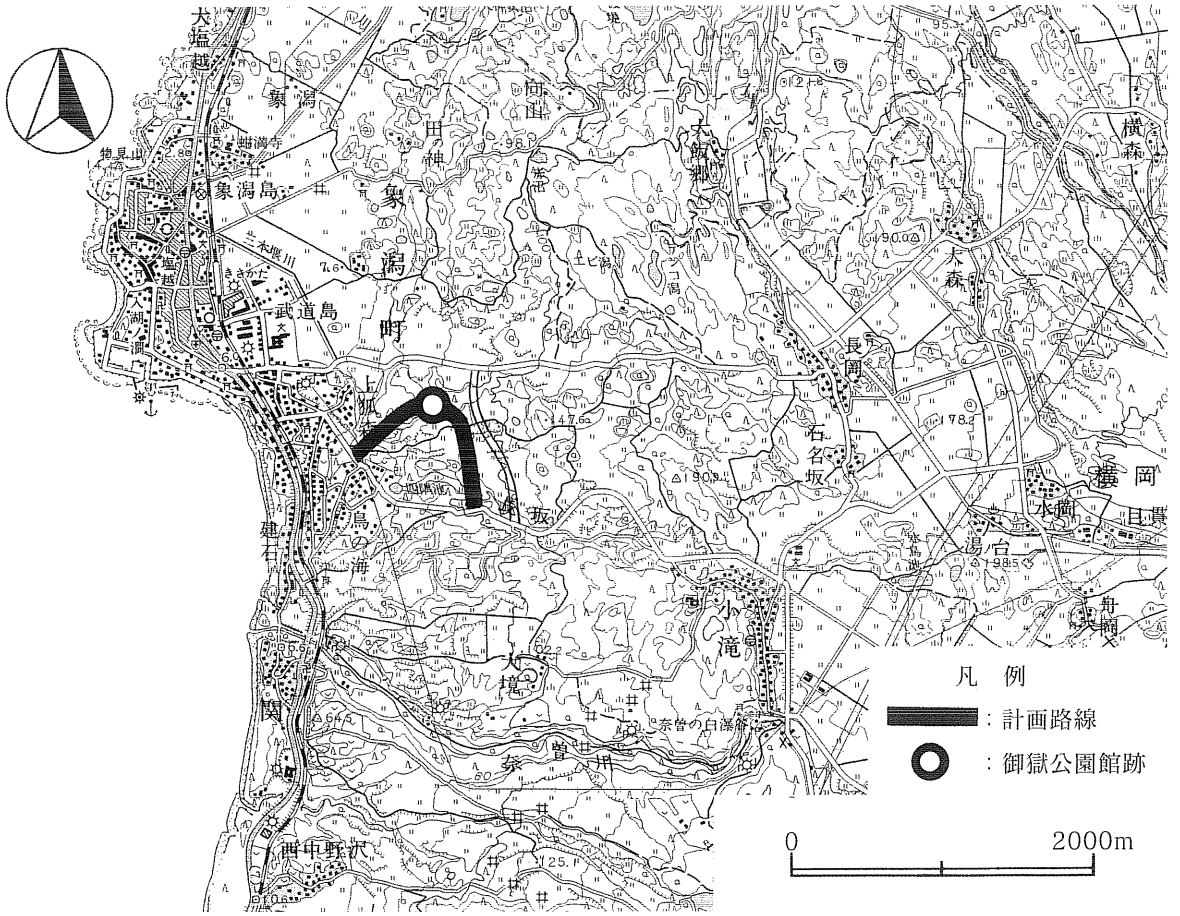
第1章　はじめに

第1節　調査に至る経過

県道象潟矢島線は、由利郡象潟町の一般国道7号との交点を起点とし、鳥海山の中腹を縫って同郡矢島町で一般国道108号に接続する主要地方道である。当区間は、鳥海山および鳥海高原等の観光道路であり、象潟町東部地域の生活道路であるという2つの性格を兼ね備えた幹線道路である。そのため、交通量は年間を通じて非常に多い。しかしながら、急カーブ・急勾配で幅員が狭い危険箇所があり、特に冬季間は路面凍結等により交通の難所となっているため早急な改善が求められていた。

象潟町狐森を起点とし、同町長坂を終点とする2.2kmの緊急地方道路整備事業計画路線内に周知されている埋蔵文化財包蔵地があることから、秋田県建設交通部は秋田県教育委員会に対し遺跡の照会をした。秋田県教育委員会はこれを受けて平成10年度に予定路線2.2kmについて踏査を実施した。調査の結果、周知の遺跡1ヵ所が事業に係ることを確認し、今後範囲確認調査が必要であることと、範囲確認調査の結果、記録保存が必要な場合には発掘調査を実施すべきことを回答した。

以上のような経緯に基づき、平成10年度に御嶽公園館跡の範囲確認調査を実施し、平成11年度に御嶽公園館跡の発掘調査を実施するに至った。



第1図　路線と遺跡

第2節　調査要項

遺　跡　名	御嶽公園館跡(みたけこうえんたてあと)(遺跡略号　6MTKET)
所　在　地	秋田県由利郡象潟町字横山138外
調査期間	平成11年6月7日～10月13日
調査面積	8,400m²
調査主体者	秋田県教育委員会
調査担当者	小林芳行(秋田県埋蔵文化財センター調査課　学芸主事)
	山中　徹(秋田県埋蔵文化財センター調査課　非常勤職員) (現　秋田県立大館桂高等学校　教諭)
	佐々木政任(秋田県埋蔵文化財センター調査課　非常勤職員) (平成12年3月退職)
	太田　剛(秋田県埋蔵文化財センター調査課　非常勤職員)
	佐藤茂樹(秋田県埋蔵文化財センター調査課　非常勤職員) (平成12年3月退職)
総務担当者	菅原　晃(秋田県埋蔵文化財センター総務課　主査) (現　秋田県立横手工業高等学校　事務長補佐)
	佐々木敬隆(秋田県埋蔵文化財センター総務課　主事)
	八文字　隆(秋田県埋蔵文化財センター総務課　主事)
調査協力機関	秋田県由利建設事務所
	象潟町
	象潟町教育委員会

参考文献

・秋田県由利土木事務所　『緊急地方道路整備事業象潟矢島線の概要』　1997(平成9)年

・象潟町　『象潟町史　資料編Ⅰ』　1998(平成10)年

・象潟町　『象潟町史　資料編Ⅱ』　1996(平成8)年

・秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第291集　1999(平成11)年

第2章　遺跡の環境

第1節　遺跡の位置と立地

由利郡象潟町は秋田県沿岸最南部に位置し、北を金浦町、北東を仁賀保町、南を山形県飽海郡遊佐町に接し、西に日本海を臨む。東西約9.6km、南北約10.8kmで、面積約125.09km²(由利郡内第5位)、人口は13,880人(由利郡内第2位)である。(註1)

本遺跡は、羽越本線象潟駅から南東へ直線距離で約1.5km、同線上浜駅から北北東約4.2kmの北緯39°11′50″、東経139°55′16″に位置し、鳥海山麓北西の台地上に立地する(第2図)。南西方向の開析谷は、廃棄物処理場として埋め立てられており、北側は湿地・水田となっている。これら開析谷により東西約800m、南北約500mの御嶽公園は、全体的に南北に入り組んだ地形となっている。本遺跡の範囲は御嶽公園のほぼ全域にわたり、調査区は御嶽公園の中央南部で、主郭とみられる平場の西側斜面の一部である。

付近の主要幹線道路は、象潟町を南北に縦断する一般国道7号(以下、国道7号という)から、一般地方道鳥海公園小滝線(以下、鳥海ブルーラインという)入り口に接続する主要地方道象潟矢島線で、遺跡の南を東西にはしる。

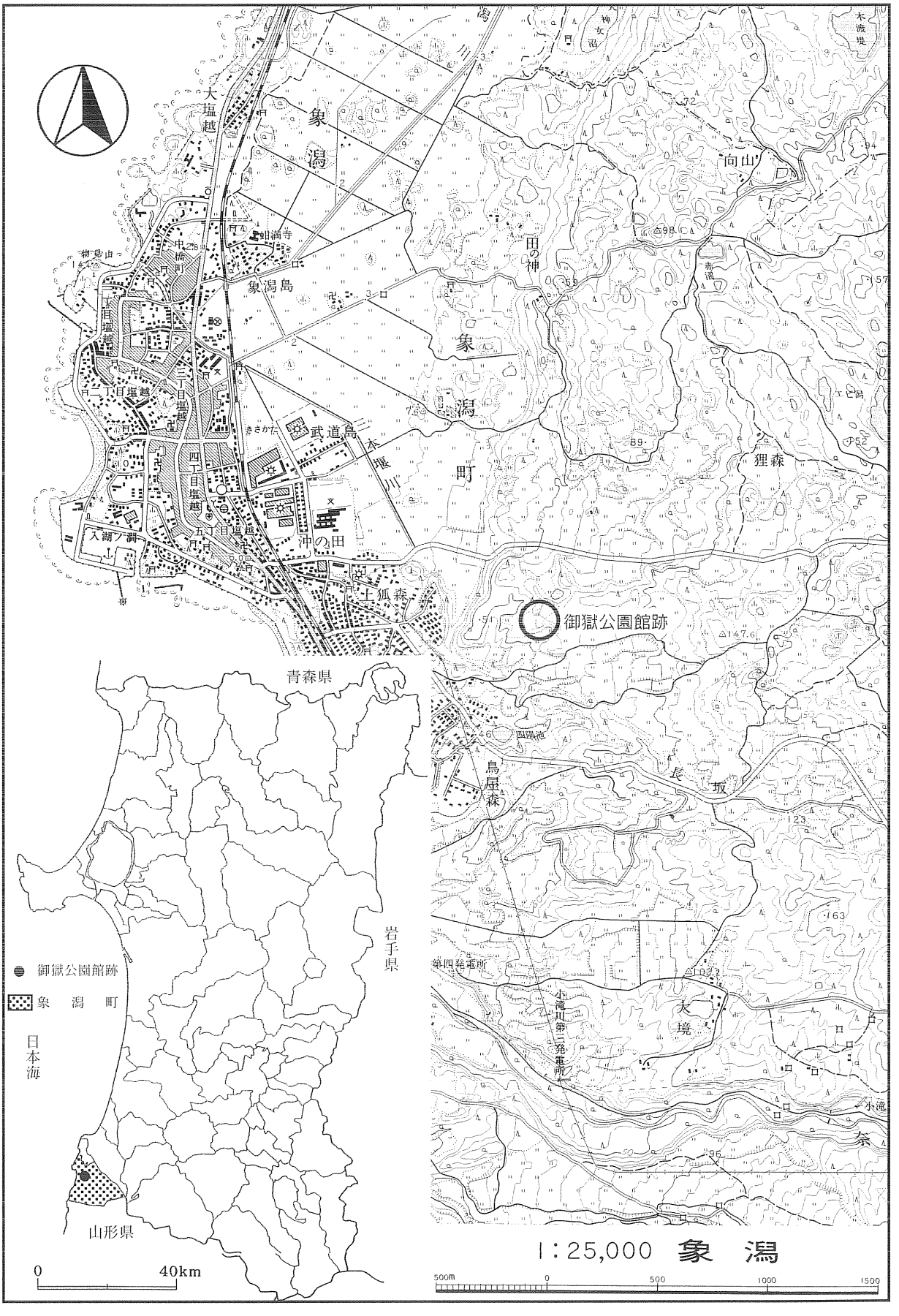
第2節　遺跡周辺の地形と地質

1　本遺跡の自然地理学的環境

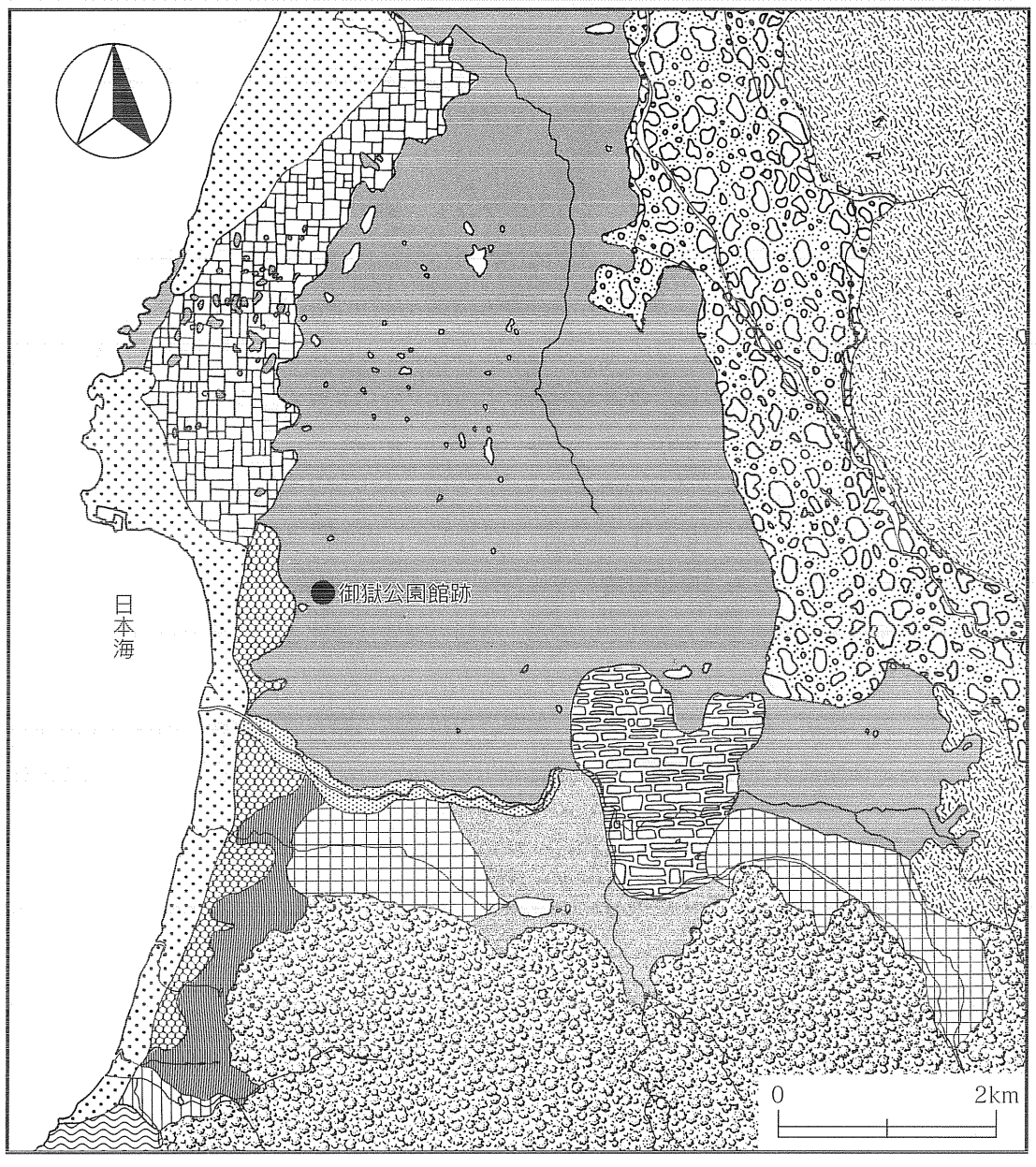
秋田県と山形県に跨り、日本海を臨む独立峰「鳥海山」(2,236m、東北地方第2位)の北に展開する象潟町は、北西に低く南東に高い地形で、町の南東端飯ヶ森(1,199m)から西と北西に町の境界が延びる。町の全体の標高は、約1,350m付近から北西方向へ扇状に高さを減じ、50m以上の土地が約8割を占め、全体的に山林原野が多い。残り約2割の土地のほとんどが日本海に面し、これら低地は主に宅地として利用されている。裾野は町を代表する奈曽川をはじめ、いくつかの小河川によって浸食され、上流部の鳥海国定公園では、切り開かれた険谷を確認できる。

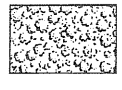
象潟町は、北部と南部で異なる地形を呈する。この違いは地形区分図(第3図)において顕著である。

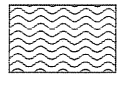
一定の傾斜を保った等高線の少なさが北部の特徴で、同じ等高線で囲まれた領域が無数に確認される。流れ山(註2)や凹地を抱えた低丘陵地は、象潟町北部から仁賀保町南部の由利原高原(註3)の範囲に広がっている。流れ山は南に位置する鳥海山の山体崩壊で形成されたものである。懐にため込んだ溶岩の土量は、1回の噴火で流出する溶岩の量をはるかに凌ぎ、最層厚120m、総体積3.5km³もの土砂が巨大な岩石を伴い象潟町北部に広がった。小滝集落南端を通過して西流する奈曽川は、河谷低地を形成しているが、南北に段丘面がみられず、下方侵食の開始は比較的最近と考えられる。泥流堆積物からなる丘陵地の東には、白雪川沖積低地が南北に延び、東西の丘陵地を切り開いている。白雪川は上流で扇状地を形成し、川沿いには発電所が建設されている。扇状地は横岡集落と奈曽川の南方にもみられ、この2ヵ所は侵食が著しく、扇状地本来の地形はほとんど確認できない。

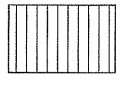

大塩越
象
潟
向山
田の神
象潟島
象
潟
町
武道島
本堰川
狸森
沖の田
御獄公園館跡
鳥屋森
長坂
大境
小滝
奈
青森県
岩手県
山形県
日本海
御獄公園館跡
象潟町
0
40km
1:25,000 象潟
500m
0
500
1000
1500

第2図　遺跡位置図



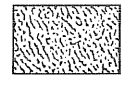

鳥海火山麗地

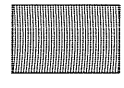

海岸段丘


古期河岸段丘

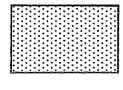
小滝泥流堆積物丘陵地

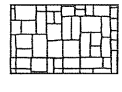
象潟泥流堆積物丘陵地

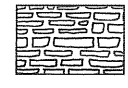

中起伏丘陵地

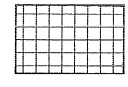

小起伏丘陵地

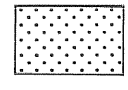
白雪川砂礫低地

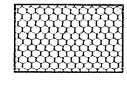

奈曽川河谷低地

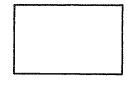

象潟砂礫低地


小滝砂礫平地


古期扇状地


新期砂丘


古期砂丘


水域

第3図　地形区分図

南部は典型的な円錐状火山麓である。鳥海火山は、沿岸県境の小砂川地区の火山性岩石海岸と、海岸から数百m沖までの鳥海国定公園地域を形成している。山麓を形成した噴火口は4つあり、それぞれから溶岩を噴出していた。鳥海山の火山活動の活発化は、中位段丘面に溶岩の堆積がみられることから第四紀以降と判明している。

象潟町南部の岩石海岸は、山体の崩壊によるものでなく、流れ出した溶岩が直接海に到達したことによる。大須郷集落の位置する段丘面は、岩石海岸の海への張り出しと海岸線に沿った波食崖から、海岸段丘面に該当する。侵食を受けた痕跡は、上浜駅の北東約1kmから小砂川駅の東方約300mにかけての約4.5kmにもみられ、地殻変動で地盤が隆起したことがうかがえる。小砂川海岸の断層崖は鳥海火山帯の断層群の一部で、大地の営みの強大さを示すのに十分な景観である。波や風は、沿岸に高さ3～6m程の砂丘を象潟海岸から大砂川までの汀線に並行して形成した。大砂川の海岸線は、砂浜として維持されていることから、新しい溶岩の進出は及ばなかったと考えられる。川袋集落がのる1段高い段丘面は、侵食崖が海岸線に対してほぼ直交しているため、古期河岸段丘の可能性が高い。

本遺跡は泥流堆積物からなる丘陵地南端の舌状台地上にある。傾斜は一貫して東から西へ低くなっている。舌状台地全体が館跡と考えられているが、今回の調査は館跡として地形を判断する際、縁辺部に位置する区域が対象であった。調査区東側の主郭は、30m進んで1m高くなる程度で、緩やかな傾斜を保つ平坦に近い尾根に位置したとされる。実際に周辺地形の踏査で小規模の凹地や平坦面が確認できた。舌状台地南側の斜面は険しく、意図的に削った(切岸)可能性もあるが、今回は調査区外のため明らかにされていない。このような周囲の標高から1段高く、切り立った斜面に緩傾斜を保つ尾根は、城館の立地に好適といえる。

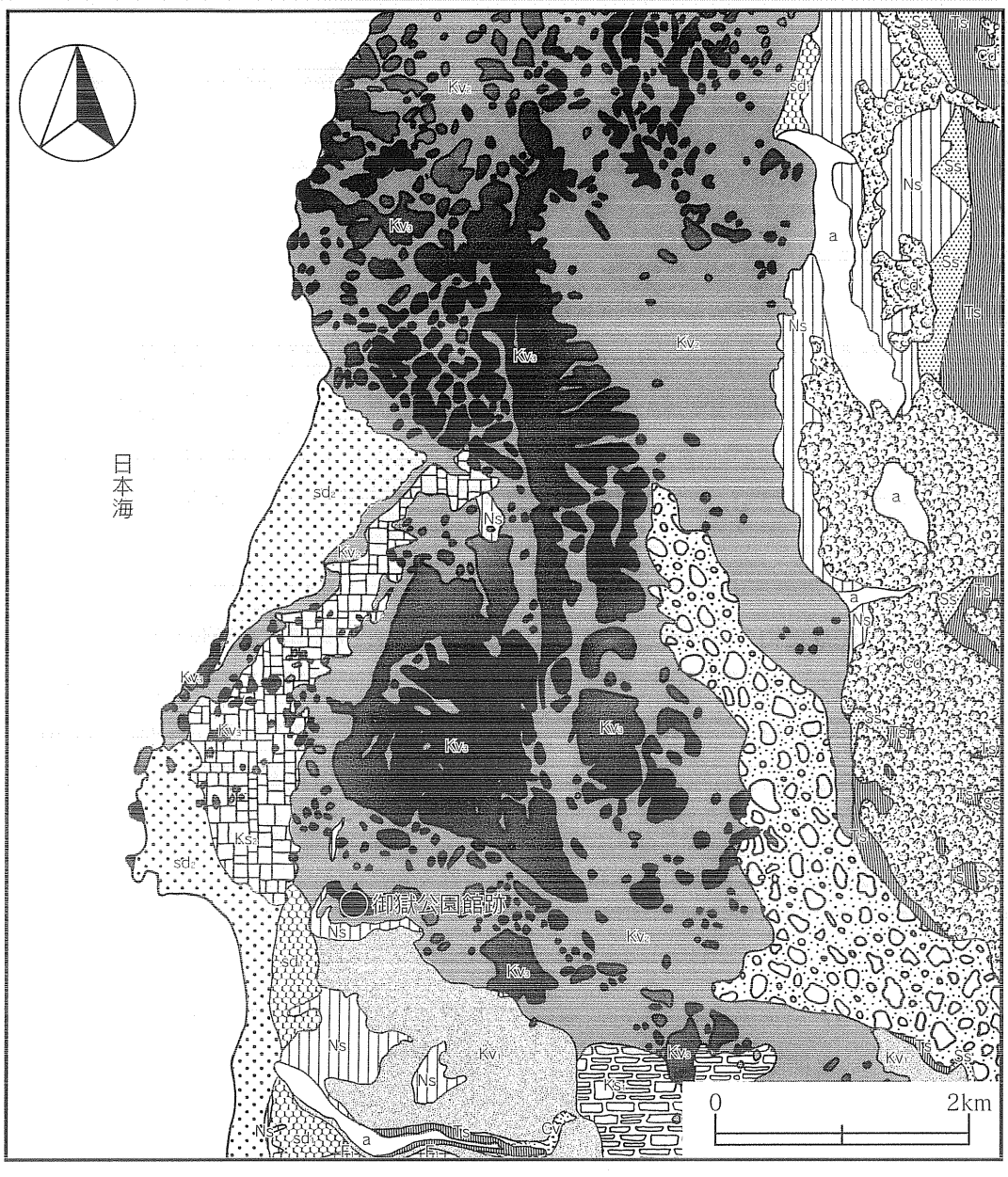
北西端は流水の侵食により、開析谷を形成している。この開析谷は調査区北西端の境界から約50m西方で廃棄物処理場として埋め立てられ、一部を残し本来の地形は覆い隠されている。処理場のさらに西は崖になっていて、日本海を見渡せる。精査のために調査区北西部を掘り下げたところ、開析谷の延長と思われるU字形の斜面があらわれた。段を構築するために埋め立てたとみられる堆積物の層厚は最大約2mに達していた。この深度は一般的な象潟泥流堆積物の層厚にはるかに及ばないが、後述する諸事象による結果と思われる。

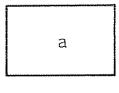
2　本遺跡の地質学的環境

秋田県沿岸南部仁賀保町から象潟町にかけて、下位から、新第三紀中新世の青沢層・女川層・船川層、新第三紀鮮新世の天徳寺層・笹岡層、第四紀更新世の西目層が基盤として堆積し、所々に上位の基盤の露出がみられる。象潟町北部は、最上位を象潟泥流堆積物が最厚層120mで一帯を占めている。南部は鳥海火山の噴出物に覆われている。断層崖などの大きな地形は新第三紀の地質構造に支配され、小規模地形は火山噴出物などの性質を反映している。

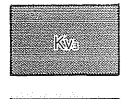
当地域は、グリーンタフの秋田油田に属する。油田の構造運動は船川階後期に始まり、天徳寺階初期を主動期とし、次いで数回の後続的構造運動を繰り返して、潟西階前に終わったもので、出羽変動(註4)と呼ばれている。この変動が造陸と造盆の分化運動、すなわち隆起と沈降の相反する運動を生じ、その境界に衝上断層を生じている。これらの運動の中には主動期で終わった構造と、長期にわたって活動したとみられる構造がある。

秋田県沿岸南部から山形県沿岸北部地域は、直径東西26km、南北14kmを基底部とする火山体「鳥



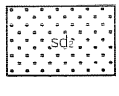


河床堆積物



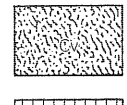
泥流丘

火山岩宵

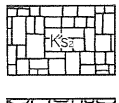


新期砂丘堆積物

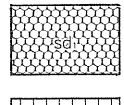
泥流堆積物



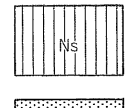
輝石安山岩溶岩及び同質火砕岩



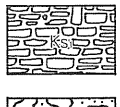
象潟層



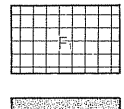
古期砂丘堆積物



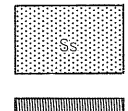
西目層



小滝層



古期扇状地堆積物



笹岡層(砂岩及び砂質シルト岩)

新期扇状地堆積物

小滝泥流堆積物

天徳寺層(シルト岩)

第4図　地質図

海山」の噴火活動の影響を受けている。鳥海国定公園区域と範囲をほぼ同じくする鳥海火山は、形成された順に、鳥海初期火山(註5)、西鳥海山(註6)、猿穴火山(註7)、東鳥海山(註8)の4火山体から構成されている。最も古い鳥海初期火山の噴出物の一部は、中位段丘堆積物によって覆われていることから、火山活動の開始は第四紀更新世末期と推定される。鳥海初期火山は解析が進行し、西鳥海、猿穴と東鳥海においては、それらの噴出物が一部互層をなしているので、活動時期は地質学的にほとんど同じで、更新世最末期から現世に山体は形成されたといえる。

鳥海山を構成する4火山体の形成期においては、主として中央火口からの溶岩と火砕岩の交互噴出であった。活動末期になると、西鳥海山と東鳥海山では山体の崩壊量が火口からの噴出量を凌駕するようになる。崩壊によって流れ出た土砂は、泥流堆積物として主に鳥海山の北側に丘陵地をつくっている。この分布状況は地質図(第4図)において把握できる。堆積物の層厚は最大120mで、西部20～60mと薄く、東部50～120mと厚い。平均の厚さは50m内外で、総体積3.5km^{3}である。西部及び北部の泥流堆積物の末端と、象潟砂礫低地には多くの流れ山がみられ、個々の大きさは比高45m、径400m以内である。ほとんど1m以下で不規則な形をした安山岩礫からなり、火山灰の基質を伴う。

山体の崩壊は、象潟泥流堆積物として表層地質を構成し、大小の安山岩溶岩を内包している。この安山岩溶岩は、男鹿寒風山の「男鹿石」に対して、山形県沿岸北部の吹浦女鹿から「女鹿石(鳥海石)」と呼ばれ、秋田・山形県境の三崎付近でも庭石として採掘、販売されている。また、昭和40年以前に沈殿型の褐鉄鉱床が小規模ながら数ヵ所で採掘されていたことがある。本調査において、南側斜面の砂質地山(2.5YR6/8、明黄褐色土)面で確認された酸化砂鉄塊からも、鉄分に富む地質であることがうかがえる。このほか、鳥越川左岸では硫黄の採掘もおこなわれていた。

3　象潟の古環境

鳥海山爆裂火口から発生した象潟泥流堆積物は、縄文海進時のスムースな海岸線を乱し、金浦・象潟の突出部を形成している。象潟泥流堆積物の泥流丘はすべて火山灰・ローム層に覆われていないことから、形成年代は新しいと推測される。加藤(1977、1978)は象潟町の泥流体積物中から産した埋もれ木3個体について、炭素同位体年代測定法で、泥流堆積物の形成年代を約2,600年前としてよいと発表している(註9)。その後、年輪年代測定により紀元前466年という測定結果が提示された(註10)。

以上から、象潟泥流は縄文時代晩期に発生し、これ以前の遺跡は地下深くに埋没したことになる。鳥海火山の山体の崩壊による泥流の発生は、象潟町北部における縄文時代晩期以前の遺構・遺物発見例が少ない(註11)要因の1つといえる。本調査で出土した1片の縄文時代晩期の土器は年代的に一致するが、陥し穴から出土した石鏃は、形式から縄文時代前期と判明した。本調査では陥し穴が6基検出されており、すべて沢目に沿って掘られているため、これらは同時期につくられたと考えられる。

縄文時代前期の遺構が、層厚50m以上もの泥流堆積物であるのに、わずか2m程度の掘り下げで確認できたことには以下の自然的、人為的要因が関係する。

金浦町まで延びる泥流堆積物は、御嶽公園の北で途切れ、緩い扇状地状の等高線を描いているため、古代河川の存在が考えられる。この古代河川の支流が現在の御嶽公園を南北に入り組んだ地形にし、特に沢目に沿っては相当の下方侵食があったと推測される。また、自然科学分析(註12)の結果によると、鎌倉から江戸期までの遺構及び遺物包含層が、現代の地形改変で削平された可能性を示唆している。地形から受ける制約は、そこで生活する人を束縛するものであるから、城館を築きはじめる中世以降に

地形改変の努力があったことは想像に難くない。

象潟泥流堆積物の凹地に、象潟湖(註13)と呼ばれる景勝地が形成されたことも特筆すべき点である。3,000年B.P.前後の小海退から2,000年前後の海進に伴い、水域面積が拡大し、それに並行して象潟湖西岸が砂丘や浜堤によって閉塞され、象潟湖は完成期を迎えた。このような汽水湖は港(湊)として利用される事例が多く、青森県十三湖は、北東北の日本海側で15世紀前半まで勢力を保っていた安東氏の拠点(十三湊)として有名である。

この水域は急速に埋積され、一部淡水化した所もあったが、江戸期まで大体同様な環境が維持された。完成後の象潟湖は、地表約1m前後の部分に含まれる貝化石によって示されるように、非常に浅い状態が続いた。地表下約1m前後の貝殻の^{14}C年代は1,000年B.P.より若い。しかし、この上に約1mの堆積物があり、かつ隆起直前の水深が約1mあったとすれば、象潟湖は完成以後2m程度沈降したか、徐々にあるいは何回かに分かれて継続したものと思われる。そのため象潟湖は埋積しつくされることなく存在した。流れ山が象潟湖で景勝を誇った様子は、蚶満寺所蔵の絵地図に描かれている。

この潟湖を消滅させたのが、1804年7月10日(文化元年6月4日)に発生したマグニチュード7.1の象潟地震(註14)であった。この地震は、鳥海山の西麓を2m隆起させ、仁賀保町から金浦町までは海岸線を最大300mも後退させている。

4　本遺跡の人文地理学的環境

気候は本県で最も温暖な地域であることから、桜の開花が最も早い。特にタブノキ・オオバグミ・カラスザンショウ等は、同町が自生の北限とみられている。本格的な冬は12月以降で、積雪量は山間部を除いて最深30cm前後と少ない。これは象潟沖に北上してくる暖流を飛島(酒田市)が遮ることで、沿岸よりに流路を変えているためとされている。町の北東境界に並行して北流する鳥越川上流域から中流域にかけて、天然記念物の獅子ヶ鼻湿原を有し、希少種の動植物の生息が知られている。鳥海山麓の湧水は強酸性だが、自生するブナの原生林が中和し、良質の水になっている。地下の伏流水は直接日本海に到達し、全国的に珍しい「岩牡蠣」の生育条件のひとつとなっている。

第1次産業では、農業・漁業・林業がある。農業は稲作中心で、低地と斜面の段状に整地された水田でおこなわれている。古来、冷たい水に悩まされてきたが、全国でも珍しい温水路(註15)の建設で、低温障害による水稲の被害を最小限におさえている。このような米に対する真剣な姿勢が、腐れ米(註16)の少なさにあらわれていたといえよう。漁業で最も特徴的なのが夏場の「岩牡蠣」漁である。鳥海山の伏流水が、直接牡蠣の生育場所に流れ込む好適な条件が整っている。牡蠣以外では、イカ・サケ・タラなど通年にわたってさまざまな魚介類が水揚げされる。

第2次産業の代表格はＴＤＫ株式会社(註17)(以下、ＴＤＫという)で、本荘市・由利郡を母体とし、カセットテープ製造などで全国的に知られている。交通の利便性から、主に国道7号沿いに工場を展開している。地元の代表的な企業であり、市郡全体で支援する体制がとられている。このため象潟町における第2次産業への就業者の多くは、ＴＤＫを就業先としている場合が多い。

第3次産業では、主な観光資源として、小砂川海岸の大小の奇岩、鳥海山登山、鳥海ブルーライン、天然記念物の九十九島、同じく天然記念物の獅子ヶ鼻湿原などが挙げられる。サービス業では、国道7号の物流の相乗効果をねらった宿泊施設や飲食店などの数が多い。

調査区内の主な土地利用は、畑地・山林・道路である。調査区に点在する畑地は、戦前・戦後に食

料確保のために拓かれたが、現在は数軒の兼業農家が自給用の農作物を栽培するのみである。土地のほとんどは未整備で荒れ地と化している。調査区南を南西から北東方向に抜ける道路(町道)は生活道路であるものの、利用頻度は少ない。これら以外は山林となっていて、整然と植樹されている。樹種のほとんどは杉で、樹齢は20～30年である。南北の境界外は水田として整備され、山肌に連なる段々の区画は新緑によく映える。

第3節　歴史的環境

御嶽公園館跡が所在する象潟町は、鳥海山と日本海に挟まれ、その地形は鳥海山の無数の噴火活動と、長い年月の風化作用によって形成されたものである。このような自然環境の象潟町には、縄文時代から近世にかけての遺跡がいくつか確認されている。これら遺跡の分布は、奈曽川流域よりも南側に集中している。御嶽公園館跡がある奈曽川流域より北の地域では縄文時代以前の遺跡はほとんど確認されていない。この地域は、今から約2,600年前の縄文時代晩期にあった鳥海山の噴火で崩壊した山体が泥流となって流れ込んだといわれているところである。したがって、縄文時代後期以前の遺跡は泥流の下になっていると考えられ、遺跡の確認が困難であるが、縄文晩期以降の遺跡は確認される可能性がある。

現在、象潟町で旧石器時代の遺跡は確認されていない。しかし、旧石器時代の遺跡や遺物は、近接の西目町、矢島町、鳥海町で確認されており(註18)、象潟町においても泥流に覆われていない奈曽川よりも南側の地域では、将来確認される可能性がある。

縄文時代の代表的な遺跡では、上熊ノ沢遺跡、ヲフキ遺跡がある。この2ヵ所の遺跡は、共に大砂川地区農免農道整備事業に係る緊急発掘調査として、1989(平成元)年に実施されたものである。上熊ノ沢遺跡では、縄文中期末葉から後期初頭のものとみられる複式炉を有する竪穴住居跡が11軒検出され、また縄文各期にわたる土器が出土した。ヲフキ遺跡では、縄文時代前期のものとみられる土坑墓や土器埋設遺構などが検出され、縄文時代前期の土器・石器などが出土した。また、ヲフキ遺跡は、1999(平成11)年にも秋田県教育委員会による発掘調査が行われ、縄文時代中期の石囲い炉を有する竪穴住居跡、縄文時代後期のものとみられる掘立柱建物跡などが検出された(註19)。他にも、『秋田県遺跡地図(中央版)』には、縄文時代の遺跡として収載されている遺跡が16ヵ所ある(註20)。

弥生時代の遺跡としては、水越遺跡や1989(平成元)年に発掘調査が行われた上熊ノ沢遺跡がある。上熊ノ沢遺跡では、弥生時代初頭の竪穴住居跡1軒が検出され、弥生時代初頭の土器が出土した。

古墳時代の遺跡としては、管ヶ崎古墳があったという(註21)。場所は金環、管玉が出土している大砂川地区であろうと伝えられているが、正確にはわかっていない。

奈良・平安時代の遺跡としては、奈良・平安期にわたる製塩遺跡であるカウヤ遺跡、平安時代の遺物が発見されたヲフキ遺跡がある。カウヤ遺跡は、国道7号改良工事(小砂川バイパス建設事業)に伴い、1984(昭和59)年と1985(昭和60)年にわたって調査され、製塩遺構と思われる炉や焼土遺構7基が検出され、製塩土器が出土した。奈良時代の秋田では、712(和銅5)年に出羽国が誕生し、733(天平5)年に出羽柵(後の秋田城)が秋田市高清水に遷し置かれたと『続日本記』にある。日本海沿岸の秋田城への道筋も整備され、多賀城と現在の飽海・由利の海岸地帯を通って秋田城までの街道に11の駅家

(うまや)が設けられた。その駅家の1つに「蚶形(きさかた)」駅家があったと『延喜式』にある。蚶形駅家があった場所については不明であるが、秋田城跡から出土した漆紙文書には、蚶形駅家から送付した手紙が含まれていた。その内容によると、秋田城の役人が象潟近辺に秋田城が管理する製塩用鉄釜の検収で出張の際、秋田城あてに他の検収物があるかどうか問い合わせの手紙を出したようである。この文書から蚶形駅家が実在していたこと、カウヤ遺跡の製塩遺構が秋田城と関係していた可能性のあることが考えられる。

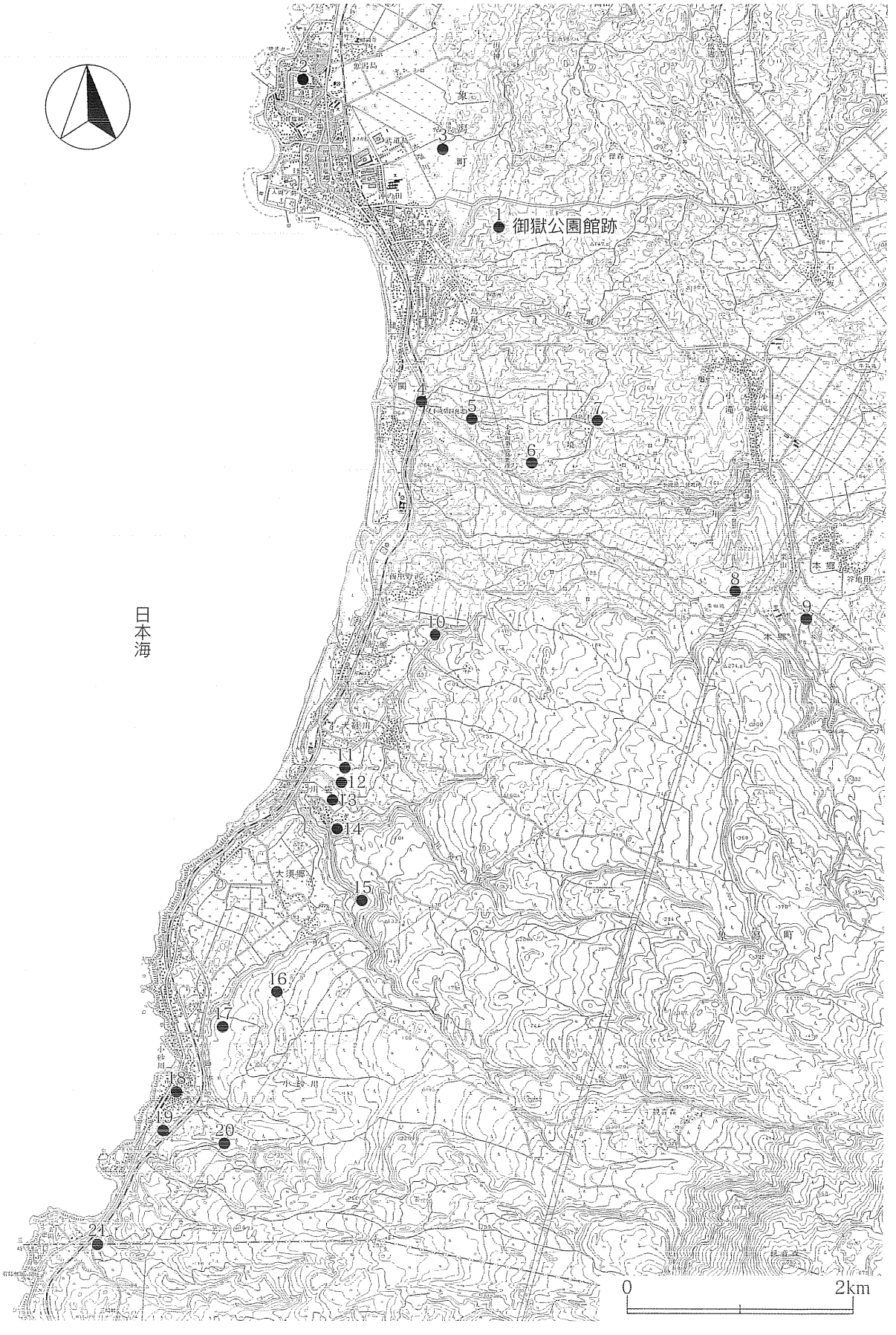
中世における象潟は、その攻防や支配に関する史料が少なく、由利郡全体の動きから当時をさぐるしかなくなる。

平安時代末期から鎌倉時代の由利郡の地頭は、由利氏というのが通説である。『仁賀保町史』によると、1085(応徳2)年に由利維安が根拠地として仁賀保町院内に山根館を築き、また郡内8ヵ所に陣代、4ヵ所に要塞を築いたとされている。その8ヵ所の陣代の1つが象潟の関古館であるとされる。『吾妻鏡』には、1189(文治5)年、奥州平泉追討の時、由利維平は、奥州軍として鎌倉方と戦い捕らえられるが、武人らしい振るまいが評価され、本領安堵となり鎌倉方に加わった。翌1190(文治6)年に藤原泰衡の遺臣、大河次郎兼任が7千の兵で男鹿、秋田で反乱を起こした時、維平はこれと戦い、毛々左田（現在の秋田市新屋付近）で戦死したが、まもなく乱が平定された。1213(建暦3)年、由利維久が和田合戦において謀反の疑いで領地を没収され、代わりに大弐局が由利郡の地頭となった、という記述がある。

14世紀になると、1291(正応4)年に由利郡に復帰した由利氏と鳥海氏(安倍宗任の子孫)が争い、1325(正中2)年、由利政春が由利町西滝沢の根城館で自害し、由利氏が滅亡した。由利氏を滅ぼした鳥海氏も1350(正平5)年、家臣の進藤氏、渡辺氏に滅ぼされた。進藤、渡辺の両氏も1363(正平18)年に住民の反乱によって滅ぼされた[註22]。その後は、住民の陳情によって関東管領から派遣された由利十二頭の時代となる[註23]。1346～70(正平年間)年の象潟では、信濃小笠原氏の一族池田豊後守茂政が塩越城を築城し、約100年間を支配したとされる[註24]。

戦国時代に入ると、1467(応仁元)年に由利十二頭の旗頭として仁賀保氏の祖、大井伯耆守友挙(次の代から仁賀保氏を名乗る)が由利郡に入り[註25]、同時に象潟は仁賀保氏の勢力下に入った。1575(天正3)年から仁賀保氏と矢島の大井氏との争いが、1588(天正16)年に仁賀保氏が大井氏を滅ぼすまで13年間続いた[註26]。1600(慶長5)年、関ヶ原の戦いの時、仁賀保挙誠は徳川方について上杉勢と戦うが、1602(慶長7)年に仁賀保挙誠が常陸国武田5千石に転封され[註27]、象潟を含めた由利郡は最上氏の支配下に入った。これにより由利十二頭時代は終わりを告げた。象潟町の中世城館として、『秋田県の中世城館』では8ヵ所が挙げられ、そのうち関古館(古館)、塩越城、関新館(新館)について記録されている[註28]。しかし、この中で現存が確認されているのは塩越城だけで、これは近世の遺構である。

江戸期に入った1622(元和8)年、最上氏はお家騒動で改易され、幕府の功臣で下野国宇都宮から左遷された本多正純が移封されるがこれもわずか1年で改易となった。その後仁賀保挙誠が1万石として由利郡にもどり、象潟の塩越館に本拠を構えた。1626(寛永3)年に仁賀保家は3家に分かれた。象潟は挙誠の嫡子良俊の7千石に含まれた。1631(寛永8)年、良俊が死去し嗣子がなかったため(末期養子禁止令違反のため)にお家断絶となり、鶴岡の酒井家へお預け(幕府領)となる。1640(寛永17)年、四国高松から生駒氏が1万石として象潟へ転封されるが、幕府による所領の入れ替えで象潟町は本荘



第5図　御嶽公園館跡と周辺遺跡位置図

藩六郷氏2万石の領地となった塩越地区、生駒氏領に組み込まれた上郷の横岡地区、幕府領として存続した上浜地区の分割支配へとかわる。1831(天保2)年、幕府による領地の入れ替えで、上浜地区の小砂川村と大砂川村の一部が幕府領として残り、他の旧幕府領はすべて生駒氏領へと移動した。(註29) 以上の領地変遷を経て今日に至っている。

第1表　御嶽公園館跡周辺の遺跡一覧

番号	遺　跡　名	所　在　地	時　代	種　別	備　考
1	御嶽公園館跡	象潟町字横山138外	縄文･中世･近世	館跡	
2	塩越城	象潟字二の丸10	中世	館跡	
3	水越	象潟町字水越110	弥生	遺物包含地	壺状土器片出土
4	下居権現森	象潟町関字下りの下72－2	縄文	遺物包含地	
5	関新館(新館)	象潟町関字赤坂24－3	縄文･中世	遺物包含地	
6	関古館(古館)	象潟町関字建森53番	縄文･中世	遺物包含地	
7	ヨシワ沢	象潟町関字ヨシワ沢21番	縄文	遺物包含地	
8	栗山池	象潟町関字栗山2番	縄文	遺物包含地	
9	萩坂	象潟町本郷字後川66－1	縄文	遺物包含地	
10	神田	象潟町洗釜字神田30番	縄文	遺物包含地	
11	ヲフキ	象潟町大砂川字ヲフキ27番	縄文･平安	遺物包含地	
12	菅先	象潟町大砂川字ヲフキ26番	縄文･古墳？	遺物包含地	金環・曲玉出土
13	川崎	象潟町川袋字川崎42番	縄文	遺物包含地	
14	滝の下	象潟町川袋字滝の下42	縄文	遺物包含地	
15	上熊ノ沢	象潟町大須郷字上熊ノ沢3	縄文･弥生	集落	
16	藤池	象潟町大須郷字藤池9	縄文	遺物包含地	
17	下向坂	象潟町小砂川字下向坂2－112	縄文	遺物包含地	
18	中磯	象潟町小砂川字中磯93･清水場124	縄文	遺物包含地	
19	カウヤ	象潟町小砂川字カウヤ58－3	縄文･奈良･平安･近世	遺物包含地	製塩遺跡
20	水上	象潟町小砂川字砂畑107－1	縄文	遺物包含地	
21	三崎	象潟町小砂川字三崎1の3	縄文	遺物包含地	

※番号は第5図上の番号に対応

註

註 1.平成7年の国勢調査に拠る統計値である。

註 2.泥流丘とも呼ばれ、泥流堆積物の特徴的な地形である。

註 3.新第三世紀の安山岩・泥岩の上を第四紀更新世の泥流(南由利原泥流・西由利原泥流)が覆っている。

註 4.出羽変動による褶曲と断層は、南北方向を軸とする地層の変位・変形である。

註 5.小滝集落付近の奈曽川(奈曽の白滝)に露出する。

註 6.径約2kmの南西に開いた爆裂火口と、鍋森を中央火口としている。

註 7.西鳥海山の西山腹に径約100mの火口を有する。

註 8.山頂部に北に開いた短径約3.5kmの爆裂火口と、新山を中央火口としている。

註 9.象潟町船岡の埋もれ木2,570±100年B.P.(Gak−6588)、仁賀保町釜ヶ台の杉の大木最外部2,730±100年B.P.(Gak−6587)、御嶽公園西方約750mの上狐森の枝(約2cm、長さ30cm)2,430±110年B.P.と報告。

註10.奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター発掘技術研究室長光谷拓実氏に拠る。

註11.奈曽川を境として、縄文時代の周知の遺跡数は、北1に対して南7である。

註12.パリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。

註13.『出羽国風土記』によると、東西1.5km、南北は5kmとされている。

註14.被害地は羽後本荘(秋田)から羽前鶴岡(山形)にまで及んだ。記録された死者数400人、全壊家屋8,000戸に及んだ。全壊率は小砂川で100%、象潟(塩越)で85%、平沢で50%であった。震央は鳥海山の南東麓と推定される。

註15.稲の低温障害を克服するために、1927(昭和2)年に佐々木順次氏が発案実施した。水が太陽光線にあたる面積を増やすため、河を低勾配で幅広にしている。

註16.明治初期は、秋田県からの米が水分の多さから腐れやすく、運び先などですでに腐っていたときがあった。このため秋田県の米の品質が疑われることになったが、本荘市・由利郡では腐れ米発生率が低く、評価が高かった。

註17.本社は東京都中央区日本橋にある。

註18.『家の下遺跡(2)旧石器時代編』に、秋田県における旧石器時代遺跡一覧が載っている。

註19.ヲフキ遺跡は平成元年の調査では、縄文時代前期〜晩期、平安時代の複合遺跡であるとしているが、1999(平成11)年の調査で、中世から近世にかけての掘立柱建物跡が見つかっている。

註20.第1表参照。

註21.『秋田県史　考古編』、『山形県の古墳』に記録が載っている。

註22.『仁賀保町史』に拠る。

註23.由利十二頭には諸説があり、解明されていない点が多い。

註24.『象潟町史　資料編Ⅰ』に拠る。

註25.『寛政重修諸家譜』に拠る。

註26.『由利十二頭記』に拠る。

註27.『奥羽永慶軍記』に拠る。

註28.『秋田県の中世城館』では、関新館、関古館となっているが、『秋田県遺跡地図(中央版)』では、新館、古館となっている。

註29.註24と同じ。

参考文献

・象潟町　『象潟町史』　1968(昭和43)年
・仁賀保町　『仁賀保町史』　1972(昭和47)年
・加藤万太郎　「鳥海山北西麓　象潟泥流の分布と形成年代について」　『秋田地学』　No.26　p10～14　1977(昭和52)年
・秋田県　『秋田県史　考古編』　1977(昭和52)年
・加藤万太郎　「秋田県の第4紀層の^{14}C年代と象潟泥流について」　『秋田博研報』　No.3　p56～63　1978(昭和53)年
・植木貞人　『鳥海山の活動史』　自然災害特別研究班成果　No.A-56-1　p33～37　1981(昭和56)年
・秋田県農政部農地整備課　『土地分類基本調査　本荘』　1981(昭和56)年
・秋田県教育委員会　『秋田県の中世城館』　秋田県文化財調査報告書第86集　1981(昭和56)年
・通商産業省工業技術院地質調査書　『象潟地域の地質(酒田地域の一部、飛島を含む)』　地域地質研究報告5万分の1図幅秋田(6)第37号　1982(昭和57)年
・秋田県農政部農地整備課　『土地分類基本調査　矢島』　1982(昭和57)年
・本荘市　『本荘市史　資料編Ⅰ上』　1984(昭和59)年
・本荘市　『本荘市史　資料編Ⅰ下』　1985(昭和60)年
・宮城一男　『秋田県　地学のガイド』　コロナ社　1986(昭和61)年
・秋田県教育委員会　『カウヤ遺跡第2次発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第135集　1986(昭和61)年
・秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第179集　1989(平成元)年
・金浦町　『金浦町史』　1990(平成2)年
・秋田県教育委員会　『秋田県遺跡地図(中央版)』　1990(平成2)年
・秋田県教育委員会　『ヲフキ遺跡発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第199集　1990(平成2)年
・秋田県教育委員会　『上熊ノ沢遺跡発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第213集　1991(平成3)年
・山形県埋蔵文化財センター　『山谷新田遺跡発掘調査報告書―国営農地開発事業鳥海南麓地区(1)―』　山形県埋蔵文化財調査報告書第170集　1991(平成3)年
・山形県埋蔵文化財センター　『山海窯跡群第2次発掘調査報告書―国営農地開発事業鳥海南麓地区(2)―』　山形県埋蔵文化財調査報告書第172集　1991(平成3)年
・冨樫泰時　「年輪が語る鳥海山―紀元前466年に大噴火―」　『教育秋田』　No.564　p4～5　1996(平成8)年
・象潟町　『象潟町史　資料編Ⅱ』　1996(平成8)年
・由利町教育委員会　『小坂下遺跡―町道「前郷蟹沢線」道路改良工事に係る埋蔵文化財範囲確認調査―』　1998(平成10)年
・鳥海町教育委員会　『堤鍋遺跡―鳥海町統合中学建設用地造成工事に係る埋蔵文化財範囲確認調査―』　1998(平成10)年
・象潟町　『象潟町史　資料編Ⅰ』　1998(平成10)年
・西目町　『西目町史』　1998(平成10)年
・秋田県教育委員会　『家の下遺跡(2)旧石器時代編』　秋田県文化財調査報告書第275集　1998(平成10)年
・仁賀保町教育委員会　『山根館跡―「にかほ史跡の里づくり事業」に係る予備発掘調査報告書―』　1999(平成11)年
・秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第291集　1999(平成11)年

第3章　発掘調査の概要

第1節　遺跡の概観

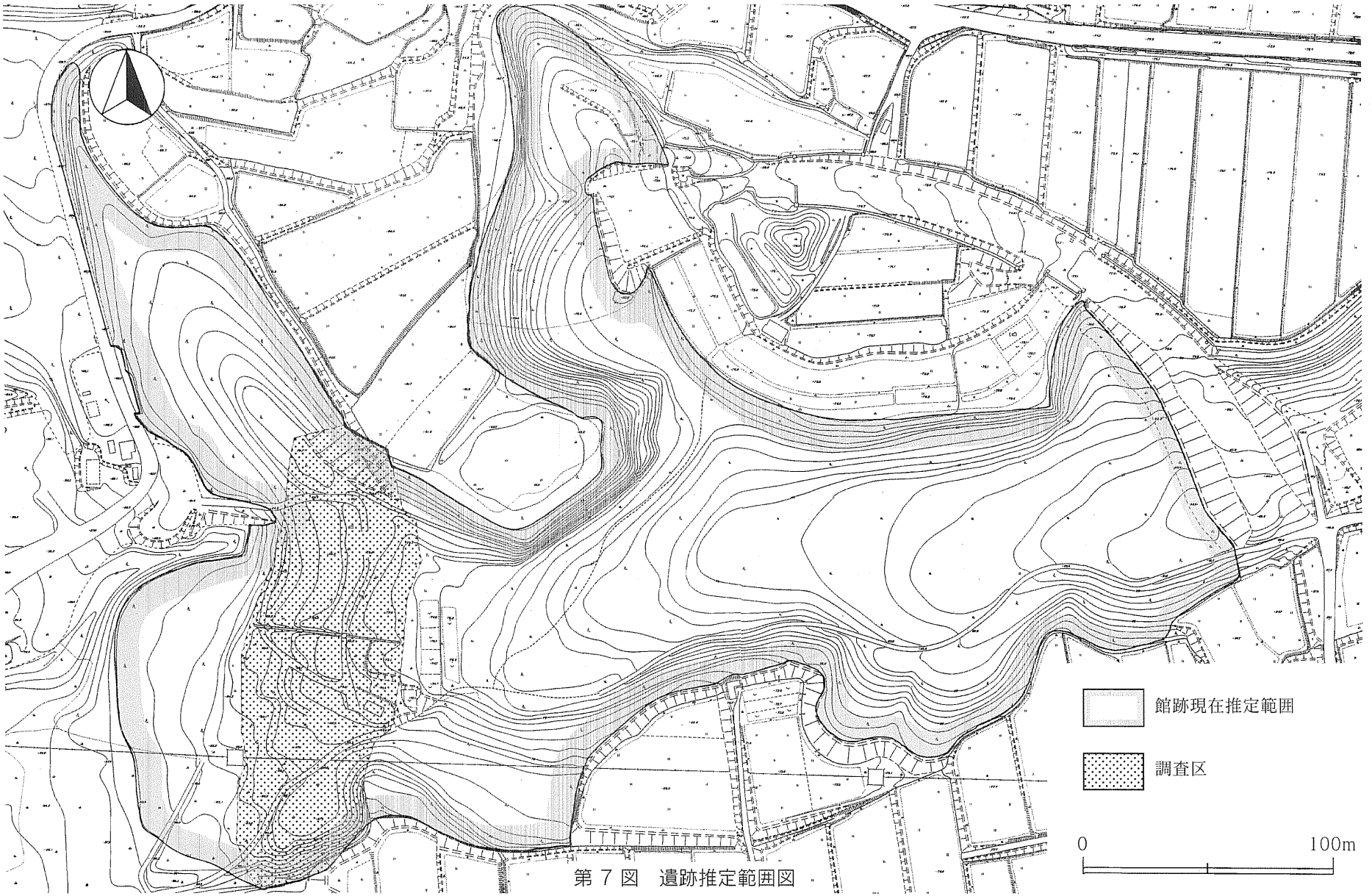
御嶽公園館跡は既述のとおり、象潟町南東部の山形県との県境上に聳え立つ「出羽富士」とも呼ばれる美しいコニーデ型の活火山である鳥海山の北西麓端部、標高53～92mの台地上に立地する。この鳥海山に源を発する豊富な伏流水が日本海に流れ出す象潟町沿岸南部の小砂川海岸一帯は、真夏でも新鮮な天然岩牡蠣が採れる名産地である。この地域における自然的恩恵の母体ともいえる鳥海山の麓、本館跡が立地する台地上から北西方向を俯瞰すると、彼の俳人松尾芭蕉が『奥の細道』紀行で遥々訪れ、その美しさに見惚れて名句を残した九十九島が美観を保ち、その昔、宮城松島と並ぶ景勝地として古より歌人の西行をはじめ多くの文人・墨客を魅了してきた眺望が眼前を覆う。

本館跡全体の推定範囲は通称「御嶽公園」と呼ばれている既述の台地とその周辺域一帯で、東西約800m、南北約500mを測り、面積にして約400,000m²の広がりを有する非常に大規模なものとなる(第7図)。西側には比較的大きな開析谷が入り込んでいるが、廃棄物処理場として埋め立てられており、北側や南側の開析谷は湿地や水田となっている。これら開析谷によって、本館跡は全体的に南北に入り組んだ地形となっている。また、台地西側先端部の裾野一帯は、北の方に緑ヶ丘墓地が、南の方に桜ヶ丘団地がそれぞれ造成されており、かなりの規模で削平を受けていると思われる。しかし、この墓地と団地の間に幅約25m、長さ約50mの空堀状の凹地が認められ、団地の東側斜面に段築の形跡を残す階段状の地形が辛うじて削平を免れて旧地形を保っている。なお、墓地は段状になっているが、館に伴う段築をそのまま利用して造成されたらしい。

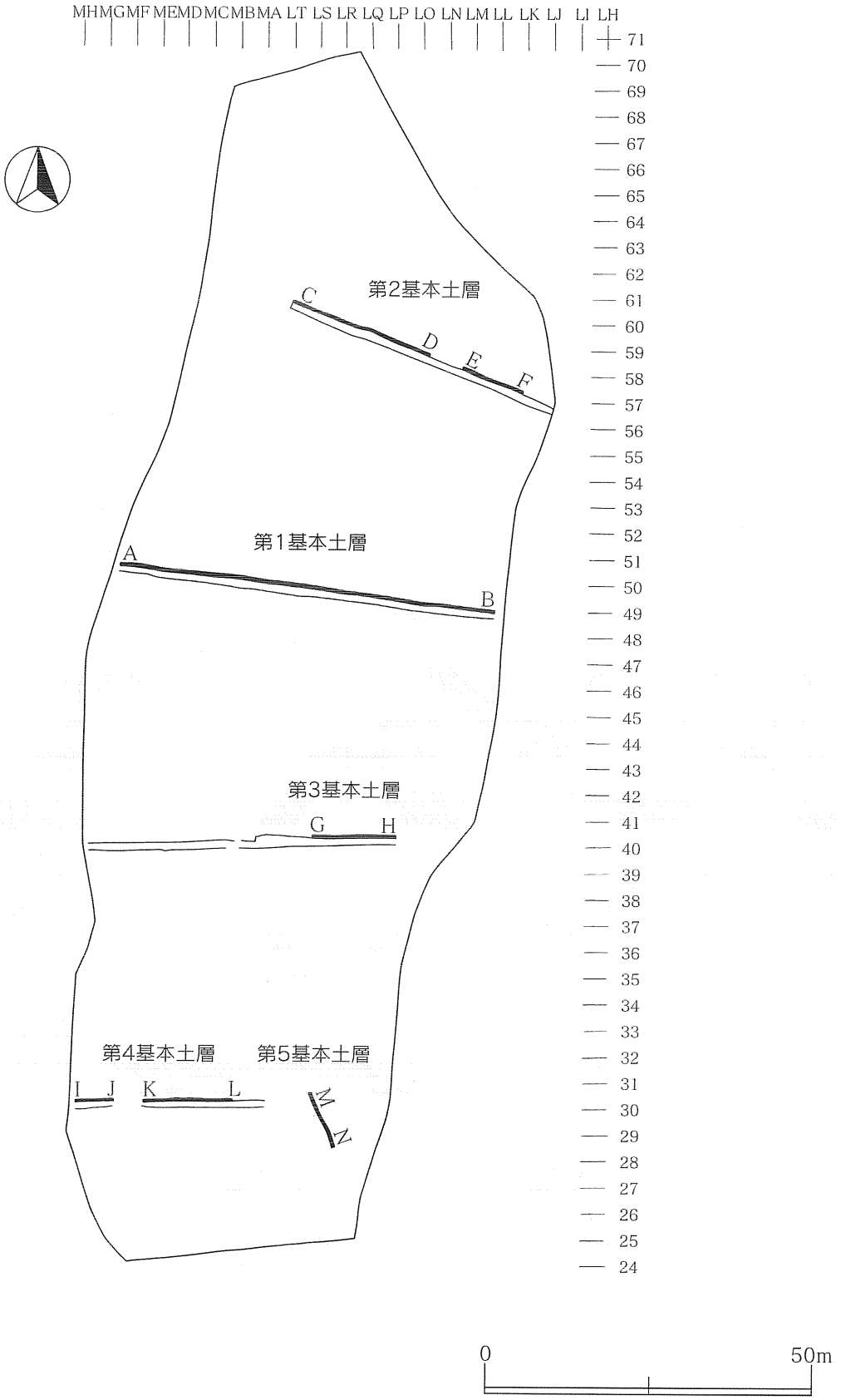
館跡推定範囲の中心部やや東寄りの最高所(標高約92m)には、段築と石囲いによって画然と区画された曲輪が幾つも確認できる。この平場の北側斜面には、雑木や雑草に覆われてやや判り難い部分もあるが、断面がV字形の溝が斜面を巻くようにほぼ同じ標高(約80m)で南西―北東方向に延びているのを確認できる。この溝跡は、その形状や規模から空堀と判断されている。さらに、上記曲輪群を挟む南北両側の斜面は急傾斜となっており、切岸の可能性も考えられる。この区域はいずれも調査区外であるが、現地形でこれらの中世における館に伴う遺構と判断でき得る地形が幾つも確認できることから、本館跡の主要部(主郭)と考える。この他、推定範囲内の斜面には悉く段築が刻まれており、部分的にある程度の広さと土塁状の地形によって区画された曲輪と判断できる平場が数ヵ所確認できる。また、空堀の跡と思われる溝や凹地も部分的ではあるが数ヵ所で確認されている。これらの地形は全て現地形で確認できるものである(第6図)。

今回の調査区は、上記主要部の南西側斜面中腹(標高63～73m)に位置する(第6図)。調査区北側では東(高)から西(低)に一部帯曲輪あるいは腰曲輪と思われる段状地形(段築)が、自然地形の傾斜に沿って5～6段現地形で確認できる。段差は最大で約2m、その断面には緩やかな斜面の上方を削り、下方への盛土と整地を繰り返した大規模な段築造成の跡が確然と土層に刻まれていた。この段状地形は、調査区外西側の廃棄物処理場まで整然と10数段連なる。また、調査区南側では北東(高)から南西(低)に現代の水田跡と思われる畦畔によって区画された段状地形が7段確認された(第13図)。この段差

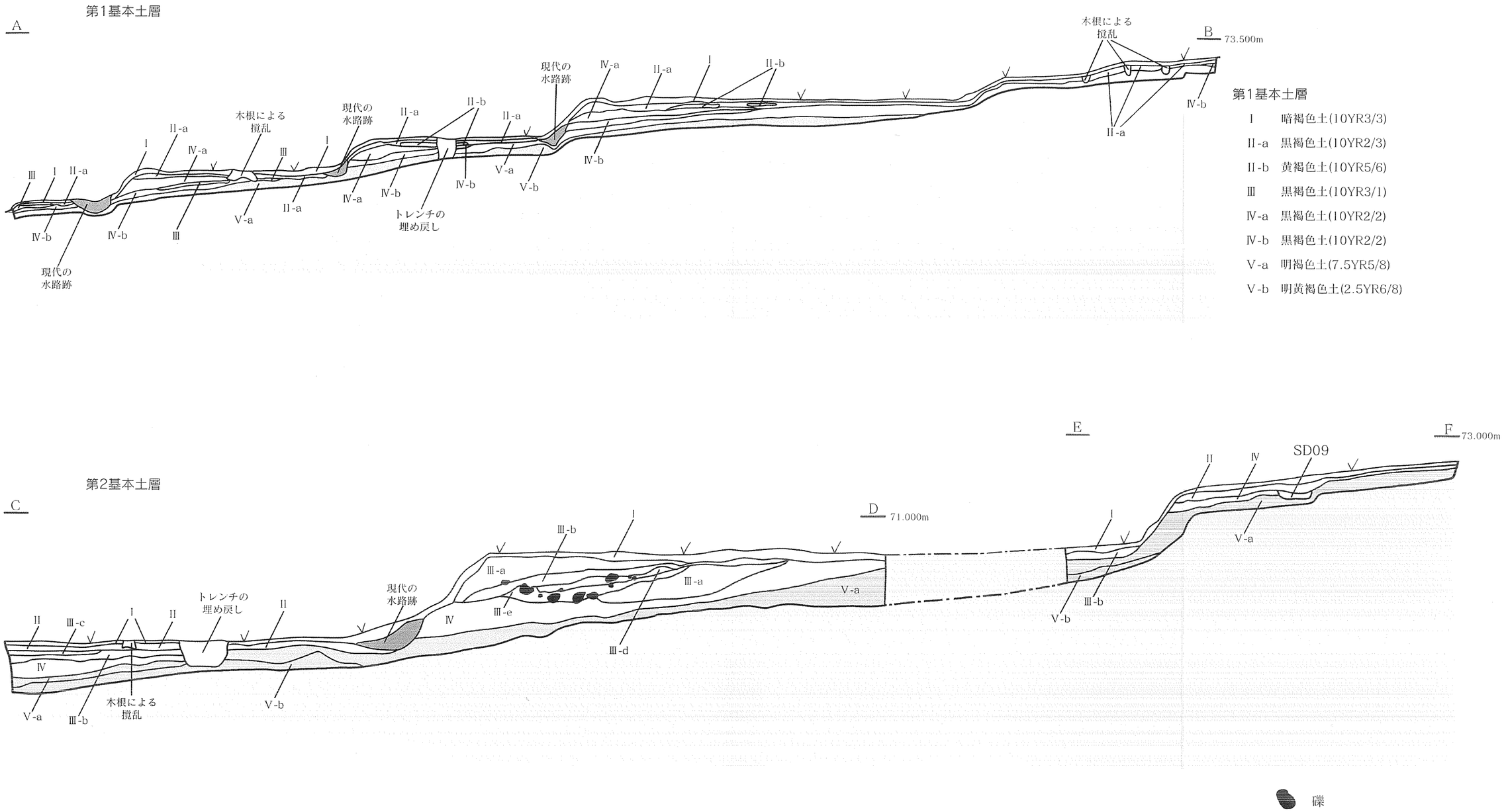
第６図　遺跡と周辺の現況地形図



第７図　遺跡推定範囲図



第８図　基本土層ベルト配置図



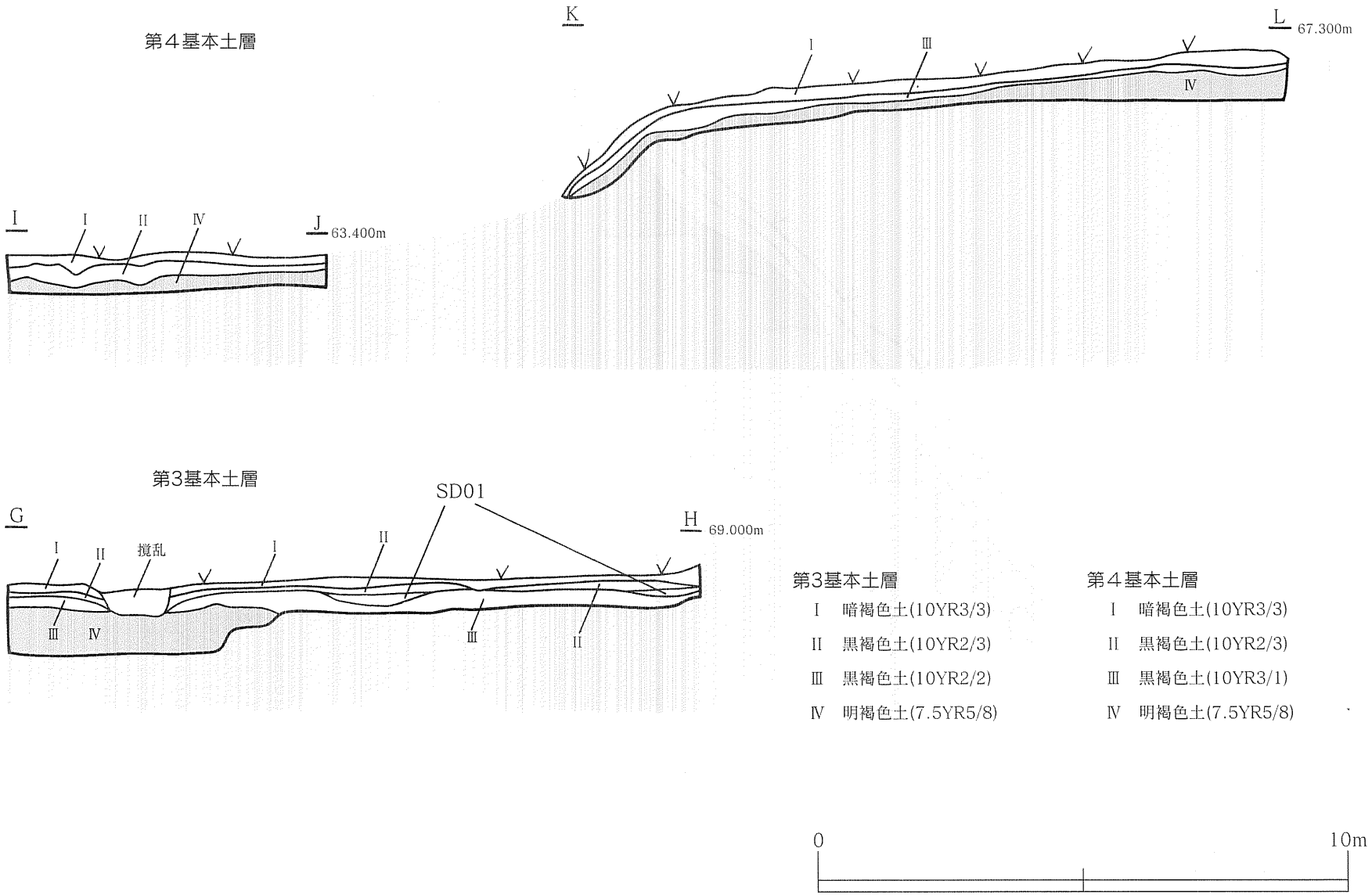
第1基本土層

Ⅰ	暗褐色土(10YR3/3)
Ⅱ-a	黒褐色土(10YR2/3)
Ⅱ-b	黄褐色土(10YR5/6)
Ⅲ	黒褐色土(10YR3/1)
Ⅳ-a	黒褐色土(10YR2/2)
Ⅳ-b	黒褐色土(10YR2/2)
Ⅴ-a	明褐色土(7.5YR5/8)
Ⅴ-b	明黄褐色土(2.5YR6/8)

第2基本土層

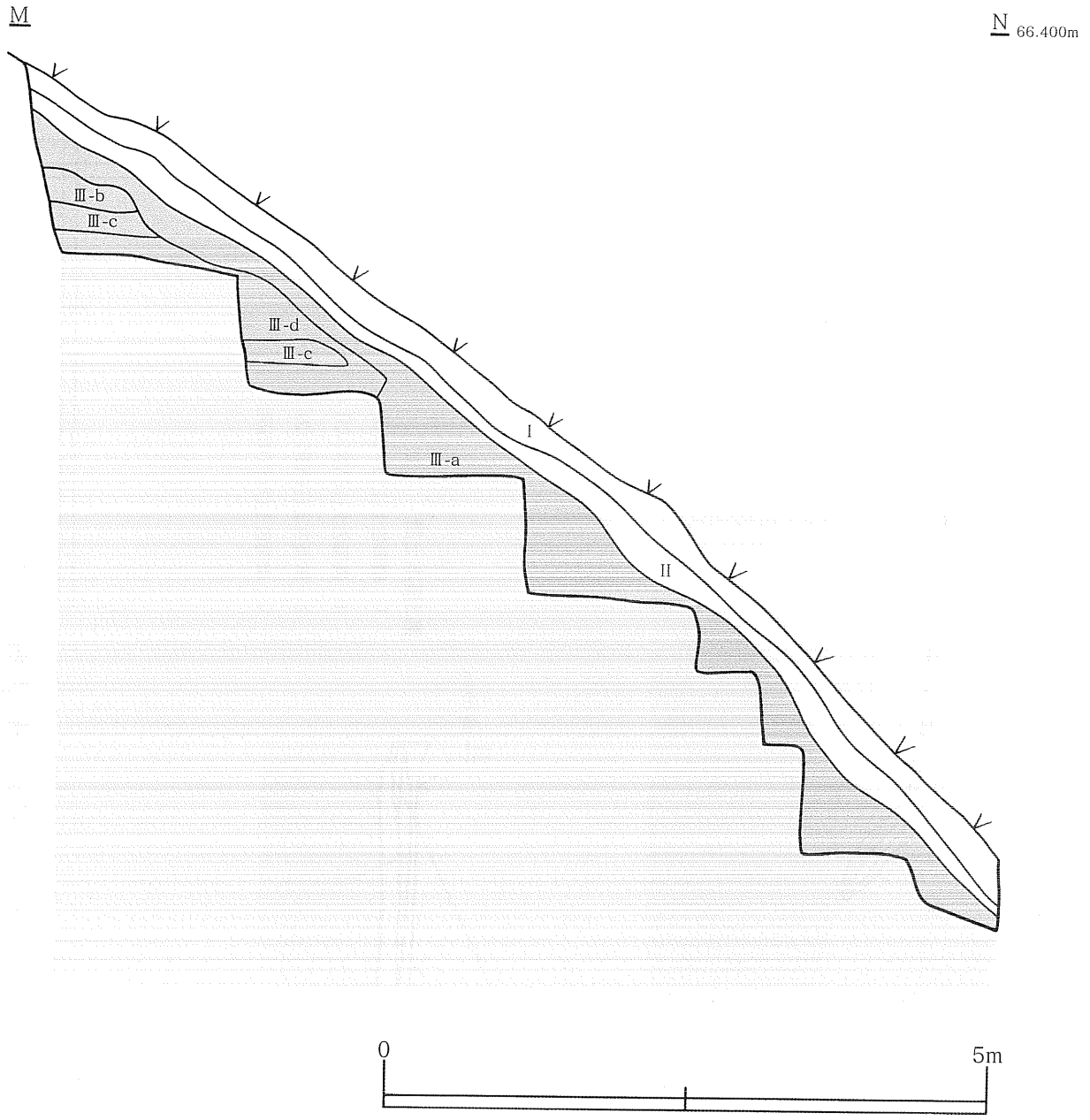
Ⅰ	暗褐色土(10YR3/3)	Ⅲ-d	褐色土(10YR4/4)
Ⅱ	黒褐色土(10YR2/3)	Ⅲ-e	黒褐色土(10YR2/2)
Ⅲ-a	黄褐色土(10YR5/8)	Ⅳ	黒褐色土(10YR2/2)
Ⅲ-b	黒褐色土(10YR3/1)	Ⅴ-a	明褐色土(7.5YR5/8)
Ⅲ-c	黄褐色土(10YR5/6)	Ⅴ-b	明黄褐色土(2.5YR6/8)

第 9 図　第1・2基本土層図



第10図　第3・4基本土層図

第5基本土層



第5基本土層

Ⅰ　暗褐色土(10YR3/3)

Ⅱ　褐色土(10YR4/4)

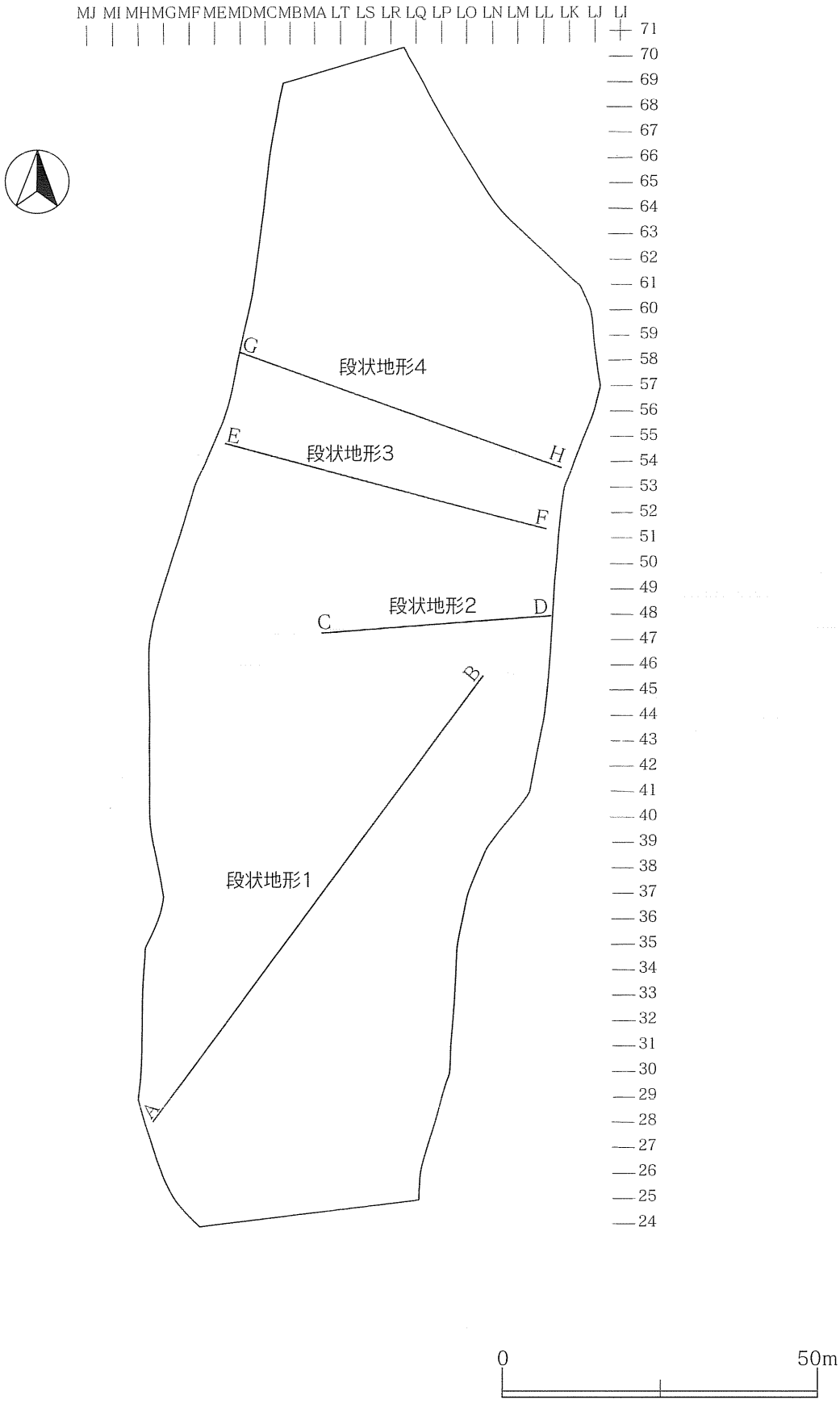
Ⅲ-a　明褐色土(7.5YR5/8)

Ⅲ-b　明黄褐色土(2.5YR6/8)

Ⅲ-c　明黄褐色土(2.5YR6/8)

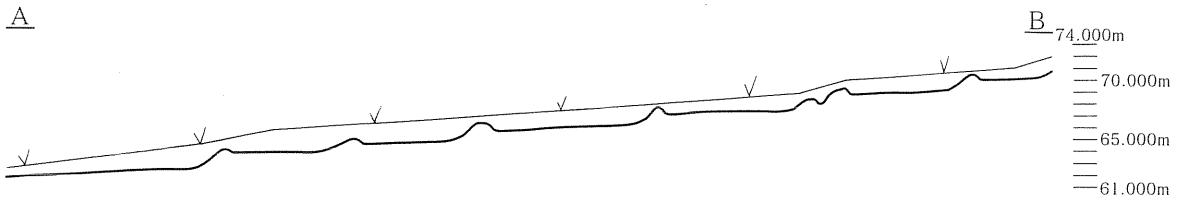
Ⅲ-d　明黄褐色土(2.5YR6/8)

第11図　第5基本土層図

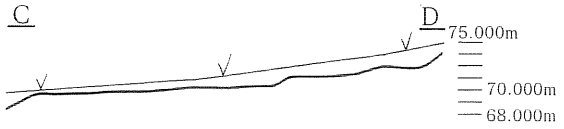


第12図　段状地形エレベーション配置図

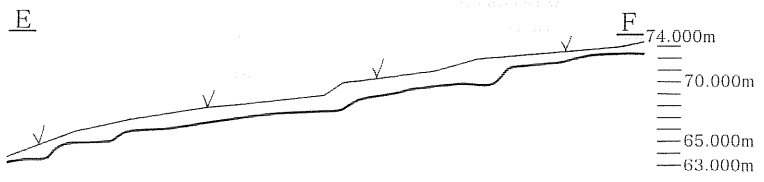
段状地形1



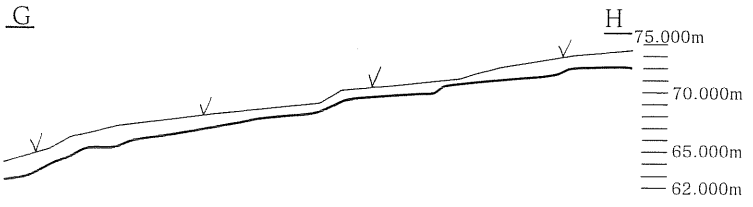
段状地形2

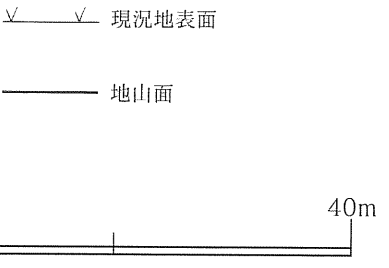


段状地形3



段状地形4





第13図　段状地形エレベーション図

はいずれも1m前後～2mである。さらに、調査区南端部の急斜面にテラス状に突き出した半円形の平場の縁には、一部途切れているが、土塁状に盛り上がった土手が廻り、この平場の周囲を斜面側と隔絶している。

調査区内において現地形で確認できた中世の館に伴うと思われる地形は、段築6段(内2段は帯曲輪状の平場)と土塁1条である。調査の結果、現代の削平後の残存部分を検出できたのは、空堀跡1条と土塁2条である。また、館跡との関係は不明であるが、断面が逆台形の溝跡が2条、長円形の浅い土坑が1基、柱穴様ピットが5基、多量の炭化物と少量の焼土を伴った不定形の浅い穴が4基検出された。さらに、調査区北西端部の沢口からは、縄文時代前期と推定できる狩猟用の陥し穴あるいはその転用としての墓穴の可能性が考えられる土坑が6基検出され、その内1基から石鏃6点の出土を確認している。この他に遺構外の出土で密度は低いが、調査区のほぼ全域に渡って近世以降の陶磁器や金属製品などが200点余り出土している。

調査区およびその周辺域に関する現代(昭和期～今日)の地業歴を調べたところ、昭和11年に調査区の約8割の面積において水田の造成工事が行われていることが判明した。戦中にかけて水田として耕作し、戦中から戦後にかけて一時畑地として耕作した後、昭和30年代から杉を植林し現況に至っているが、近年、土地所有者が個人的に耕地整理を行ったり、調査区の西側境界際に高圧電線用の鉄塔が建っているが、その建設工事の際に部分的にかなりの地形改変があったようである。その影響で調査区内の基本層序は場所によって微妙な違いを呈する。そこで調査区内の段状地形と斜面に直交する方向で掘削したトレンチの壁面に現れた土層断面をもって個々に基本土層とした。それぞれの層序については以下のとおり観察できた。

第1基本土層(館跡の段築を地形的に利用して現代の耕地造成が行われた区域，第9図)

第Ⅰ層　暗褐色土：腐葉を多量に含み、杉や灌木の根が多く入り込んだシルト質の現表土層である。層厚は4～40cmである。

第Ⅱ層　黒褐色土(a)、黄褐色土(b)：φ10～30mmの地山塊やφ1～5mmの地山粒を部分的に多量に含んだ締まりのある粘土質の整地層で、現代の水田造成に伴う鋤床層および畦畔の盛土である。層厚は鋤床層で平均10cmの水平層を成し、畦畔部分で平均48cmである。

第Ⅲ層　黒褐色土：φ10～20mmの地山塊やφ1～5mmの地山粒を少量含んだ整地層で、部分的に残存する中世の築館に伴う地業痕跡と考える。層厚は6～12cmである。

第Ⅳ層　黒褐色土：締まりのある多少粘性を帯びたシルト質の旧表土層で、第Ⅲ層を基準にしてそれ以前の堆積(b)とそれ以降の堆積(a)がある。層厚は8～90cmであるが、部分的に削平されて層位的な連続性を欠いている。

第Ⅴ層　黄褐色土(a)、明黄褐色土(b)：上層はしっかりと締まった粘土(a)、下層は砂を多量に含んだシルト質土(b)の地山である。

第2基本土層(館跡の段築を地形的に利用して現代の耕地造成が行われた区域，第9図)

第Ⅰ層　暗褐色土：腐葉を多量に含み、杉や灌木の根が多く入り込んだシルト質の現表土層である。層厚は6～30cmである。

第Ⅱ層　黒褐色土：φ10～20mmの地山塊やφ1～5mmの地山粒を部分的に多量に含んだ締まりのある整地層で、現代の水田造成に伴う鋤床層および畦畔の盛土である。層厚は鋤床層で

平均7cmの水平層を成し、畦畔部分で平均20cmである。

第Ⅲ層　黄褐色土(a・c)、褐色土(d)、黒褐色土(b・e)：下層に崩落防止と基盤強化のためにφ20～300㎜の大中礫を多量に含んだシルト質土(e)や粘性の非常に強い地山土(a)が盛られ、その上にφ1～5mmの地山粒とφ1～20mmの小礫を多量に含んだ粘土質土(d)が盛られ、さらにその上にφ10～20mmの地山塊やφ1～5mmの地山粒とφ1～5mmの細礫を多量に含んだシルト質土(b)が盛られ、上層にφ10～30mmの地山塊を多量に含んだ粘土質土(c)や再び地山土(a)が盛られ整地されている。中世の築館に伴う地業痕跡(段築)と考える。層厚は10～118cmである。

第Ⅳ層　黒褐色土：締まりのある多少粘性を帯びたシルト質の旧表土層で、層厚は14～80cmである。

第Ⅴ層　黄褐色土(a)、明黄褐色土(b)：上層はしっかりと締まった粘土(a)、下層は砂を多量に含んだシルト質土(b)の地山である。

第3基本土層(耕地造成等によってそれ以前の地形の大部分が削平および改変された区域，第10図)

第Ⅰ層　暗褐色土：腐葉を多量に含み、杉や灌木の根が多く入り込んだシルト質の現表土層である。層厚は6～22cmである。

第Ⅱ層　黒褐色土：φ10～20mmの地山塊やφ1～5mmの地山粒を部分的に多量に含んだ締まりのある整地層で、現代の水田造成に伴う鋤床層である。層厚は6～32cmである。

第Ⅲ層　黒褐色土：締まりのある多少粘性を帯びたシルト質の旧表土層で、層厚は14～40cmである。

第Ⅳ層　黄褐色土：しっかりと締まった粘土の地山である。

第4基本土層(道路を挟んで東側がテラス状地形、西側が現代の水田跡，第10図)

第Ⅰ層　暗褐色土：腐葉を多量に含み、杉や灌木の根が多く入り込んだシルト質の現表土層である。層厚は6～78cmである。

第Ⅱ層　黒褐色土：φ10～20mmの地山塊やφ1～5mmの地山粒を部分的に多量に含んだ締まりのある整地層で、現代の水田造成に伴う鋤床層である。層厚は10～40cmである。

第Ⅲ層　黒褐色土：φ10～30mmの地山塊やφ1～5mmの地山粒を少量含んだ整地層で、部分的に残存する中世の築館に伴う地業痕跡と考える。層厚は4～40cmである。

第Ⅳ層　黄褐色土：しっかりと締まった粘土の地山である。

第5基本土層(調査区南端部テラス状地形縁からの急斜面，第11図)

第Ⅰ層　暗褐色土：腐葉を多量に含み、杉や灌木の根が多く入り込んだシルト質の現表土層である。層厚は16～32cmである。

第Ⅱ層　褐色土：全体的にほとんど混入物が認められない粘土質土で、上層はやや脆く下層は地山との分層付近で漸移的な様相を呈する。層厚は10～30cmである。

第Ⅲ層　黄褐色土(a)、明黄褐色土(b・c・d)：上層に微細な砂を少量含んだ粘土(a)、その下に多量の砂を含んだシルト質土(b)、さらにその下に多量の砂の中に酸化鉄の細塊を少量含んだシルト質土(c)、下層にほとんど砂に近い状態のシルト質土が堆積している地山である。

第2節　調査の方法

発掘調査はグリッド法を採用した。調査区内に設置されている主要地方道象潟矢島線建設の道路中心杭(STA.No.40＋00)をグリッド原点MA50とし、この原点杭から磁北に合わせた南北基線と、これに直交する東西基線を設け、4m×4mのグリッドを設定した。また、グリッド杭には、東から西に向かって東西方向を表すLI……LT・MA……MHというアルファベットと、南から北に向かって昇順し南北方向を表す24……70の2桁の数字を組み合わせた記号を付し、4m×4mの方眼杭の南東隅をグリッドの呼称とした。このグリッドを調査区全域に設定することにより、計画的な調査と同時に遺構・遺物の平面的な位置の把握に努めた(第14図)。

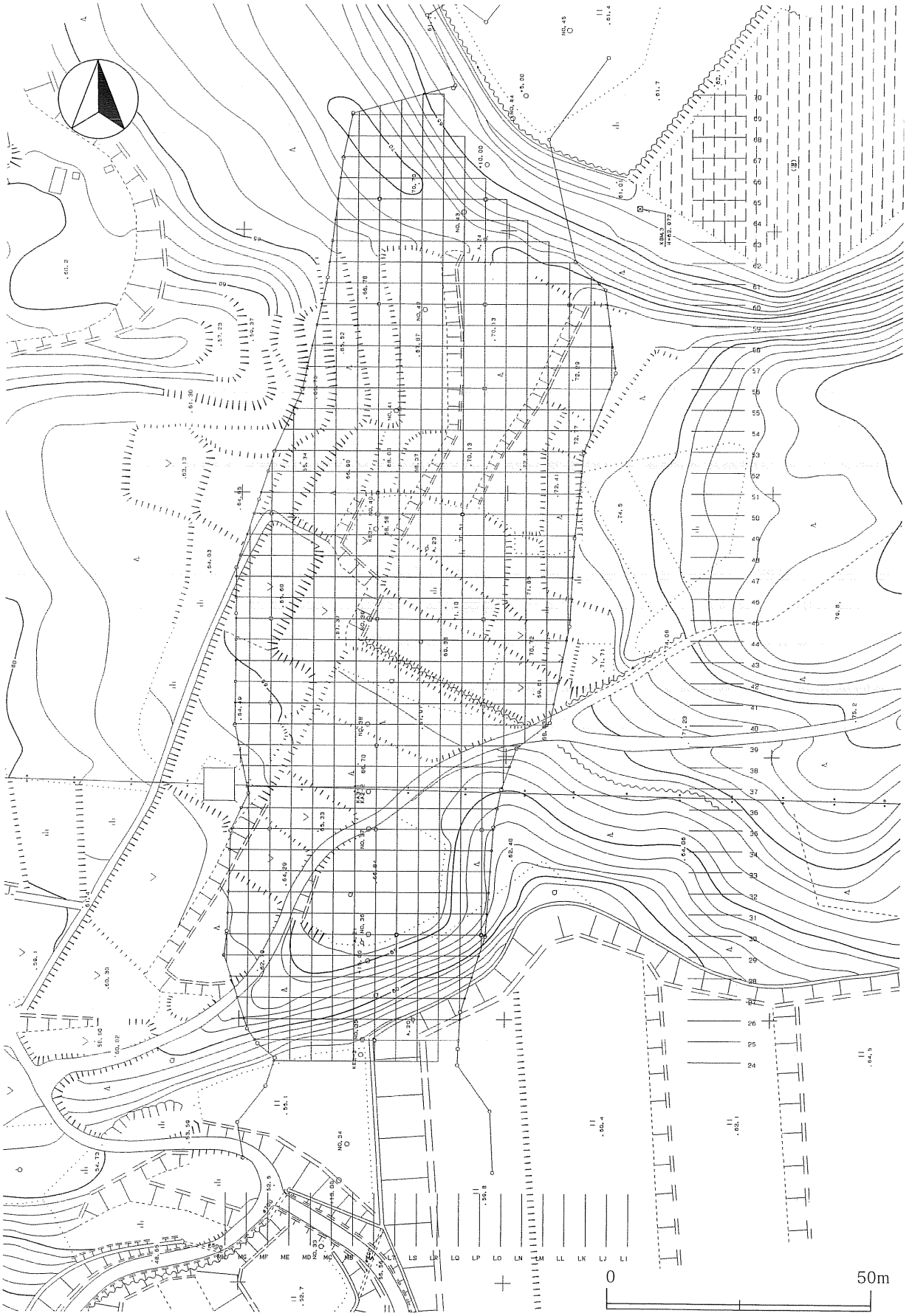
調査区南端からSTA.No.37＋00の道路中心杭に対応する道路幅杭を結ぶラインまでの区域をA区、STA.No.37+00の道路中心杭に対応する道路幅杭を結ぶラインからSTA.No.40+00の道路中心杭に対応する道路幅杭を結ぶラインまでの区域をB区、STA.No.40＋00の道路中心杭に対応する道路幅杭を結ぶラインから調査区北端までの区域をC区として調査区を3区域に分割して調査した。

表土除去は、調査区南端部のテラス状地形と調査区北東端部の境界際については人力で行い、それ以外は全て重機で行った。表土下からの掘り下げは人力で少しずつ行い、遺構検出や遺物出土の有無を確認し、遺構・遺物の遺存が全く認められない現代の撹乱層については、部分的に地山面まで一気に重機を用いて掘削した。なお、C区内には道路用地未買収の区域が残存していたため、その部分については調査許可が出るまで立ち入り禁止とし、調査期間終盤に許可が下りたところで重機と人力で遺構確認面まで一気に掘り下げ、調査を敢行した。

遺構の確認は、極力遺構の掘り込み面での検出に努めようとしたが、現代の耕地造成に伴う削平や木根による撹乱が多い中での検出作業とあって困難を極めた。その結果、ほとんどの遺構は地山面での確認となった。検出された遺構は、トータルステーションを用いて平面および断面の実測を行い、調査区全域における通し番号を付した。なお、一部の遺構と基本土層の断面については細かい分層線が込み合っていたため手実測を行った。

遺物は、遺構内出土については、遺跡名・調査区画名(A区、B区、C区)・出土遺構名・遺物番号(遺構内通し番号)・出土年月日を付し、遺構外出土については、遺跡名・調査区画名(A区、B区、C区)・出土グリッド・遺物番号(調査区画内通し番号)・出土年月日を付し、それぞれトータルステーションを用いて出土地点および出土レベルを実測して取り上げた。調査現場において大部分の出土遺物の洗浄を行い、残りは調査終了後、埋蔵文化財センター内で洗浄を行った。さらに、同センター内において注記・接合・実測・写真撮影等を行った。

調査の記録は、主に図面と写真によった。図面は基本的には1/20の縮尺で作成したが、一部土坑や柱穴様ピットについては1/10とした。トータルステーションを用いて実測した遺構や遺物は、図形化処理やドットマップ化処理を施して平面図や断面図を作成した。さらに、これらの遺構平面図と調査範囲図等から遺構配置図など必要な図面も作成した。検出遺構と遺物の出土状況の写真撮影は、35mmのモノクロ・ネガカラー・カラーリバーサルフィルムを使用した。遺跡全体の調査前現況俯瞰写真(図版1)は、航空機による空中写真撮影によった。なお、この写真と地上補足測量によって、縮尺1/500の調査前現況地形図(第6図)を作成した。



※方眼は4m×4m

第14図　グリッド配置図

第3節　調査の経過

発掘調査は平成11年6月7日～10月13日まで行われた。

平成11年	発　掘　状　況	特　記　事　項　①	特　記　事　項　②
6/7～11	資･器材の整理と様々な細工 調査区内への機材搬入 基本土層調査開始	佐々木(政)、南端急斜面に果敢にトライ　システム提案のサポート不十分	11)象潟町教育委員会から松本主事調査参加　8)佐藤茂樹(新非常勤職員)着任
6/14～18	調査区内に仮小屋製作･設置　ベルコン設置 南端部土塁状地形の土層観察　南端部テラス表土剥ぎ(人力)	16)システム提案の不具合解消サポート実施	16)システム提案来跡　17)児玉補佐来跡
6/21～25	南端部テラスの表土剥ぎ･地山精査 給油用車両の進入路造成	21)水準測量及び方眼杭打設業務完了(風間設計)　21)地形測量業務開始(シン技術コンサル)	22)象潟町教委の佐藤主査、齋藤主査来跡　23)象潟町教委、佐藤学校教育課長(兼郷土資料館長)来跡　25)児玉補佐来跡　詳細な調査指導を得る　多数の段状地形は館跡を構成するものだろう
6/28～7/2	重機による表土除去(南端部1段～7段までと西端部1段目) 表土除去した段ごとに抜根作業と整地層掘り下げ 光波計測による遺物取り上げ 調査区をA･B･C区に分ける	30)S11年の水田造成に関する資料と当時の関係者の証言を得る	29)児玉補佐、榮学芸主事来跡　30)飯富氏（S11年の耕地整理組合関係者)来跡　2)象潟町教委、齋藤主査来跡。2)児玉補佐来跡
7/5～9	南端部1段～3段の整地層掘り下げと地山精査	5)遺構検出(北東端) 調査開始から一ヶ月、遺物少なし決定的遺構無しという状況　8)プラン7つ検出	7)櫻田補佐と児玉補佐来跡　今後の調査工程についての指導8)秋田県由利建設事務所長、同道路課(原因者)の加賀主査来跡
7/12～15	再び整地層の全面掘り下げと地山精査　プラン完掘平面･土層断面実測	12)追加雇用の作業員5名	12)秋田県由利地方部長他、地方部幹部来跡 14)児玉補佐来跡　事務連絡のみ
7/19～21	A～B区段状地形1段～3段地山精査	21)5段目の溝状プランが薬研堀跡の一部と判明	21)象潟町教委の齋藤、松本両氏来跡
7/26～30	B区地山精査	28)学生アルバイト1名就労　29)象潟町教委の齋藤、松本両氏来跡 30)しんせい農業協同組合職員来跡(航空防除農薬散布について)	27)前象潟町郷土資料館長の横山氏来跡28)文化課の谷地学芸主事、三浦所長、児玉補佐今後の調査工程の見直しについて来跡
8/2～6	B区6段目全体のII層掘り下げと地山精査 ベルコン撤去後の南端部テラスの全面掘り下げ C区東端部境界沿いのII層掘り下げと抜根	4)SX05検出 6)SD01の延伸部分6段目で検出	2)追加雇用作業員1名就労開始　連日の猛暑で太田ダウン
8/9～13	盆休暇で現場を閉鎖するための撤収作業	調査工程の前半終了	
8/16～20	B区地山精査 C区抜根作業	16)17)お盆休暇のため現場閉鎖	18)本荘市在住の発掘調査専門家の伊藤種秋氏来跡。
8/23～27	区重機で表土剥除去 B区駄目押し地山精査　SD01精査	23)午後作業中止 24)25)終日中止　26)作業員1名退職	23)象潟町教委の齋藤主査、松本主事来跡 25)システム提案サポート　26)町内の歴史愛好者3名来跡
8/30～9/3	C区重機で表土剥除去 B区駄目押し地山精査　SD01精査	未買収地伐採木置き場でプラン確認(範確で確認済み)	30)追加雇用作業員1名就労開始　2)町内の歴史愛好者1名見学
9/6～10	C区東端から抜根作業。北東端部SD09付近の表土除去･地山精査ベルコン再配置･稼動	B区4段目でプラン検出(SD01延伸部?) 2段目で処理済の遺構を排土下から掘り出し精査(SD01延伸部?) SKP10検出	6)先週の作業員の負傷が、検査の結果亀裂骨折と判明。労災認定の申請手続き　8)象潟町議会議員団十数名と佐藤学校教育課長(兼郷土資料館長)、齋藤主査御一行が来跡。調査視察兼現地説明会開催　9)文化課長御一行が来跡　児玉補佐・八文字主事が来跡　9)文化課の谷地学芸主事から電話連絡(未買収地の調査について)
9/13～17	C区東端部地山精査 SK11実測	B区調査終了	16)磯村先生、象潟町郷土資料館前館長横山氏、齋藤主査が来跡
9/20～24	C区盛土除去(重機)、北東端部地山精査。B区5段目東端隅(調査区への進入路)の盛土除去(人力)と地山面までの掘り下げ	24)接近中の台風18号の防災対策	21)児玉補佐来跡　21)本荘労働基準監督署から来月はじめに事業所訪問との連絡
9/27～10/1	C区地山精査 B区5段目東端隅の最終地山精査 SX15半截	27)未買収地の調査が可能となる 28)調査期間延長の申請	29)三浦所長来跡(職員の服務規律を含めた綱紀の保持について訓示　30) 本荘労働基準監督署の鈴木正人労働技官による事業所訪問　秋田魁新報社本荘支局の生内克史記者来跡
10/4～8	C区地山精査(西端部)	未買収地から西端部沢目にかけてSX16, 17, 18, 19検出　遺物(石鏃)や逆茂木痕跡が検出されSKに	5)船木調査課長、急に来跡　7)児玉補佐来跡　8)文化課の谷地学芸主事から連絡(調査終了について)　山中、現場替えで象潟を後にする
10/12～13	SK17, 20精査調査 終了準備･撤収･現場終了	調査終了の報告と挨拶のため象潟町教育委員会へ	12)象潟町教委の齋藤主査と文化課の武藤学芸主事来跡　佐々木(敬)、八文字両主事来跡　13)秋田県由利建設事務所道路課(原因者)の加賀主査が来跡・現場引渡し

※数字)：日付

参考文献

・中野　俊　「鳥海火山」　『地質ニュース』　№466　p6～17　1993(平成5)年
・冨樫泰時　「年輪が語る鳥海山―紀元前466年に大噴火―」　『教育秋田』　№564　p4～5　1996(平成8)年
・象潟町　『象潟町史　資料編Ⅰ』　1998(平成10)年
・象潟町　『象潟町史　資料編Ⅱ』　1996(平成8)年
・秋田県教育委員会　『秋田県の中世城館』　秋田県文化財調査報告書第86集　1981(昭和56)年
・千田嘉博　小島道裕　前川　要　『城館調査ハンドブック』　新人物往来社　1997(平成9)年
・新人物往来社　『城郭研究最前線　ここまで見えた城の実像』　別冊歴史読本71　第21巻　第41号　1996(平成8)年
・帝京大学山梨文化財研究所　「小特集　中世城館と民衆」　『研究報告』　第5集　1994(平成6)年
・よねしろ考古学研究会　「特集　中世城館」　『よねしろ考古』　第4号　p1～62　1988(昭和63)年
・鹿角市教育委員会　『鹿角の館―館跡航空写真測量調査報告書(5)―』　鹿角市文化財調査資料30　1986(昭和61)年
・男鹿市教育委員会　『脇本城と脇本城跡』　男鹿市文化財調査報告第9集　1994(平成6)年
・男鹿市教育委員会　『脇本城と脇本城跡―第2次・第3次調査報告―』　男鹿市文化財調査報告第14集　1996(平成8)年
・男鹿市教育委員会　『脇本城と脇本城跡―第4次～第6次調査報告―』　男鹿市文化財調査報告第19集　1999(平成11)年
・仁賀保町教育委員会　『山根館跡―「にかほ史跡の里づくり事業」に係る予備発掘調査報告書―』　1999(平成11)年
・秋田県教育委員会　『石鳥谷館跡発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第279集　1998(平成10)年
・秋田県教育委員会　『脇神館跡発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第284集　1999(平成11)年
・秋田県教育委員会　『根下戸道下遺跡発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第297集　2000(平成12)年
・秋田県　『秋田県土地改良史　実績編』
・秋田縣經濟部耕地課　『秋田縣耕地整理組合地區一覽』　1937(昭和12)年
・秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第291集　1999(平成11)年

第4章　調査の記録

本調査で検出された遺構は、空堀跡1条と土塁２条(一部)、溝跡２条、土坑７基(内、陥し穴6基)、柱穴様ピット５基、その他の遺構４基の計21遺構である(第15図)。これらの遺構のほとんどは度重なる地形改変の影響で検出に困難を極め、地山面に達しての検出や基本土層観察用トレンチおよび局部的な試掘溝(サブトレンチ)の壁面に偶然断面がかかっての検出であった。遺物は、土坑(陥し穴)から縄文時代の石鏃が出土しているが、それ以外は全て遺構外の出土で密度は低い。調査区のほぼ全域に渡って近世以降の陶磁器や金属製品などが200点余り出土した。

第1節　検出遺構

1　中世

中世城館に伴うと考えられる遺構は、空堀跡1条と土塁2条を確認している。また、城館に伴う施設としての遺構の性格は不明であるが、確認面の層位や覆土の特徴から中世に属するのではないかと考えられる遺構は、溝跡2条、土坑1基、柱穴様ピット5基を確認している。

(1)空堀跡

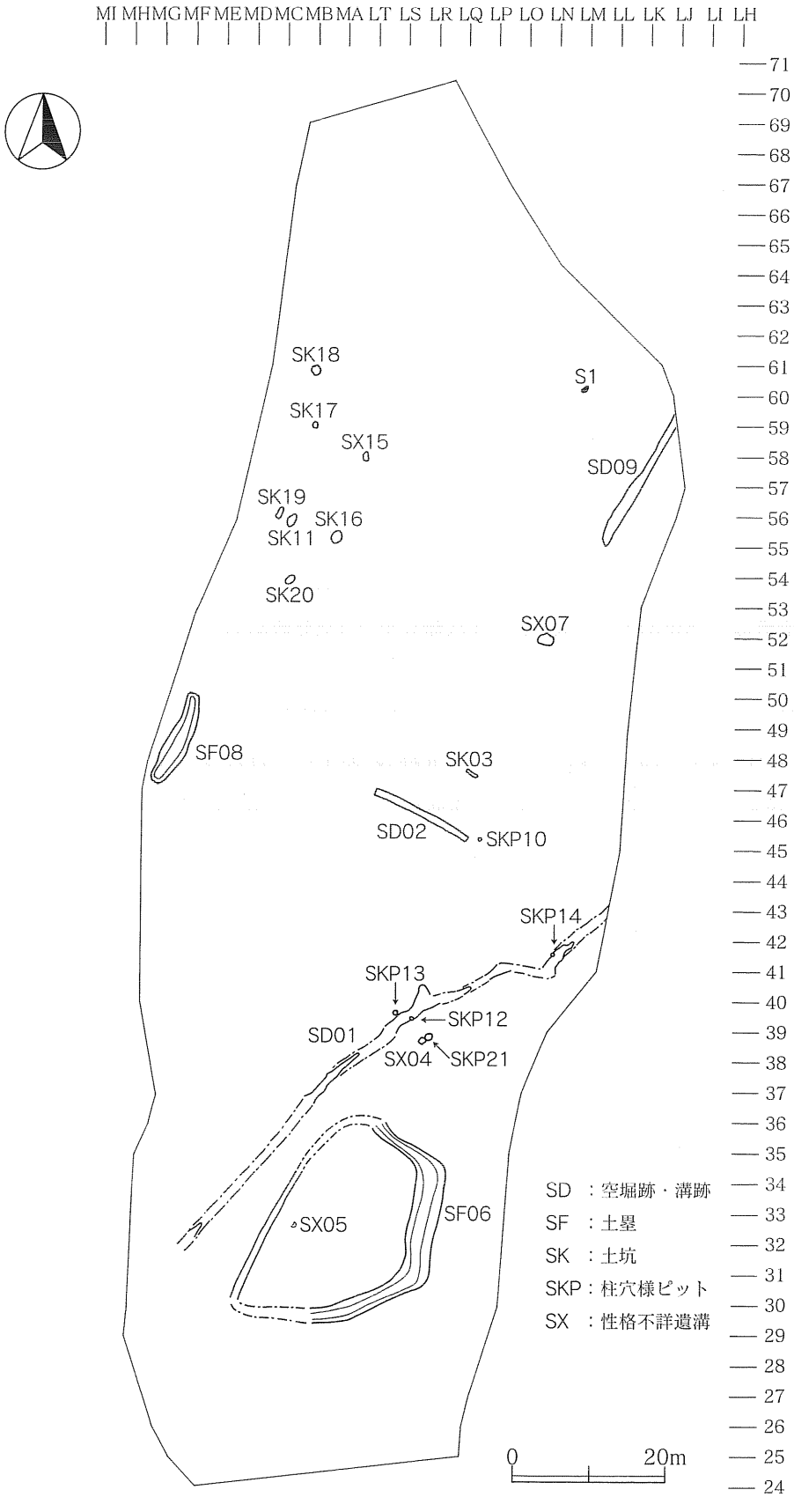
Ａ区西端部の現代の水田跡(3枚)を掘り下げて地山面の精査を行っているときに、南から1枚目(低)と２枚目(高)を区画する高低差約２mの土手(畦畔)の盛土を一部開削してみると、自然地形の地山面で幅約1m、確認面からの深さが約20cm、断面がＶ字形の溝を検出した。水田造成に伴う地形改変によって大部分が削平され僅かに残存した遺構の一部と判断した。さらに、溝の方向と断面の形状が第3章第1節で既述の調査区外で確認された空堀につながる可能性があるため、Ｂ区においてもこの溝と調査区外の空堀とを結ぶ線上で徹底精査を行った。その結果、やはり3ヵ所に分断される状態で削平を免れた溝の底部と思われる残存部分が次々に検出され、調査区外で確認される規模と形状から中世城館で防禦施設としてよく見られる薬研堀タイプの空堀の跡と判断した。

ＳＤ01(第16図、図版2-2，7-2，7-3)

本来1条の空堀であったものが、現代の耕地造成や杉の植林など度重なる地形改変や土地利用の変遷によって遺構の大部分が失われ、辛うじてその一部が4ヵ所に分断されて残存している。調査区内をＡ区からＢ区にかけて南西―北東方向に延びる。調査区内での総延長は約90mと推定され、残存する４ヵ所から計測された規模の平均値は、幅が約1.5mで確認面からの深さが約0.5mである。断面は4ヵ所ともＶ字形を呈する。復原規模は、ほぼ完全な状態で現存していると判断される調査区外の空堀の規模から幅約3～4m、深さ約2～3mはあったものと思われる。土塁の併設もあったと考えられるが現状での確認は不可能であった。また、第16図のＣ―Ｄに示されているように空堀の分岐と看取できる部分があるが、その北方向への延長は残念ながら確認されなかった。遺物は出土しなかった。

(2)土塁

1条は調査区南端部の尾根目から南東方向の開析谷に向かってテラス状に突き出した半円形の平場の縁に、一部途切れているが、現況で土塁状に盛り上がった土手が廻っているのを確認できた。盛り



第15図　遺構配置概略図

上がりの顕著な部分2ヵ所を截ち割って土層を観察したところ、盛土によって人工的に構築された地形であることが判明した。さらに、この平場の西側を地山面まで掘り下げて精査していたところ、西縁部道路(町道横山線)沿いの土手を北東―南西方向に縦断する形で、偶然というと語弊があるが、截ち割った状態になった。その断面には判然としない部分もあるが、版築状の土層構造が観察できた。非常に眺望が効くことから、築館に際しては斥候に適した場所として利用された可能性が高い。また、この平場に近接して北西側にSD01が検出されているので、土塁によって区画された曲輪的施設と考えられる。もう1条は、調査区中央部西側境界付近を地山面まで掘り下げて精査していたところ、局部的にではあるが長さ10m強、幅3m弱、高さ約1mの地山土の不自然な盛り上がりを確認したため、最も幅の広いところで截ち割ってみた。その結果、断面に比較的明瞭な版築状の土層構造が確認できたので、地形改変で失われかけた土塁の残存部分と判断し、前者をSF06、後者をSF08とした。

ＳＦ06(第17，18図、図版3，4-1，4-2，5-1，5-2)

尾根目から谷間への急激な落ち込み際を削平して造成したと見られる不自然な平場(曲輪)を、その周囲の斜面(南東側は急斜面)と隔絶するように平場の縁に沿って構築された土塁である。削平時に出てきたと思われる残土を積み上げて築いたものと推測される。やはり現代の耕地造成や杉の植林などによって部分的に欠損あるいは崩壊している。残存部の規模は、総延長58.5m、基底幅1.2～3.6m、高さ0.6～2.3m(崩落部分を除く)である。断面は蒲鉾形と台形の混在形を呈する。遺物は出土しなかった。なお、この土塁が廻る平場内に建物等の存在を示す遺構は検出されなかった。

ＳＦ08(第19図、図版6-1，7-1)

Ｂ区北西隅の調査区境界際に北東―南西方向で位置している。この方向は、調査区外に近接して走っている道路(細い山道)の方向とほぼ並行する位置関係にある。もしこの道路が空堀の転用であるとするならば、それに近接して並行する土塁が存在した可能性は否定できないと考える。残念ながら既述のごとく現代の度重なる地形改変によって詳細は不明である。検出部分の規模は、長さ13.15m、基底幅1.40～3.08m、高さ1.05～1.20mである。復原規模での高さは、SF06と比較すると2m前後はあったものと推定される。断面は蒲鉾形と台形の混在形を呈する。遺物は出土しなかった。

(3)溝跡

1条は、Ｂ区で第1基本土層の第Ⅱ層を剥いで削平を免れた第Ⅲ層の分布状況を調査しているときに平面プランを検出した。まず築館に伴って大規模な土木工事が行われ、その後、何らかの目的で溝(空堀であったかもしれない)が開削されたのではないだろうか。もう1条は、第Ⅱ基本土層観察用トレンチの壁面に遺構の断面がかかったので、平面的にプランを検出したところ溝跡であることが判明したものである。両遺構とも検出状況において同層位と考えられる。また、溝の底部のみの残存であることとその規模および形状が酷似していることから、同時期と推測するに至り、前者をSD02、後者をSD09とした。

ＳＤ02(第16図)

ＬＰ45、ＬＱ45･46、ＬＲ45･46、ＬＳ46・47、ＬＴ46の8グリッドにかけて位置する。北西―南東に延びる溝で、長さ13.85m、幅0.86～1.14m、確認面からの深さ0.18～0.32mを測る。断面形は逆台形を呈する。遺物は出土しなかった。詳細は不明である。

ＳＤ09(第16図、図版6-2)

ＬＬ55・56、ＬＫ55・56・57、ＬＪ57・58・59の8グリッドにかけて位置する。北東―南西に延びる溝で、長さ19.70m、幅1.00m、確認面からの深さ0.26～0.54mを測る。断面形は逆台形を呈する。遺構の北端は調査区境界にかかっているが、境界際の壁面に断面が確認できるので調査区外にも延伸しているものと思われる。遺物は出土しなかった。詳細は不明である。

(4)土坑

SD02と同様の状況でほぼ同時に平面プランを検出した。やはり、削平を免れた底部のみが残存していたものと思われる。SD02およびSDO9と同時期の遺構と推測してSK03とした。

ＳＫ03(第20図)

ＬＰ47グリッドに位置する。平面形は長軸(北西―南東)1.86m、短軸(北東―南西)0.48mを測る楕円形を呈し、確認面からの深さは0.16mである。底面はほぼ平坦で、壁の立ち上がりは比較的急である。遺物は出土しなかった。詳細は不明である。

(5)柱穴様ピット

全5基の内、2基はSD01を切る状態で検出された。また、1基はSX04(炭化物と焼土の密集分布)の直下で検出され、他の3基は地山面の精査中にそれぞれ単独で平面プランを検出した。いずれも削平後の残存部位と思われ、小規模で浅い。規則的な配列は認められず、柱痕跡も平断面とも確認することができなかった。これらの柱穴様ピットから遺物は出土しなかった。なお、個々の柱穴様ピットについては、下記第2表にまとめた。

第2表　柱穴様ピット一覧

ＳＫＰ番号	検出	平面形位置	壁面傾斜	規模[cm] 長軸	短軸	深さ	重複状況	備考
10	ＬＰ45	不整円形	緩	43.6	36.0	(10.6)		
12	ＬＲ39	円形	やや緩	(40.4)	30.0	(14.2)	SD01→SKP12	木橋の橋脚？
13	ＬＳ39	角丸方形	急	23.0	(10.8)	(6.2)		
14	ＬＮ41	円形	やや緩	31.8	(25.6)	(14.4)	SD01→SKP14	木橋の橋脚？
21	ＬＲ38	楕円形	やや急	37.0	26.4	20.0		

※(　)内の数値は残存値で、重複状況は古→新である。

2　縄文時代

縄文時代の遺構としては、土坑6基を確認している。その内3基は狩猟用の陥し穴で、他の3基もその可能性を指摘できる。

(1)土坑(陥し穴)

6基ともＣ区西端部調査区境界際の沢目斜面に集中して分布する。いずれも地山面の精査中に平面プランを検出した。この内SK11、SK16、SK19の3基は沢筋に沿って直線的に近接して並ぶ。特筆すべきは、SK17からは縄文時代前期と思われる石鏃が6点出土し、底面には逆茂木を刺したと思われる小ピットが1個穿たれていた。このような小ピットは、SK18とSK20でも確認された。また、それぞれの土層注記や実測図にも示されているとおり、覆土の特徴において酷似性が、規模や形態において類似性が認められる。このような調査結果から、SK17を基準にして、これら6基の土坑は全て縄文時代前期における狩猟用の陥し穴であると判断するに至った。なお、これら6基の土坑の覆土は全て埋

め戻しと思われる人為堆積の様相を呈していることから、陥し穴としての利用を終えた後、墓としての転用が考えられるが、SK17を除いて遺物が全く出土しなかったことや第5章で述べられているように、リン酸分析の結果が遺体埋納の可能性を推定するに至らなかったことなどから詳細は不明である。

ＳＫ11(第22図、図版11-3)

ＭＢ55・56の両グリッドに跨って位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸(北東―南西)1.73m、短軸(北西―南東)1.11m、確認面からの深さ1.04mを測る。底面は中央部から南東側はほぼ平坦であるが、中央部から北東隅に向かって傾斜し、南東側より0.32m深くなっている。北東壁の中位から開口部にかけて内傾して立ち上がるため、この部分が僅かではあるがオーバーハングしている。北東壁から南東壁にかけてはほぼ垂直に立ち上がり、南西壁も急傾斜であるが、北西壁は比較的緩やかである。北西壁と南東壁の中位部で一旦傾斜が極端に緩み段を形成しているのが特徴的である。また、北西側から南西側にかけては他の方向に比べて傾斜が緩やかなため、この方向に開口部がやや突出して開いている。遺物は出土しなかった。

ＳＫ16(第22図、図版12-1)

ＭＡ55グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸(北東―南西)1.80m、短軸(北西―南東)1.40m、確認面からの深さ1.15mを測る。底面は平坦で北東隅で角張っている。壁の立ち上がりは南東側でやや緩やかであるが、それ以外は開口部まで非常に急である。遺物は出土しなかった。

ＳＫ17(第23図、図版10-3)

MA58･59、MB58･59の4グリッドに跨って位置する。平面形は円形を呈し、長軸(北西―南東)1.10m、短軸(北東―南西)0.93m、確認面からの深さ1.02mを測る。底面は平坦で、中央に径10cm、底面からの深さ8cmを測る小ピットが1個穿たれている。逆茂木を刺した痕跡ではないかと思われる。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、下位から中位にかけて所々僅かに内傾して立ち上がるため、オーバーハングしている部分がある。さらに、南壁には底面から20cmのところに径16cm、奥行16cmを測る南方向への小横穴が掘り込まれている。この穴についての詳細は不明である。底面付近から石鏃6点が出土した。

ＳＫ18(第23図、図版11-1)

MA60、MB60の両グリッドに跨って位置する。平面形は円形を呈し、径1.35m、確認面からの深さ1.00mを測る。底面は平坦で、中央部には三角形の位置に並ぶ小ピットが3個穿たれている。それぞれ径は8cm、9cm、10cmで底面からの深さはいずれも8cmを測る。SK17同様、逆茂木を刺した痕跡ではないかと思われる。壁は南側で下位から中位にかけて垂直に立ち上がり、一旦傾斜が緩やかになって開口する。南側以外は開口部まで垂直に立ち上がる。遺物は出土しなかった。

ＳＫ19(第23図、図版12-2)

MC55・56の両グリッドに跨って位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸(北東―南西)1.70m、短軸(北西―南東)0.72m、確認面からの深さ0.82mを測る。底面はほぼ平坦で、壁の立ち上がりは非常に急である。遺物は出土しなかった。

ＳＫ20(第23図、図版11-2)

MB53・54の両グリッドに跨って位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸(北東―南西)1.58m、短軸(北西―南東)0.96m、確認面からの深さ0.98mを測る。底面はほぼ平坦で、中央部に短軸方向で隣

接して並ぶ極小ピットが2個穿たれている。それぞれ径が1cm、2cmで底面からの深さが4cm、6cmを測る。規模は小さいが、SK17やSK18同様の逆茂木を刺した痕跡ではないかと思われる。壁の立ち上がりは非常に急である。遺物は出土しなかった。

3　その他の遺構

本遺跡の調査では、既述の17遺構の他に時期の特定や性格について不詳の4遺構が検出されている。いずれも確認面から覆土および底面の直上で多量の炭化物もしくは焼土の密集分布を確認したものであるが、遺物は出土しなかった。また、これら4遺構とも上位の大部分が削平によって失われたものと思われる。この内SX04・SX07・SX15の3基については、伏せ焼き炭窯の可能性もあるが、4遺構とも時期や用途等詳細は不明である。

ＳＸ04(第21図、図版9-2)

ＬＲ38グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸(北西―南東)0.58m、短軸(北東―南西)0.34m、確認面からの深さ0.14mを測る。底面は多少の凹凸があるもののほぼ平坦である。壁の立ち上がりは緩やかで、断面形は長軸・短軸とも浅鉢状を呈する。確認面で南隅に多量の炭化物塊の密集分布が見られ、層位的にも6cmの厚さを測った。また、僅かではあるが覆土の1層と2層から焼土粒の混入も見られた。壁面から底面直上にかけては一様に薄く粘土質の褐色土が堆積している。

ＳＸ05(第21図、図版9-1)

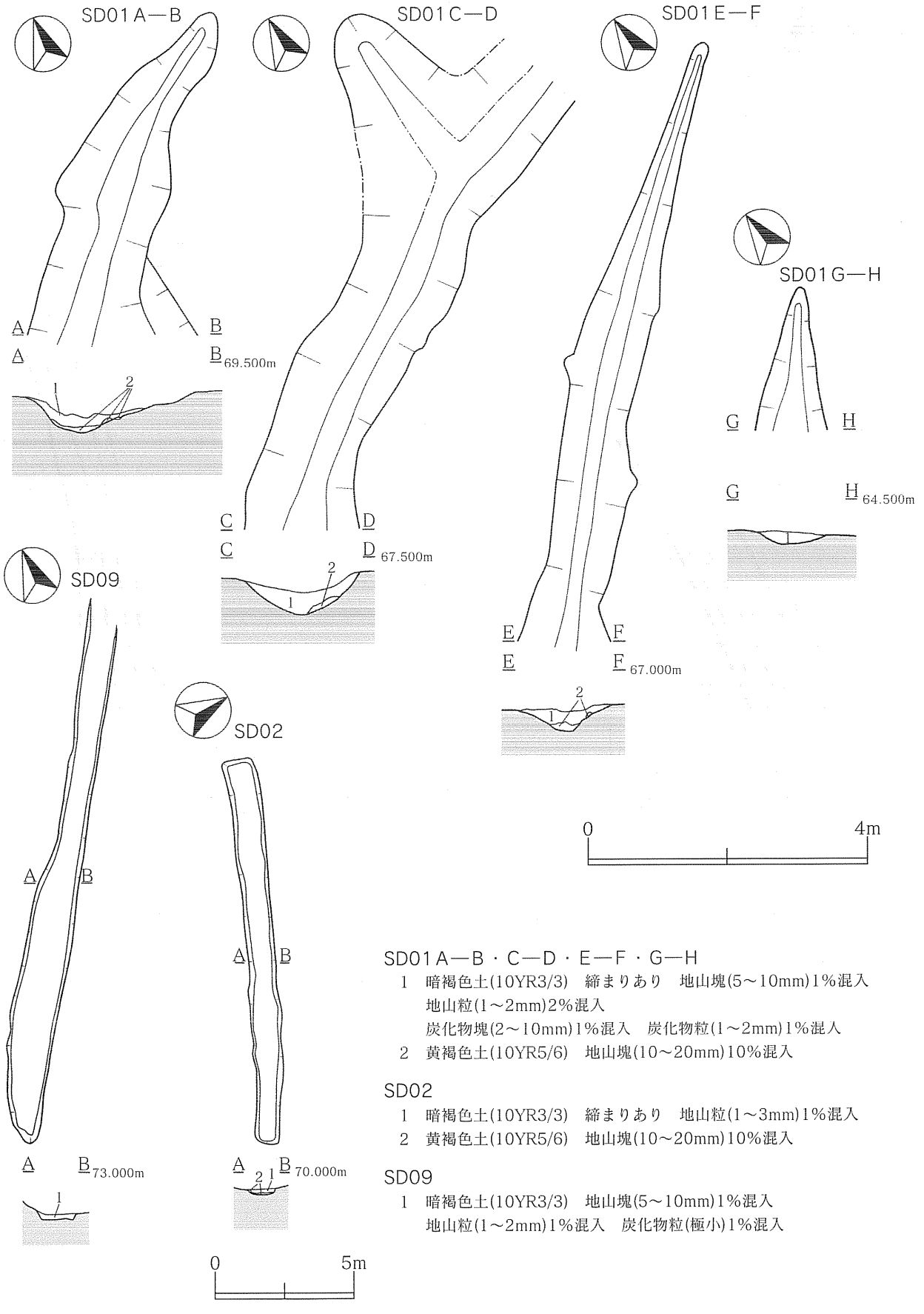
ＭＢ32グリッドに位置する。平面形は三日月状を呈し、長軸(北―南)0.60m、短軸(東―西)0.41m、確認面からの深さ0.05mを測る。底面は平坦で、壁の立ち上がりは緩やかである。断面形は長軸・短軸とも浅鉢状を呈する。確認面で南側2／3部分を中心に微量の焼土粒と炭化物粒の分布が見られた。

ＳＸ07(第21図、図版9-3)

ＬＮ51・52の両グリッドに跨って位置する。平面形は不整楕円形を呈し、長軸(東―西)2.24m、短軸(北―南)1.66m、確認面からの深さ0.18mを測る。底面は全体的に小さな凹凸が多く、中央部は周囲よりもやや深く細長い不整形の凹みとなっており、南西に向かって若干傾斜する。中央部の凹みから南側にかけて多量の炭化物塊が密集分布している。断面形は長軸・短軸とも不整形である。確認面で多量の炭化物塊と微量の焼土粒の密集分布が見られ、層位的にも高密度で炭化物塊の混入が見られた。

ＳＸ15(第21図、図版10-1，10-2)

ＬＴ57・58の両グリッドに跨って位置する。平面形は不整形で、規模は半截セクションライン(北―南)で1.30m、その直交ラインで0.89m、確認面からの深さ0.11mを測る。底面はややうねりがあり南方向に若干傾斜するが、全体としてはほぼ平坦である。壁の立ち上がりは北側では緩やかで南側でやや急になる。断面形は長軸・短軸とも大まかに見れば浅鉢状を呈する。確認面で不整楕円形状に広がる炭化物塊密集分布とその一部にまとまった焼土粒の分布が見られ、層位的にも一部高密度で底部まで炭化物塊が混入していた。特に焼土粒については、中央部から南西側にかけて底面直上まで堅く締まった高密度の分布が見られ、被熱度合いの強さを示している。



SD01 A—B・C—D・E—F・G—H

1　暗褐色土(10YR3/3)　締まりあり　地山塊(5～10mm)1%混入
　地山粒(1～2mm)2%混入
　炭化物塊(2～10mm)1%混入　炭化物粒(1～2mm)1%混入
2　黄褐色土(10YR5/6)　地山塊(10～20mm)10%混入

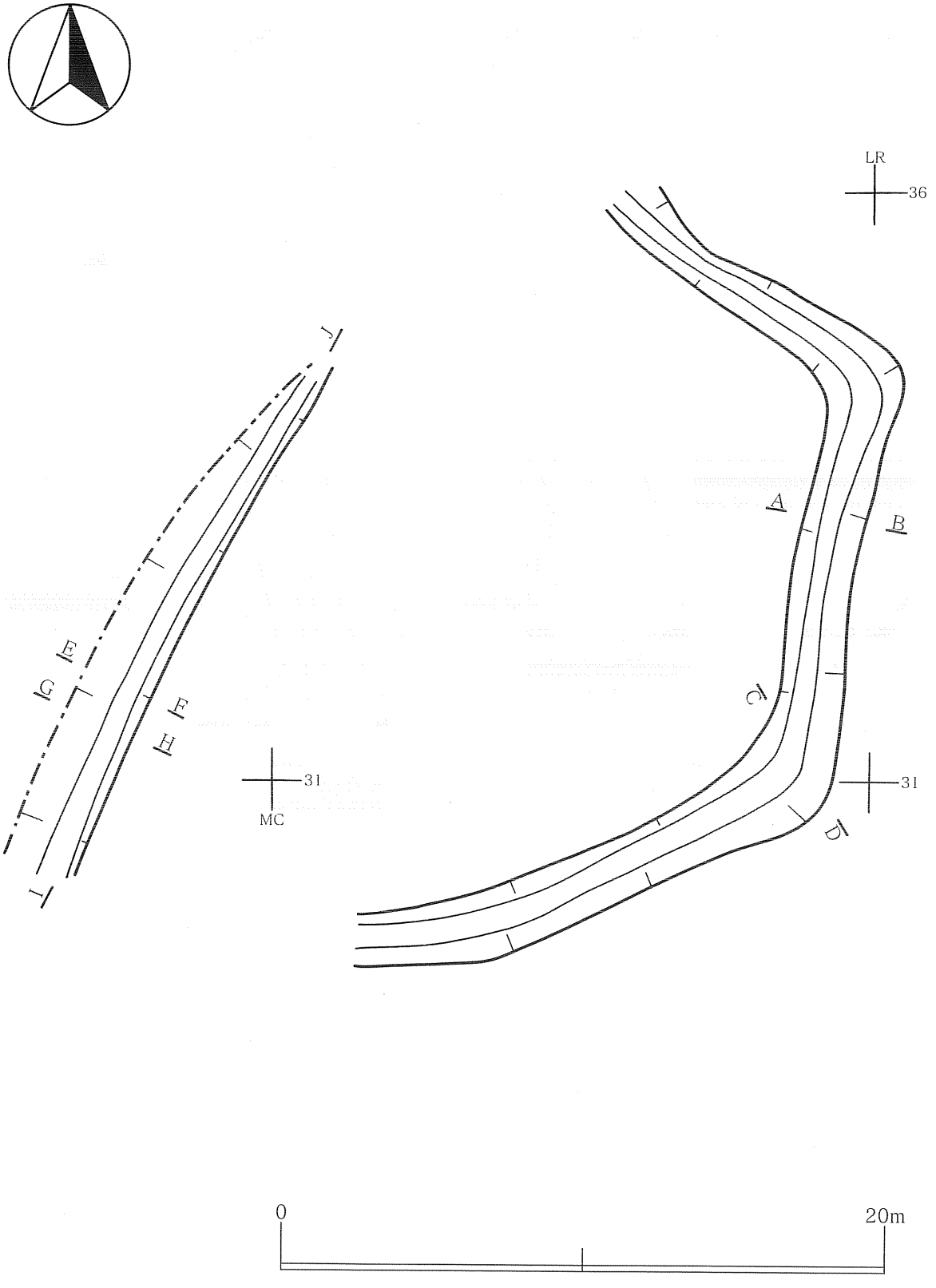
SD02

1　暗褐色土(10YR3/3)　締まりあり　地山粒(1～3mm)1%混入
2　黄褐色土(10YR5/6)　地山塊(10～20mm)10%混入

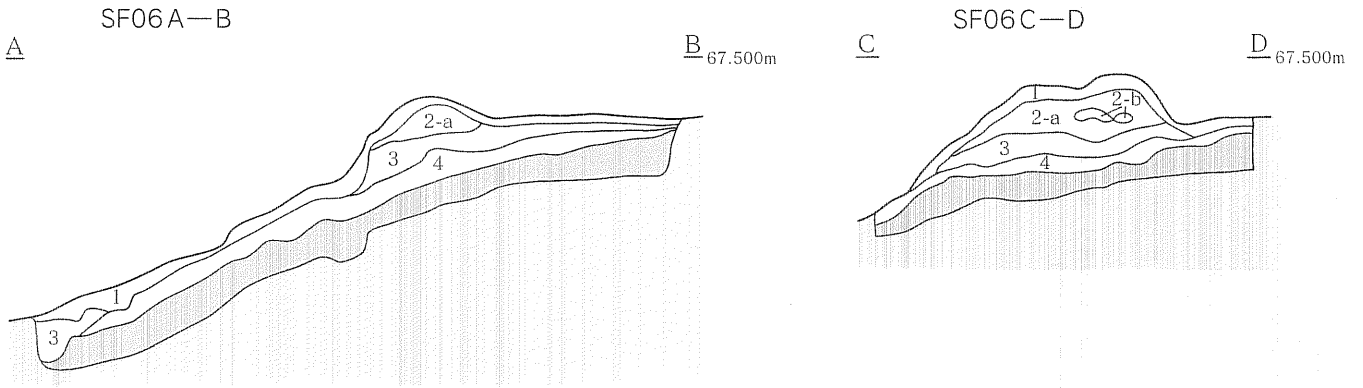
SD09

1　暗褐色土(10YR3/3)　地山塊(5～10mm)1%混入
　地山粒(1～2mm)1%混入　炭化物粒(極小)1%混入

第16図　SD01・SD02・SD09

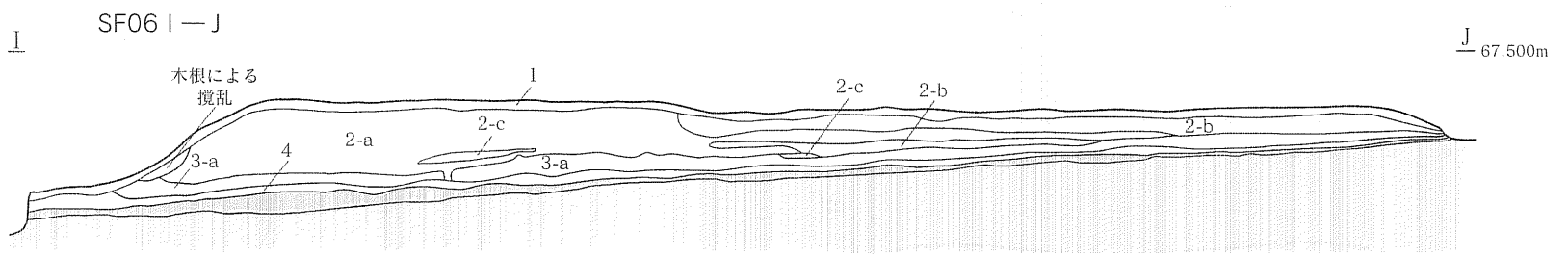


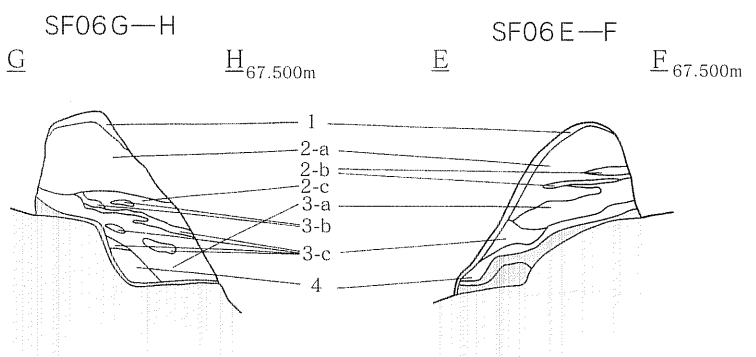
第17図　SF06(1)



SF06A—B・C—D

1　暗褐色土(10YR3/3)　シルト　現表土
2-a　褐色土(10YR4/6)　粘性あり　やや脆い
黒褐色土(10YR2/3)粒(極小)2%混入
炭化物粒(極小)極微量混入　盛土
2-b　暗褐色土(10YR3/4)　シルト質　脆い
地山粒(極小)10%混入　盛土
3　黒褐色土(10YR2/3)　締まりあり
地山粒(極小)1%混入
炭化物粒(極小)極微量混入　旧表土
4　褐色土(10YR4/4)　粘性・締まりあり
地山粒(極小)3%混入
炭化物粒(極小)極微量混入　漸移





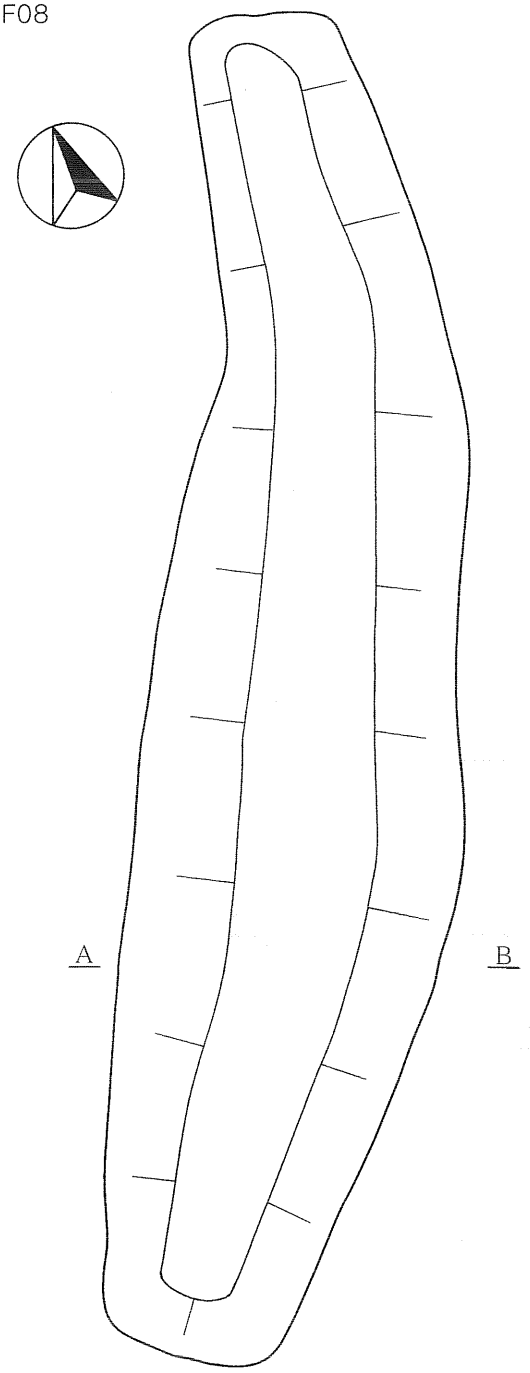
SF06E—F・G—H・I—J

1　暗褐色土(10YR3/4)　シルト　現表土
2-a　褐色土(7.5YR4/6)　締まり強弱混在　地山土(7.5YR5/8)と暗褐色土(10YR2/3)が版築状に混在　盛土
2-b　暗褐色土(10YR3/4)　脆い　地山塊(5～20mm)3%混入　盛土
2-C　暗褐色土(10YR3/3)　脆い　地山塊(5～20mm)2%混入　盛土
3-a　暗褐色土(10YR3/3)　締まりあり　地山塊(10～20mm)1%混入　地山粒(1～5mm)5%混入
炭化物粒(1～5mm)1%混入　盛土
3-b　暗褐色土(10YR3/3)　脆い　地山塊(10～20mm)3%混入　盛土
3-c　褐色土(7.5YR4/4)　脆い　地山塊(5～30mm)50%混入　盛土
4　暗褐色土(7.5YR3/4)　粘性・締まりあり　地山塊(10～20mm)1%混入　地山粒(1～5mm)10%混入　盛土

0　5m

第18図　SF06(2)

SF08



SF08

1　褐色土(7.5YR4/4)　やや脆い　地山塊(5～10mm)3%混入
地山粒(1～2mm)1%混入　盛土

2　褐色土(7.5YR4/6)　締まりあり　地山塊(5～10mm)10%混入
地山粒(1～2mm)1%混入　砂粒(極小)5%混入　盛土

3　暗褐色土(7.5YR3/4)　やや脆い　地山塊(5～10mm)3%混入
地山粒(1～2mm)1%混入　砂粒(極小)2%混入　盛土

4　褐色土(7.5YR4/6)　締まりあり　地山塊(5～10mm)20%混入
地山粒(1～2mm)1%混入　砂粒(極小)7%混入　盛土

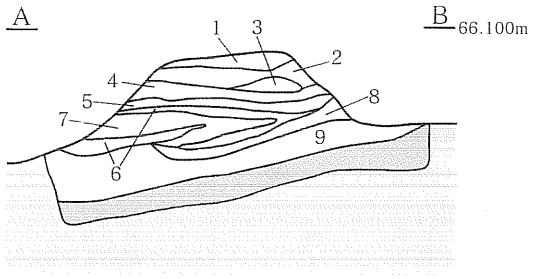
5　暗褐色土(10YR3/3)　やや脆い　地山塊(5～20mm)2%混入
地山粒(1～2mm)1%混入　砂粒(極小)1%混入
炭化物粒(1～2mm)1%混入　盛土

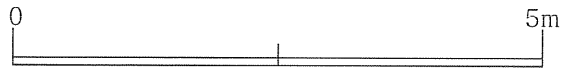
6　褐色土(7.5YR4/6)　粘性・締まりあり　地山塊(5～20mm)20%混入
地山粒(1～2mm)5%混入
砂粒(極小)1%混入　炭化物粒(1～2mm)1%混入　盛土

7　暗褐色土(10YR3/3)　やや脆い　地山塊(5～20mm)10%混入
地山粒(1～2mm)3%混入　砂粒(極小)1%混入
炭化物粒(1～2mm)1%混入　盛土

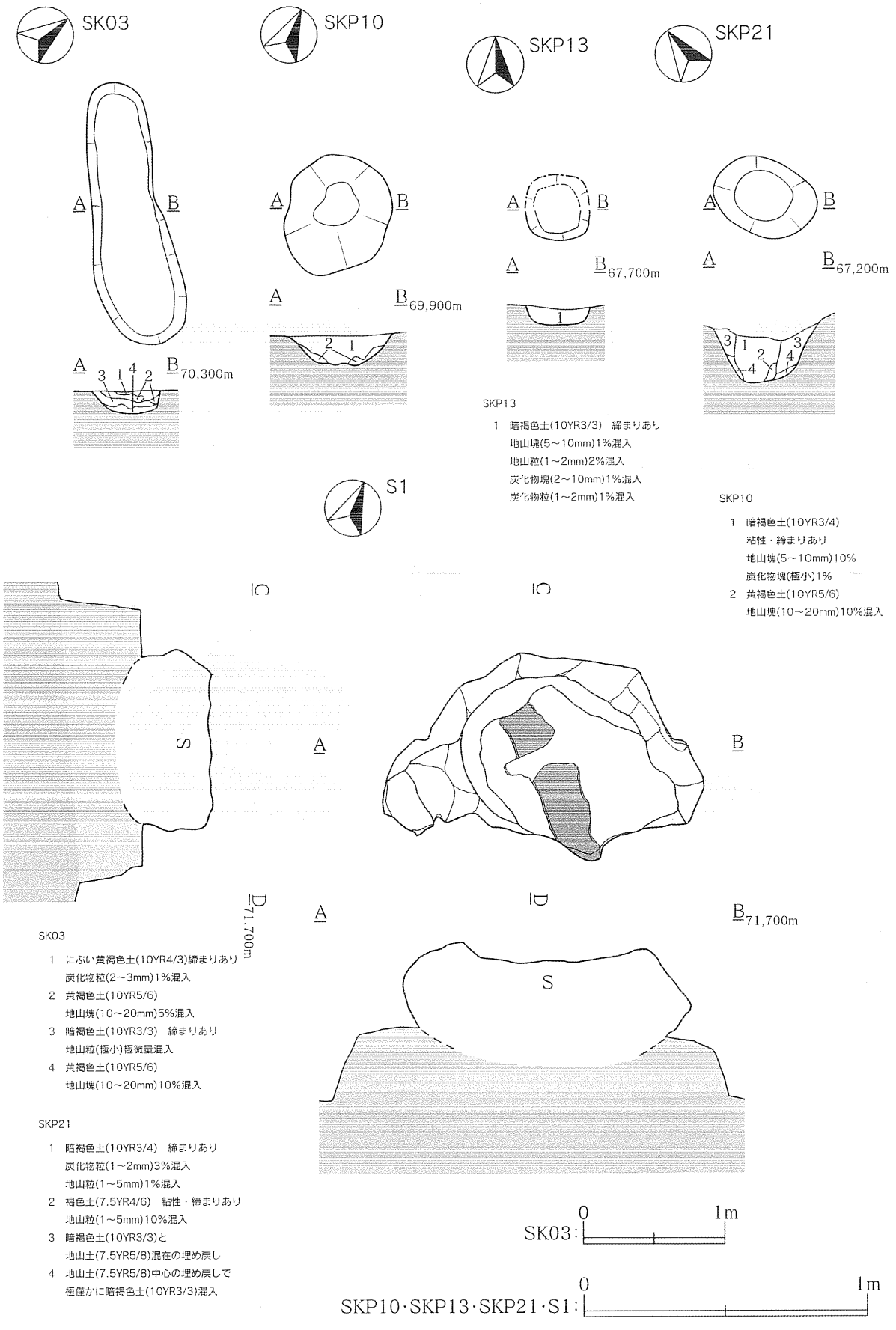
8　黒褐色土(10YR2/3)　締まりあり　炭化物粒(1～5mm)3%混入
盛土

9　暗褐色土(10YR3/3)　粘性・締まりあり　地山粒(1～5mm)2%混入
炭化物粒(1～2mm)1%混入　旧表土

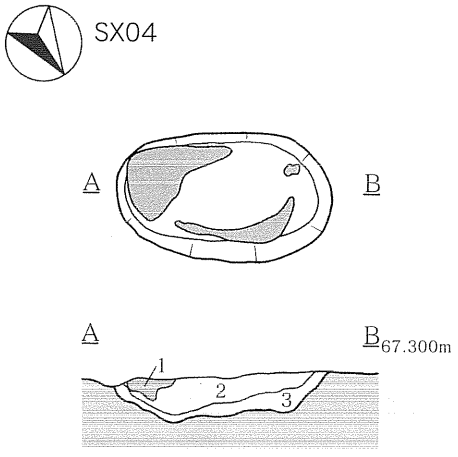




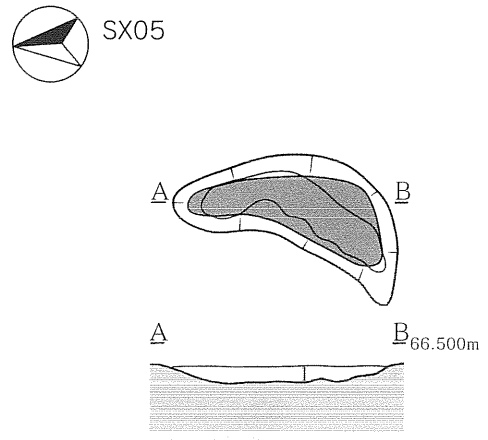
第19図　SF08



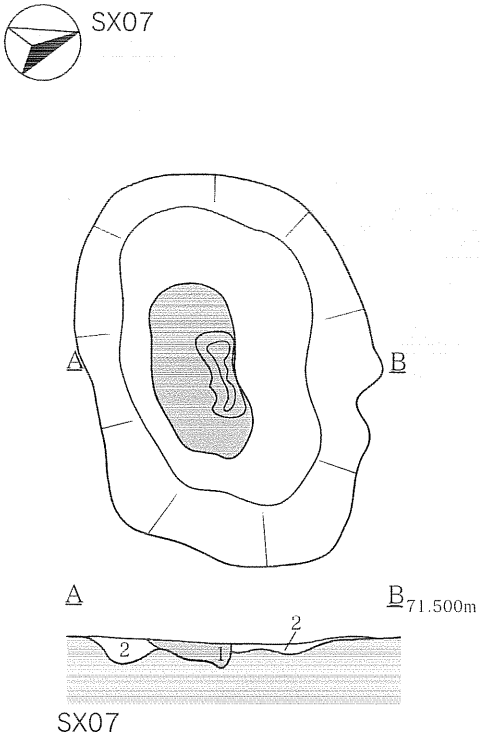
第20図　SK03・SKP10・SKP13・SKP21・S1



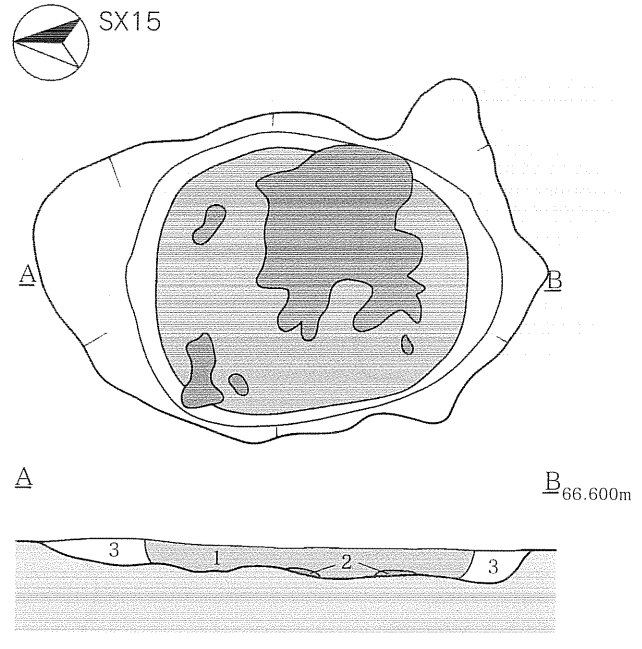
SX04
1　黒褐色土(10YR2/2)　炭化物塊(5～20mm)50%混入
　　焼土粒(5YR4/6・1～2mm)1%混入
2　黒褐色土(10YR2/3)　締まりあり
　　地山塊(5～10mm)3%混入
　　炭化物塊(5～10mm)7%混入
　　焼土粒(5YR4/6・1～2mm)1%混入
3　褐色土(10YR4/6)　粘性・締まりあり
　　地山粒(1～2mm)1%混入



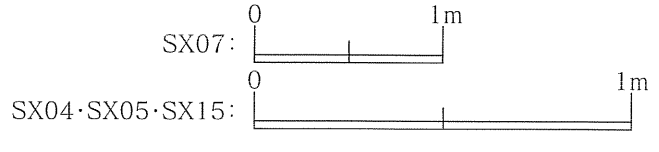
SX05
1　暗褐色土(10YR3/3)　炭化物粒(1～5mm)1%混入
　　焼土粒(5YR4/6・1～2mm)微量混入



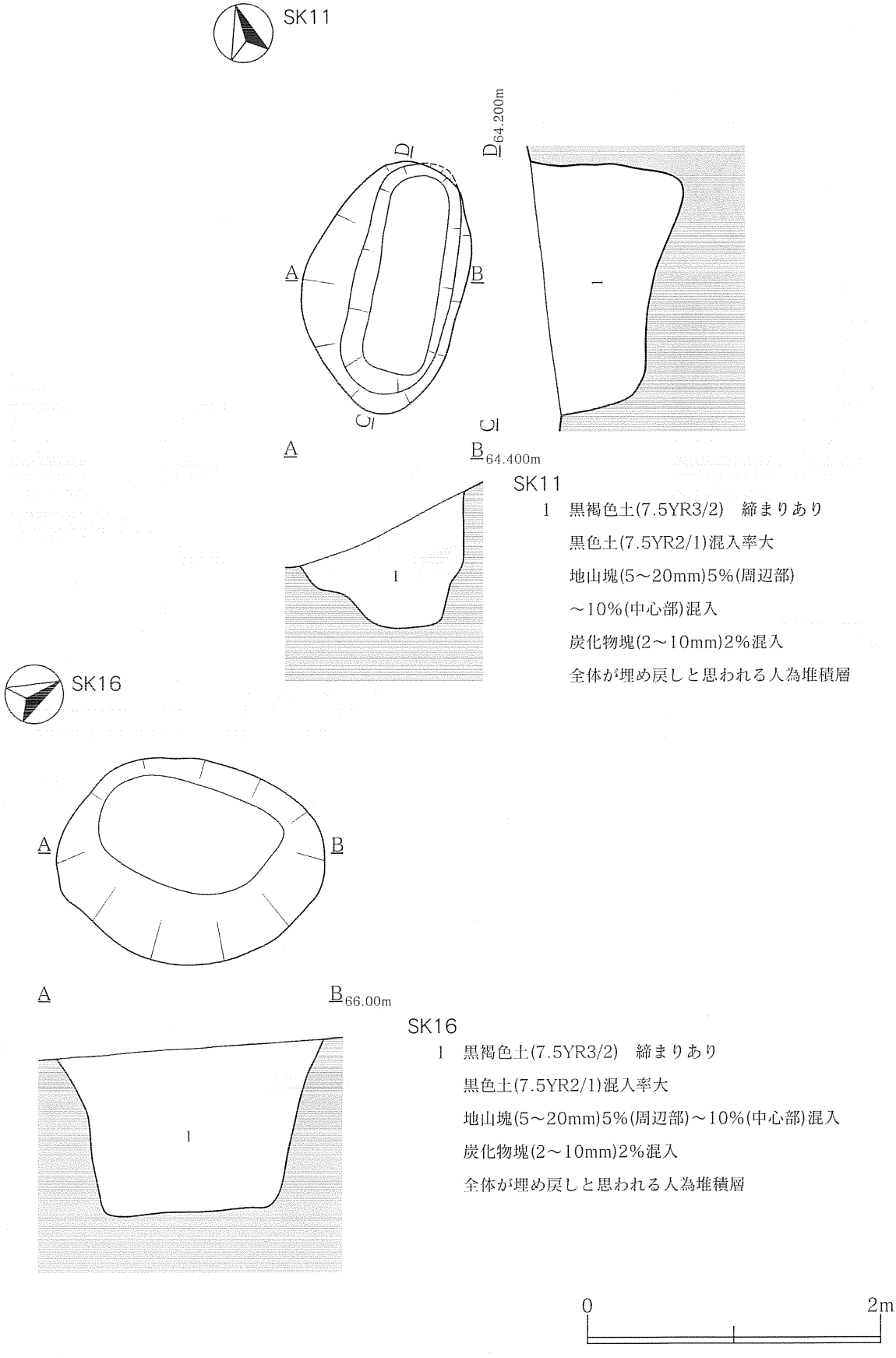
SX07
1　暗褐色土(10YR3/3)　締まりあり
　　炭化物塊(1～20mm)10%混入
　　焼土粒(5YR4/6・1～2mm)1%混入
2　極暗褐色土(7.5YR2/3)　締まりあり
　　炭化物塊(1～20mm)50%混入
　　焼土粒(5YR4/6・1～2mm)3%混入



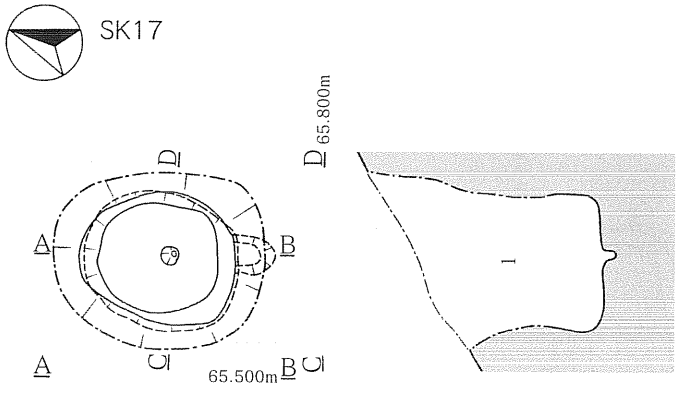
SX15
1　暗褐色土(10YR3/4)　締まりあり　炭化物塊(1～20mm)10%混入
　　焼土粒(5YR4/6・1～2mm)1%混入
2　極暗褐色土(7.5YR2/3)　締まりあり
　　焼土粒(5YR4/6・1～2mm)3%混入
3　暗褐色土(10YR3/4)　締まりあり　炭化物塊(極小)1%

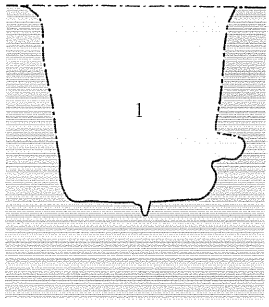


第21図　SX04・SX05・SX07・SX15



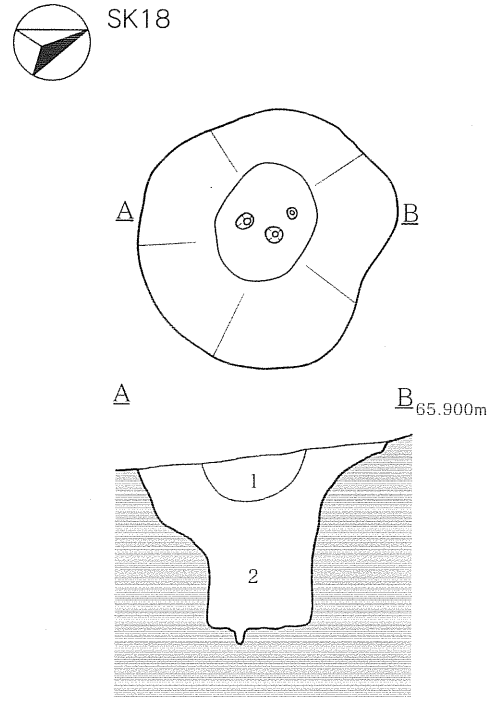
第22図　SK11・SK16





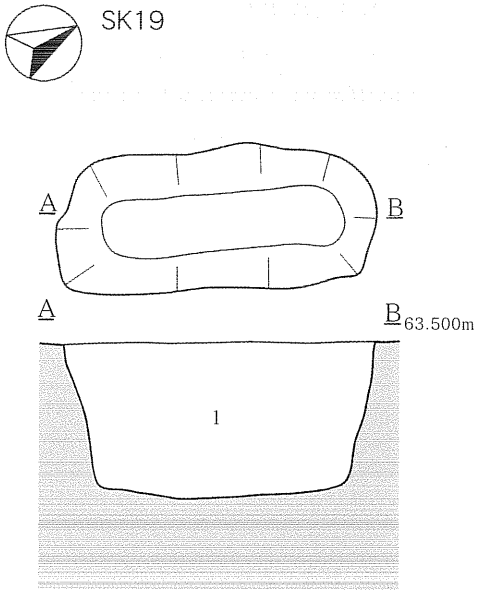
SK17

1　黒褐色土(7.5YR3/2)　締まりあり
黒色土(7.5YR2/1)混入率大
地山塊(5～20mm)5%(周辺部)
～10%(中心部)混入
炭化物塊(2～10mm)2%混入
全体が埋め戻しと思われる人為堆積層



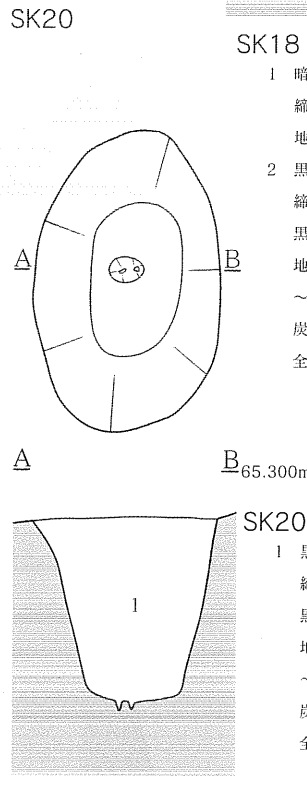
SK18

1　暗褐色土(7.5YR3/4)
締まりあり
地山土混入率大
2　黒褐色土(7.5YR3/2)
締まりあり
黒色土(7.5YR2/1)混入率大
地山塊(5～20mm)5%(周辺部)
～10%(中心部)混入
炭化物塊(2～10mm)2%混入
全体が埋め戻しと思われる人為堆積層



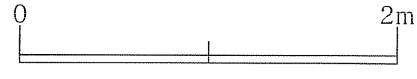
SK19

1　黒褐色土(7.5YR3/2)　締まりあり
黒色土(7.5YR2/1)混入率大
地山塊(5～20mm)5%(周辺部)～10%(中心部)混入
炭化物塊(2～10mm)2%混入
全体が埋め戻しと思われる人為堆積層



SK20

1　黒褐色土(7.5YR3/2)
締まりあり
黒色土(7.5YR2/1)混入率大
地山塊(5～20mm)5%(周辺部)
～10%(中心部)混入
炭化物塊(2～10mm)2%混入
全体が埋め戻しと思われる人為堆積層



第23図　SK17・SK18・SK19・SK20

第2節　出土遺物

本調査における遺物の出土状況は非常に希薄で、出土総数200点余りの内ほとんどが遺構外からの出土であり、近世以降の陶磁器がその大部分を占める。残念ながら本調査の主眼である中世の館跡に伴うと判断できる得る資料には恵まれなかった。ただし、1点のみではあるが人の手が加わったのではないかと思われる大きな礫(第20図-S1、図版12-3)が、中世の整地層と考えられる層の下位から出土している。

このような状況にあって特筆すべきは、調査区北西端の沢目に沿ってまとまって検出された土坑群の1基から、縄文時代前期と思われる石鏃6点が出土したことである。これによって、この土坑群が縄文時代前期のものであるとすれば、第2章第2節で既述のとおり、本遺跡の立地に関する地質学的見地から貴重な資料を得たことになる。

1　縄文時代

(1)石器

石鏃(第25図、図版13-1)

SK17の底部から、破損したものを含めてまとまって6点出土したもので、原則として弓矢の矢の先端に付けて用いた定形的な剥片石器と考えられる。石材は全て頁岩で、剥片のほぼ全体に剥離調整を施してある。6点とも扁平でほぼ左右対称であり、尖頭部とそれよりも幅広い基部を有する。平面形が二等辺三角形を呈し、基部の形状から凹基無茎鏃に属するもので、凹基ではあるが凹み部分の弧の半径が石器の最大幅よりも大きい。したがって凹みは浅い。

スクレイパー(第26図、図版13-2)

遺構外の地山面直上で1点のみ出土したもので、上記の土坑群と出土地点は非常に近接している。単剥離面打面を残す寸詰まりの方形剥片素材である。素材末端縁裏側に二次調整を施して刃部を作出している。石材は頁岩である。

2　近世以降

(1)陶器

擂鉢(第27図-2，28図-3・4・5・6，29図-1、図版14-1-1・2・3・5・6・8)

全て破片であるが、内面に刻まれた条線から擂鉢の一部分と判明したものが6点である。この内、27-2・28-6・29-1の3点には内外面ともに鉄釉が施されている。27-2は非常に堅い焼成となっているが、摩滅度合いが著しい。また、28-3・4・5の3点は素焼きである。いずれも産地は不明である。

その他の陶器(第27図-1，28図-1・2、図版14-1-4・7・9)

全て破片であり、それぞれの残存部位から器形を特定することの困難なものが3点である。いずれも釉が施されているが、28-1は内外面に、28-2は内面にそれぞれ鉄釉が掛けられている。

(2)磁器

寺内焼系(第29図-2，30図-1・2、図版14-2)

本調査の出土遺物の中で最も多かったのが磁器片であるが、その中で特に目を引いたのが19世紀の寺内焼と思われる3点の磁器片である。29-2は輪花皿、30-1・2は丸皿で、いずれも口唇部に鉄釉の口紅がある。29-2は内面に山水文が描かれており、30-1は識別困難であるが内外面に染付による文様

が、また、30-2も識別困難であるが内底面に象嵌の手法を用いた染付による文様が描かれている。3点とも全面に透明釉が掛かっている。なお、これら3点については肥前系の可能性もある。

肥前系(第30図-3，31図，32図，33図、図版15，16-1)

寺内焼系の磁器に次いで目を引いたのが肥前系と思われる磁器片である。全14点で、表面採集か第Ⅰおよび Ⅱ層からの出土となっている。30-3(図版15-1-2)は器壁が厚めの深皿で、内側面に草花文と思われる染付による施文が見られる。18～19世紀のものと想定される。31-1(図版15-1-1)は器壁が厚めの蛇の目凹形高台皿で、高台内に蛇の目状の釉剥ぎが見られ畳付部には釉が掛かっている。18～19世紀のものと想定される。31-2(図版15-1-7)は器壁が厚めの五寸皿で、見込蛇の目釉剥ぎが見られ、外面は畳付部のみの釉剥ぎとなっている。内側面には二重斜格子文が描かれているが裏文様はない。18世紀前半の波佐見焼の可能性が非常に高い。31-3(図版15-1-5)は半球形碗で、外側面に染付施文を確認できるが識別は困難である。19世紀のものと想定される。32-1(図版15-1-3)は器壁が厚めの深皿と思われる丸皿で、内側面に染付施文を確認できるが識別は困難である。18～19世紀のものと想定される。32-2(図版15-1-6)は丸皿で、内外面ともに染付施文を確認できるが識別は困難である。内底面に砂目もしくは焼台(ハマ)の痕跡と思われる釉の円形剥離が見られる。19世紀のものと想定される。32-3(図版15-1-4)は丸形碗で、内外面ともに草花文と思われる染付施文が見られる。18世紀後半のものと想定される。33-1(図版15-2-1)は丸形碗で外側面に草花文と思われる染付施文が見られる。19世紀のもと想定される。33-2(図版15-2-3)と33-4(図版15-2-2)は茶碗で、外側面に染付施文を確認できるが識別は困難である。19世紀のものと想定される。33-3(図版15-2-4)は残存部位のみからの器形の特定は難しいが、五寸皿ではないかと推定される。内側面に二重斜格子文が描かれており17世紀末～18世紀前半の波佐見焼の可能性がある。33-5(図版16-1-1)と33-6(図版16-1-2)はともに丸形碗で、外側面に雪輪草花文が描かれている。前者は18世紀後半の、後者は19世紀の波佐見焼の可能性が高い。33-7(図版16-1-3)は残存部位のみからの器形の特定は難しいが、皿ではないかと推定される。内底面に染付施文を確認できるが詳細は不明である。

その他の磁器(第34図，35図、図版16-2，17-1)

前述までの主な磁器の他に、産地や時期の不明な磁器片が数十点出土しているが、その中に辛うじて器形の判別が可能なものや染付によると思われる施文が確認できるものが数点ある。いずれも表面採集か第Ⅰおよび Ⅱ層からの出土であり、下位の土中(第Ⅱ層以下)から撹乱によって表土中(第Ⅰ層)もしくは地表面に散逸したものとしても近世の早い時期のものはないと判断する。

(3)金属製品

鉄製品(第36図、図版19)

層位的には第Ⅱ層下位～Ⅳ層上位での出土になるため、近世もしくは中世のものと推定される。表面を覆う夥しい錆のため、原形を留めないものも含めて数十点出土している。この内、器種の判別が可能であったものは、鎌(第36図-1・2・3、図版19-1)、火箸(第36図-4、図版19-3)、蹄鉄(第36図-5・6、図版19-2-1・2)、鍬(第36図-7、図版19-2-3)の計7点である。いずれも全体を覆う錆のため腐朽が進んでおり、部分的に非常に脆くなっている。

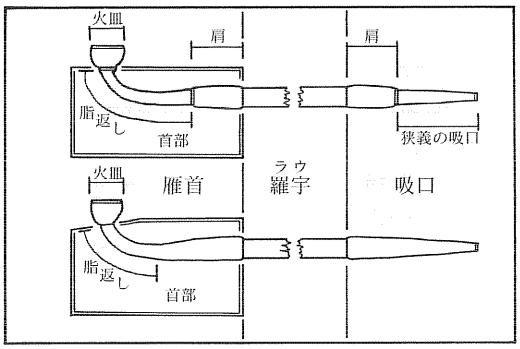
銅製品(第37図，38図、図版17-2，18-1)

本調査で出土した銅製品は、銭貨が3点、煙管の雁首が2点の計5点である。いずれも第Ⅱ層から

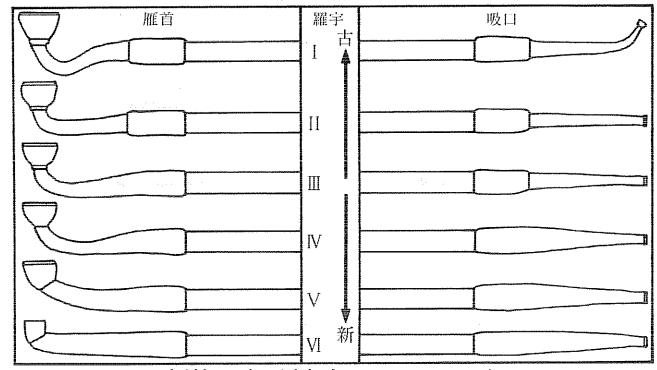
の出土か表面採集によるものである。

銭貨については、2点(第37図-1・2、図版17-2-1・2)は「寛永通寶」という銭文がほぼ完全に判読できる状態であるが、もう1点(第37図-3、図版17-2-3)は、腐食および摩滅の度合いが強く銭種の判別はできなかった。

煙管の雁首については、2点とも古泉　弘氏の煙管の編年観によると19世紀中に製作・使用されたものと想定される(下記第24図の煙管の変遷　第Ⅵ段階)。1点(第38図-2、図版18-1-1)は、火皿が小型で逆台形を呈し、脂返しの湾曲はほとんどなく火皿の下にほぼ直角に取り付いている。もう1点(第38図-1、図版18-1-2)もほぼ同形態であるが、羅宇に取り付く部分が一段太く巻かれた「肩付」という形状(下記第24図の煙管の変遷　第Ⅰ・Ⅱ段階)を示す点でやや例外的ではある。



煙管の部分名称(仮称)〔古泉 1985による〕



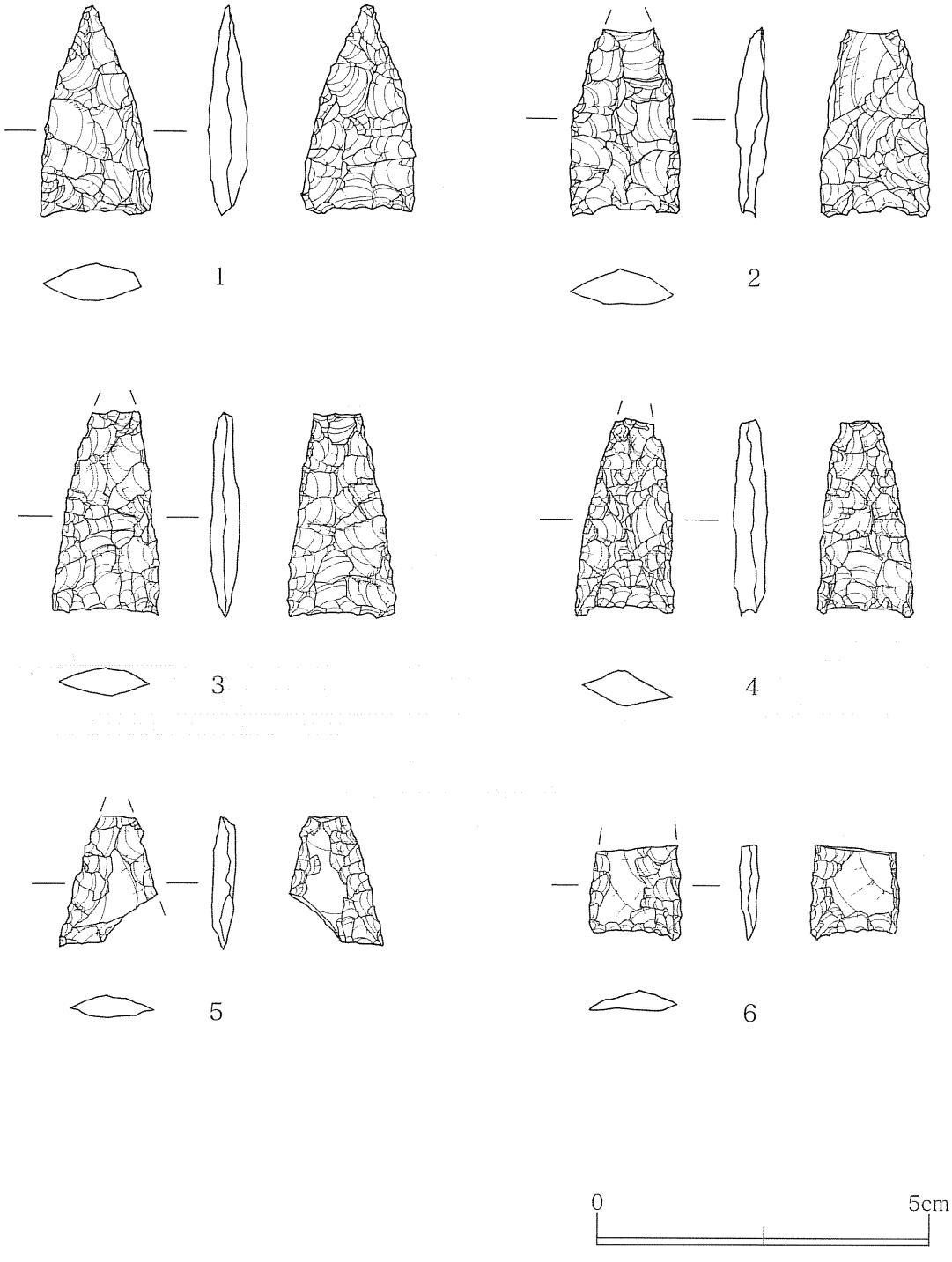
煙管の変遷〔古泉 1983による〕

第24図　煙管参考図

(4)骨

獣骨(図版18-2)

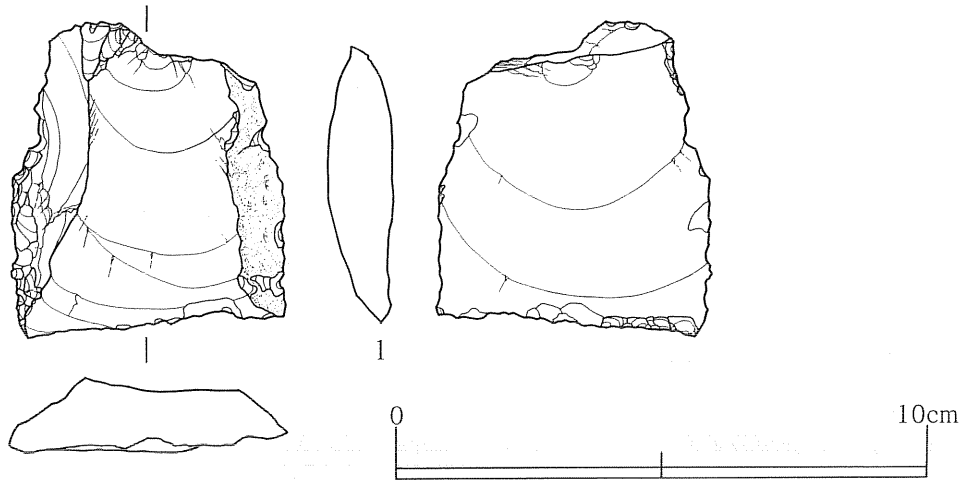
本調査で出土した骨は、比較的形がしっかりしているものと風化が進んで脆くなり小片化しつつあるものを合わせて10点余りであるが、全て獣骨であろうと思われる。層位的にも近世～現代にかけて土中に埋もれたか、あるいは家畜等を人為的に埋葬したものではないかと考える。



第25図　SK17出土遺物

第3表　SK17出土石器観察表

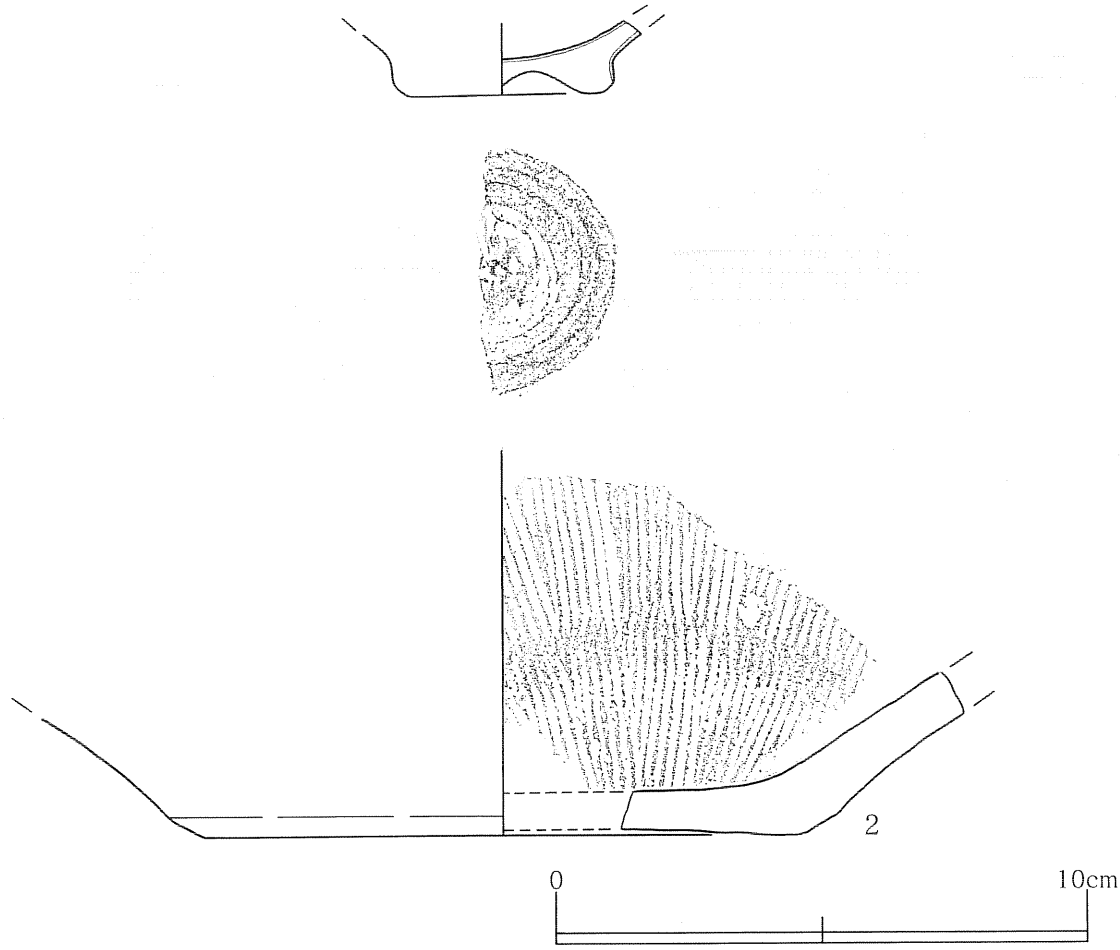
挿図番号	図版番号	器種	計測値				石材	備考
			最大長[mm]	最大幅[mm]	最大厚[mm]	重量[g]		
25-1	13-1-1	石鏃	31.4	16.6	6.3	2.9	貢岩	凹基無茎鏃
25-2	13-1-6	石鏃	(28.4)	16.6	5.2	(2.5)	貢岩	凹基無茎鏃
25-3	13-1-4	石鏃	(30.7)	15.8	4.3	(2.0)	貢岩	凹基無茎鏃
25-4	13-1-5	石鏃	(29.4)	15.2	5.6	(2.3)	貢岩	凹基無茎鏃
25-5	13-1-3	石鏃	(19.9)	(14.3)	3.3	(0.9)	貢岩	凹基無茎鏃
25-6	13-1-2	石鏃	(14.0)	13.9	3.1	(0.7)	貢岩	凹基無茎鏃



第26図　遺構外出土石器

第4表　遺構外出土石器観察表

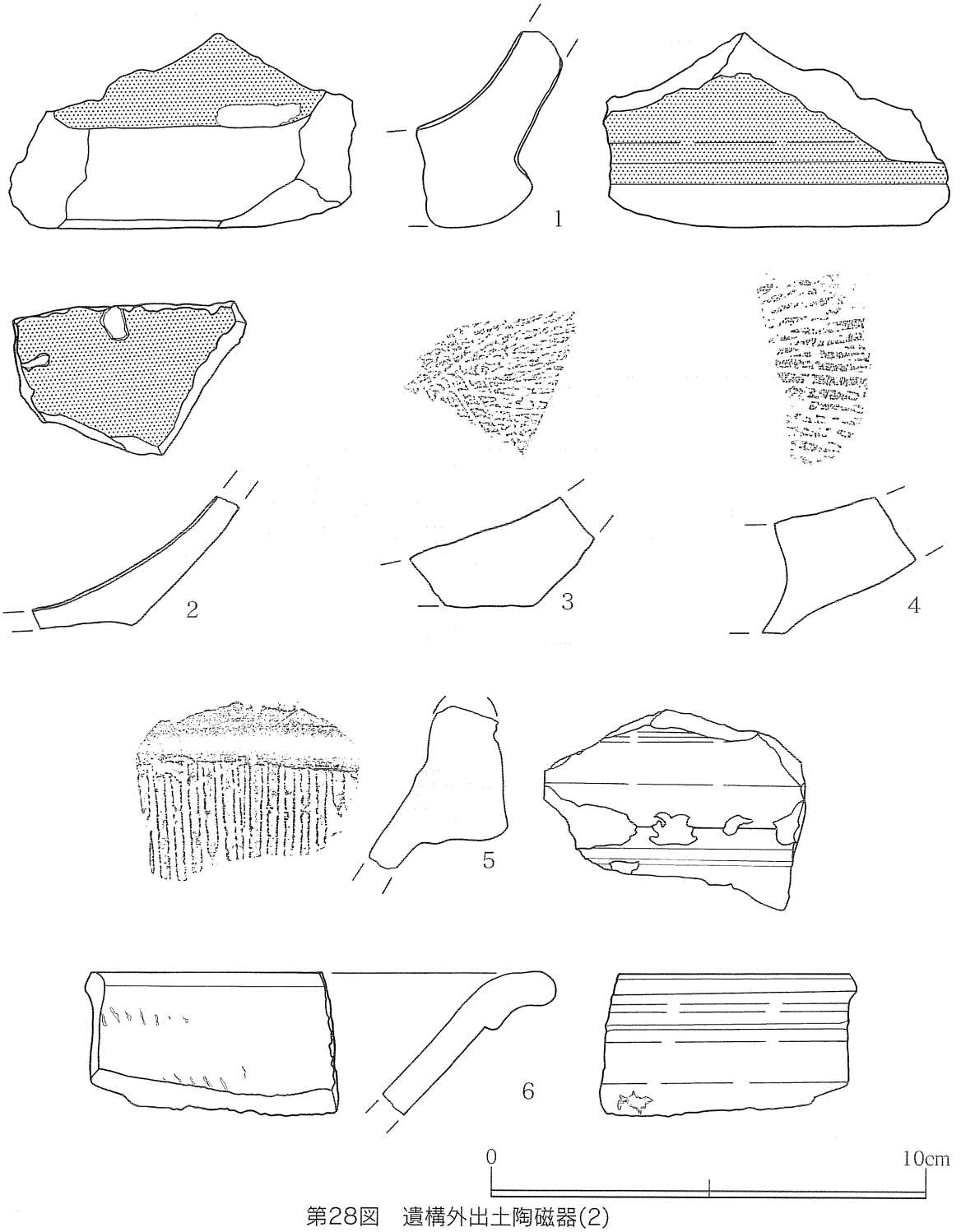
挿図番号	図版番号	出土地区	器種	計測値				石材	備考
				最大長[mm]	最大幅[mm]	最大厚[mm]	重量[g]		
26-1	13-2-1	B区	スクレイパー	61.1	45.7	12.8	46.5	頁岩	



第27図　遺構外出土陶磁器(1)

第5表　遺構外出土陶磁器観察表(1)

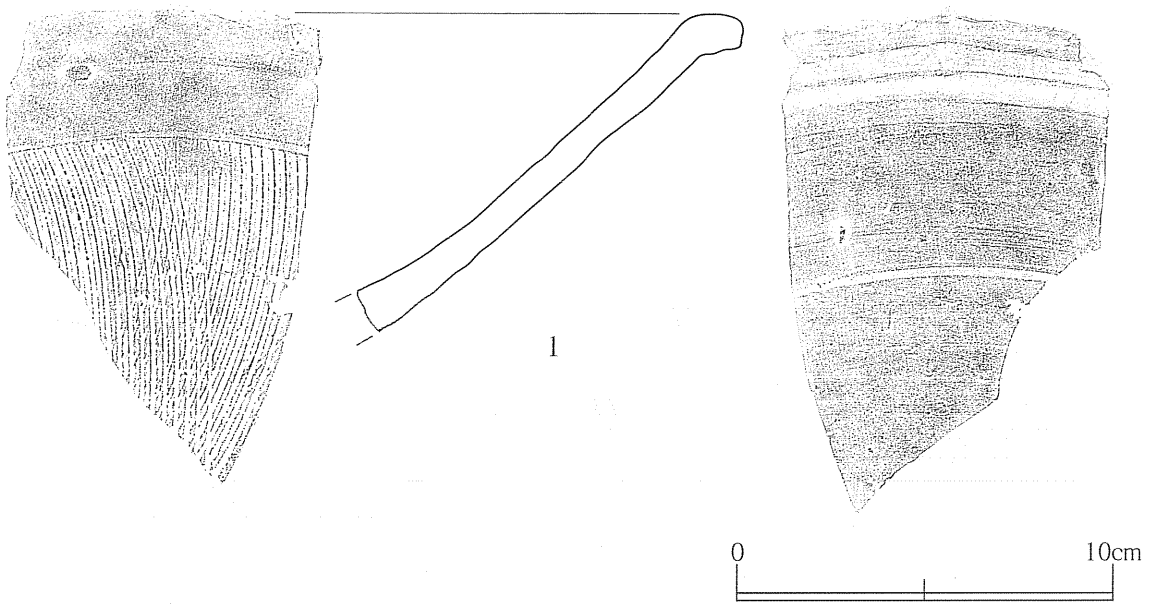
挿図番号	図版番号	出土地区	器種	残存部位	計測値〔cm〕			備考
					口径	底径	器高	
27-1	14-1-7	表採	不明	底部	—	(4.2)	—	内外側面に施釉
27-2	14-1-8	A区	擂鉢	底部	—	(11.3)	—	内外全面に鉄釉

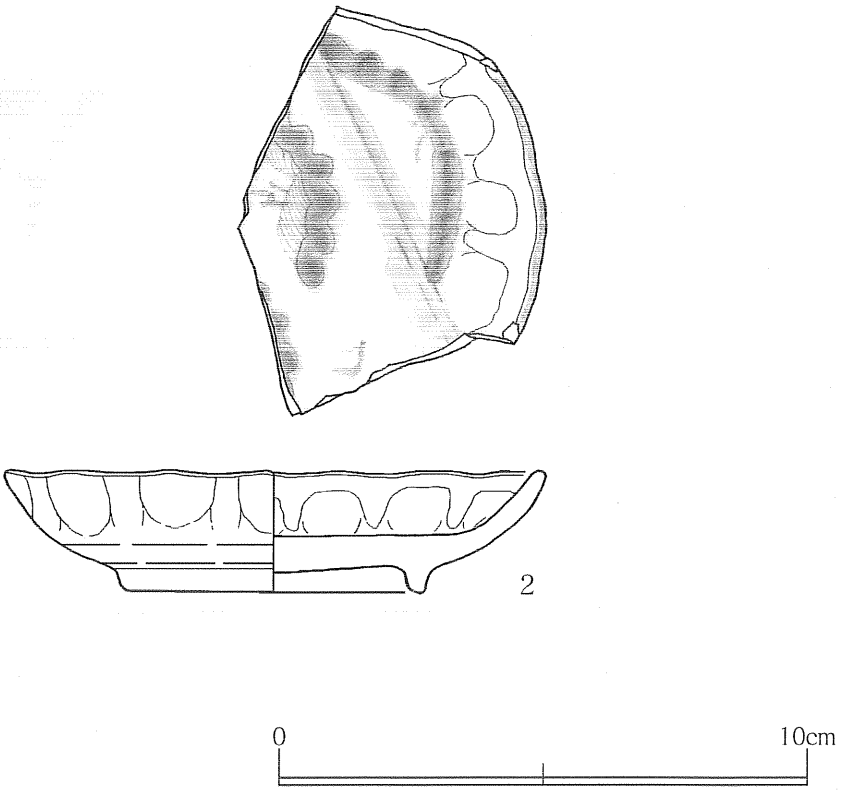


第28図　遺構外出土陶磁器(2)

第6表　遺構外出土陶磁器観察表(2)

挿図番号	図版番号	出土地区	器種	残存部位	計測値〔cm〕			備考
					口径	底径	器高	
28-1	14-1-4	B区	不明	底部	—	—	—	接地面を除く内外面に鉄釉
28-2	14-1-9	B区	不明	底部	—	(7.8)	—	内面に鉄釉
28-3	14-1-5	C区	擂鉢	底部	—	(6.8)	—	素焼き
28-4	14-1-1	A区	擂鉢	底部	—	—	—	素焼き
28-5	14-1-6	C区	擂鉢	口縁部	—	—	—	素焼き
28-6	14-1-3	B区	擂鉢	口縁部	(31.6)	—	—	内外全面に鉄釉

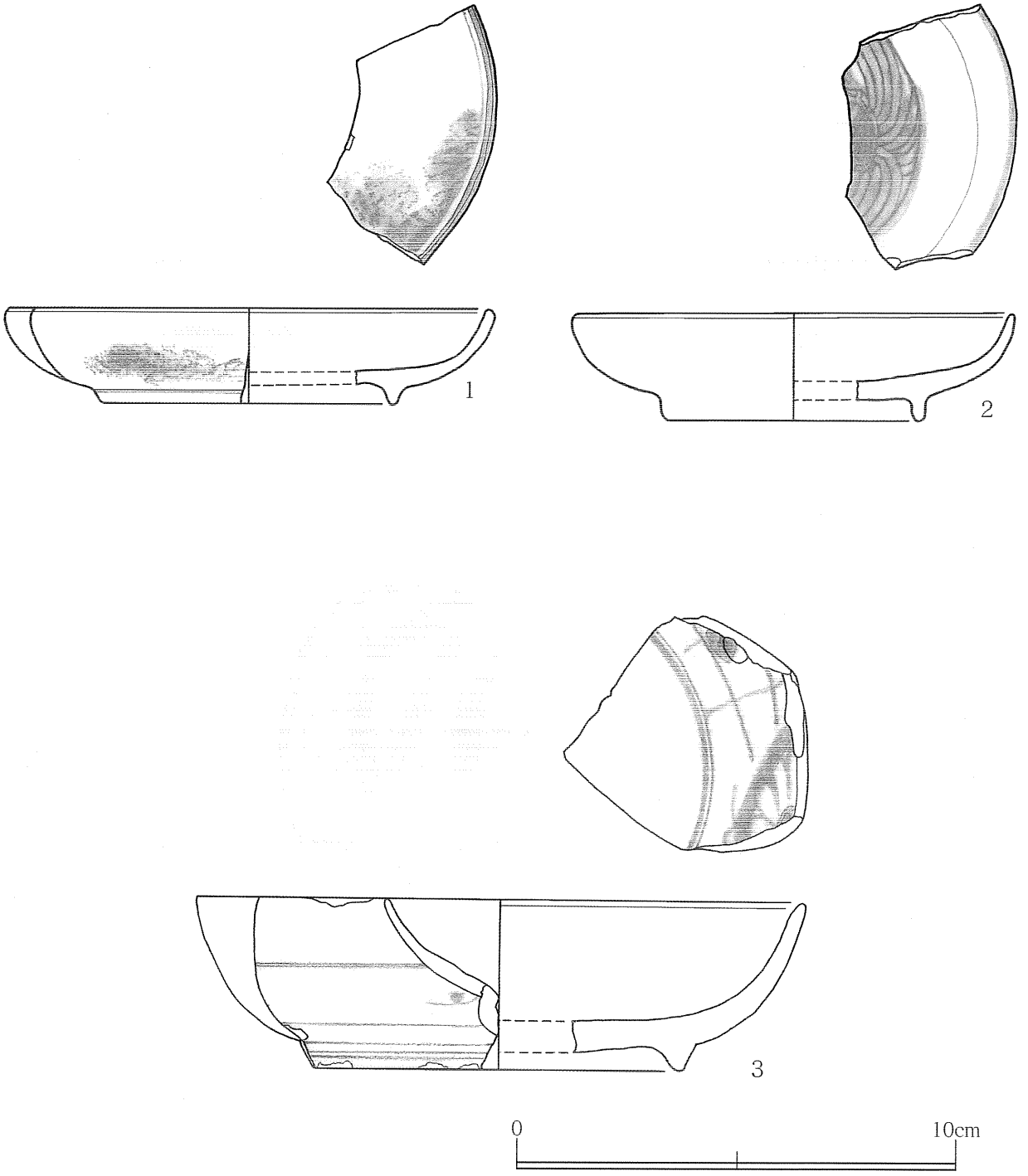




第29図　遺構外出土陶磁器(3)

第7表　遺構外出土陶磁器観察表(3)

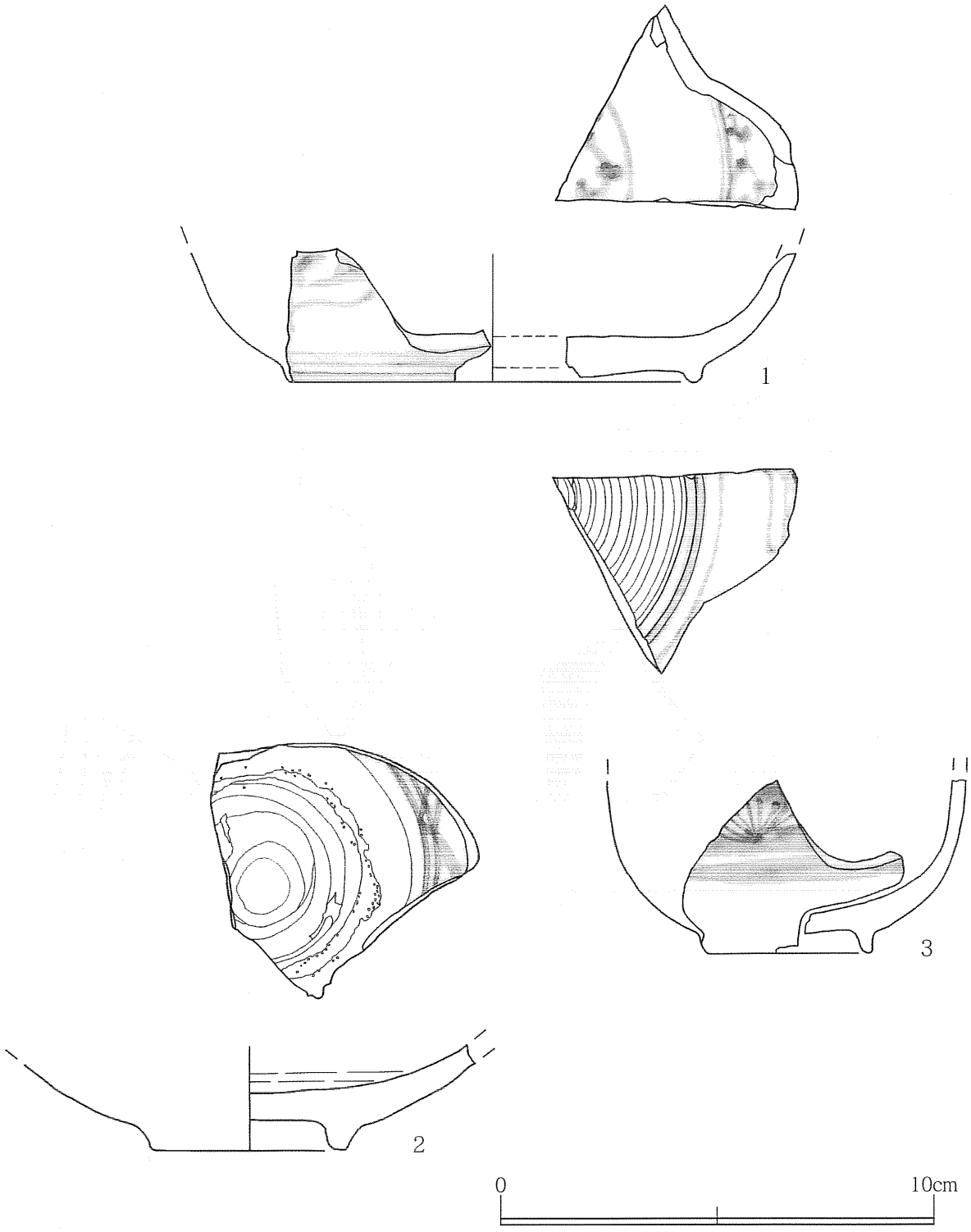
挿図番号	図版番号	出土地区	器種	残存部位	計測値〔cm〕			備考
					口径	底径	器高	
29-1	14-1-2	B区	擂鉢	口縁部	—	—	—	内外全面に鉄釉
29-2	14-2-1	B区	輪花皿	口縁～底部	(10.3)	(5.7)	2.4	19世紀の寺内焼系



第30図　遺構外出土陶磁器(4)

第8表　遺構外出土陶磁器観察表(4)

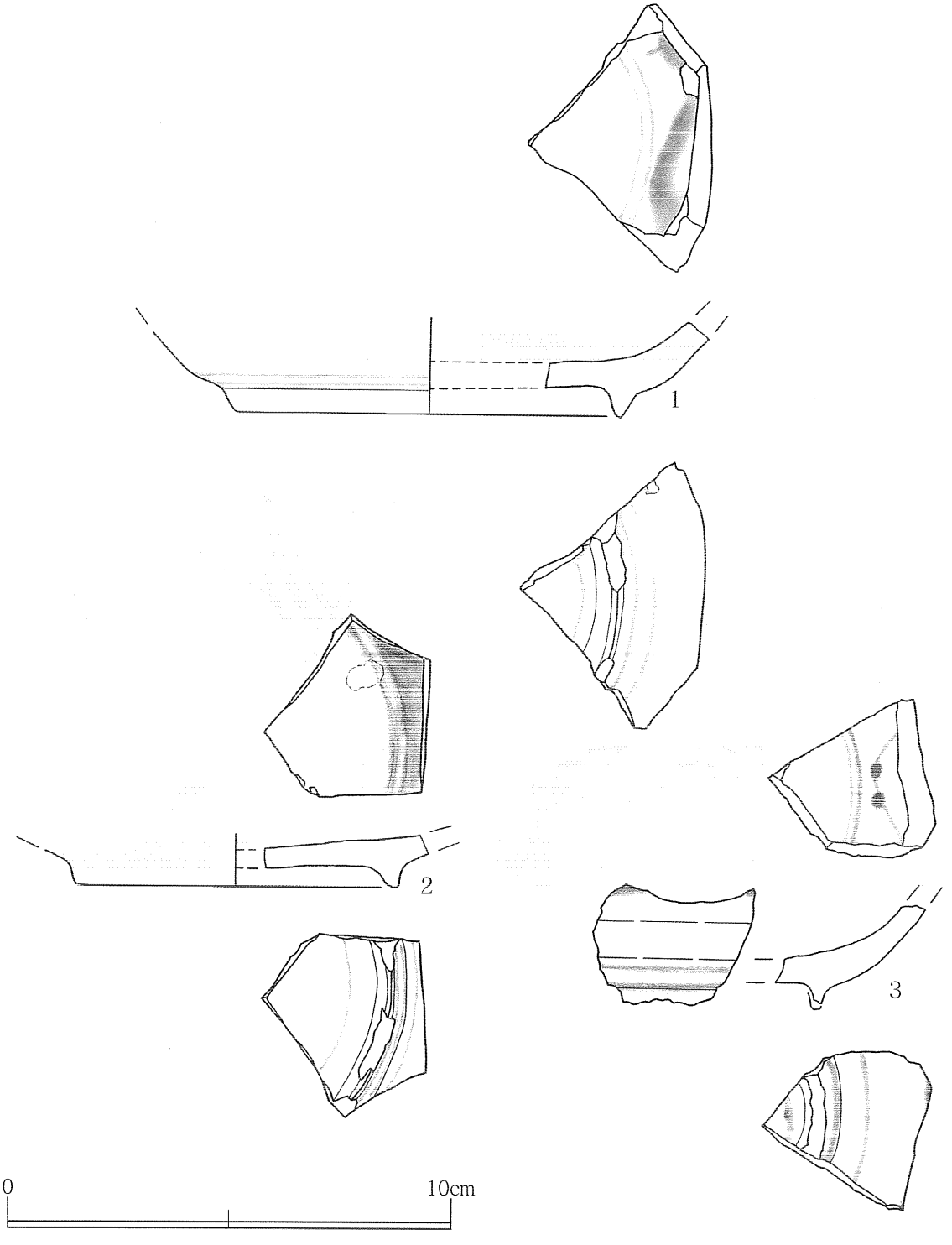
挿図番号	図版番号	出土地区	器種	残存部位	計測値〔cm〕			備考
					口径	底径	器高	
30-1	14-2-3	B区	丸皿	口縁～底部	(10.9)	(6.8)	2.2	19世紀の寺内焼系
30-2	14-2-2	C区	丸皿	口縁～底部	(9.9)	(5.8)	2.4	19世紀の寺内焼系
30-3	15-1-2	B区	深皿	口縁～底部	(13.8)	(8.4)	3.9	18～19世紀の肥前系



第31図　遺構外出土陶磁器(5)

第9表　遺構外出土陶磁器観察表(5)

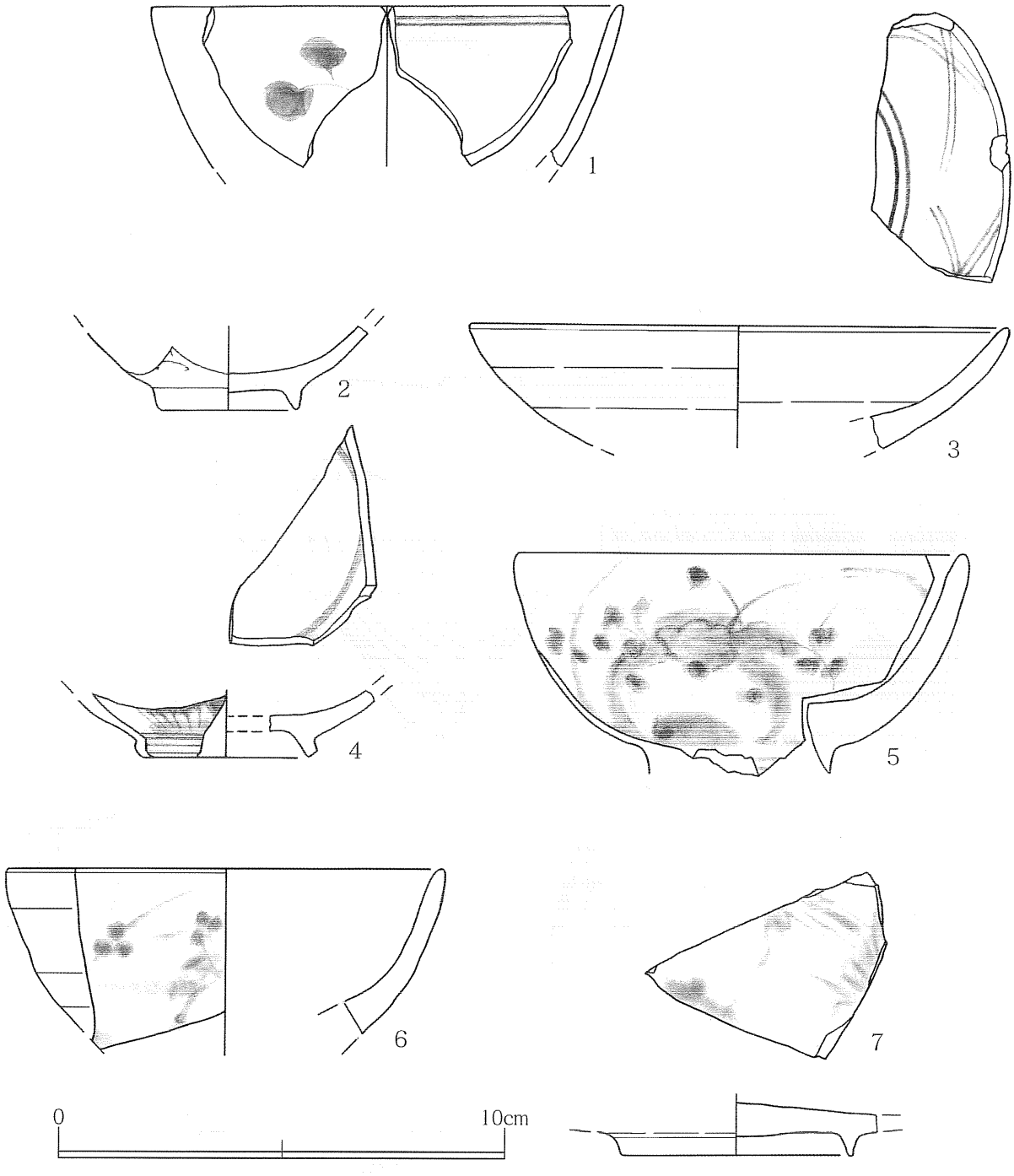
挿図番号	図版番号	出土地区	器種	残存部位	計測値〔cm〕			備考
					口径	底径	器高	
31-1	15-1-1	C区	蛇の目凹形高台皿	体～底部	—	(9.4)	—	18～19世紀の肥前系
31-2	15-1-7	C区	五寸皿	底部	—	(4.6)	—	18世紀前半の肥前系
31-3	15-1-5	B区	半球形碗	体～底部	—	(3.8)	—	19世紀の肥前系



第32図　遺構外出土陶磁器(6)

第10表　遺構外出土陶磁器観察表(6)

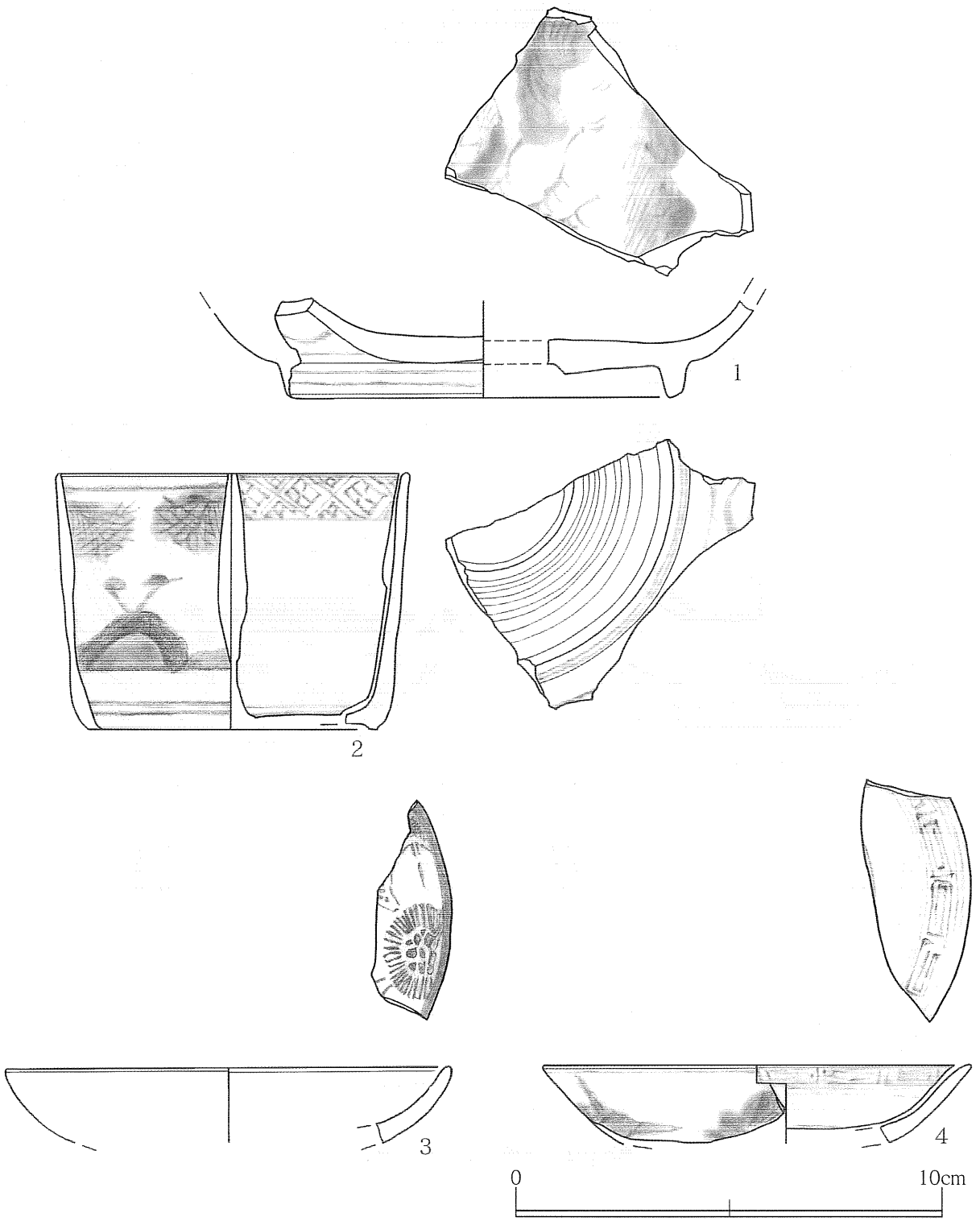
挿図番号	図版番号	出土地区	器種	残存部位	計測値〔cm〕			備考
					口径	底径	器高	
32-1	15-1-3	C区	丸皿(深皿？)	底部	—	(8.7)	—	18～19世紀の肥前系
32-2	15-1-6	C区	丸皿	底部	—	(7.2)	—	19世紀の肥前系
32-3	15-1-4	B区	丸形碗	体～底部	—	—	—	18世紀後半の肥前系



第33図　遺構外出土陶磁器(7)

第11表　遺構外出土陶磁器観察表(7)

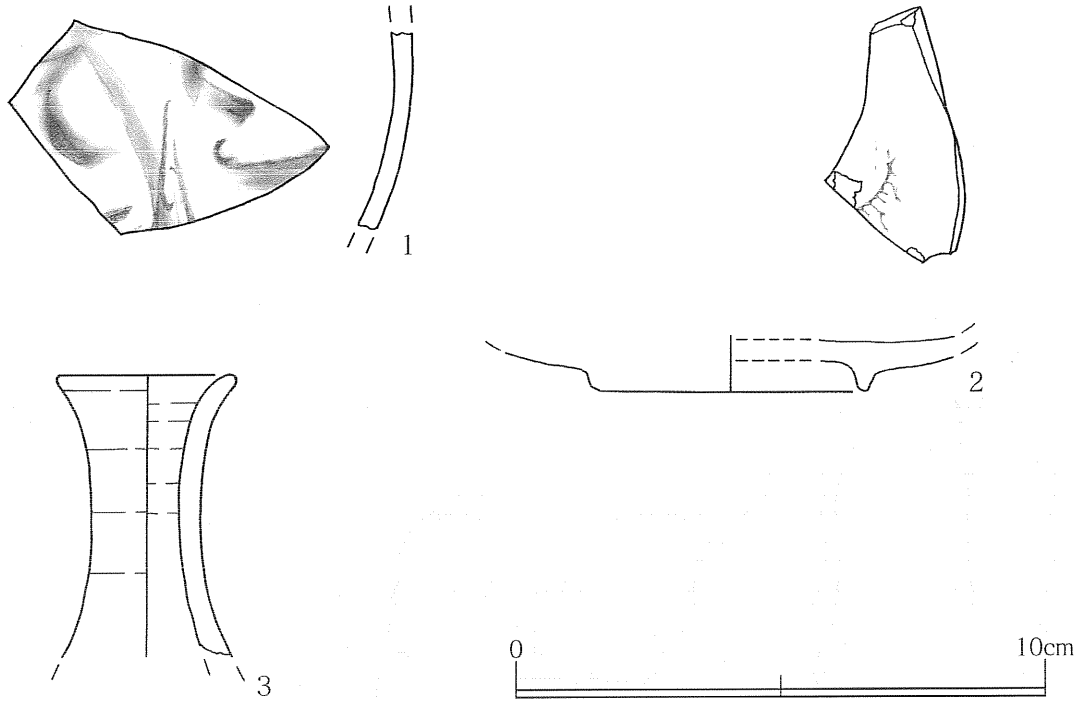
挿図番号	図版番号	出土地区	器種	残存部位	計測値〔cm〕			備考
					口径	底径	器高	
33-1	15-2-1	表採	丸形碗	口縁～体部	(10.6)	—	—	19世紀の肥前系
33-2	15-2-3	C区	茶碗	底部	—	(3.1)	—	19世紀の肥前系
33-3	15-2-4	B区	五寸皿	口縁～体部	(12.1)	—	—	17世紀末～18世紀前半の肥前系
33-4	15-2-2	A区	茶碗	底部	—	(4.1)	—	19世紀の肥前系
33-5	16-1-1	表採	丸形碗	口縁～底部	(10.1)	(4.1)	(5.1)	18世紀後半の肥前系
33-6	16-1-2	A区	丸形碗	口縁～体部	(9.8)	—	—	19世紀の肥前系
33-7	16-1-3	C区	皿？	底部	—	(5.2)	—	肥前系



第34図　遺構外出土陶磁器(8)

第12表　遺構外出土陶磁器観察表(8)

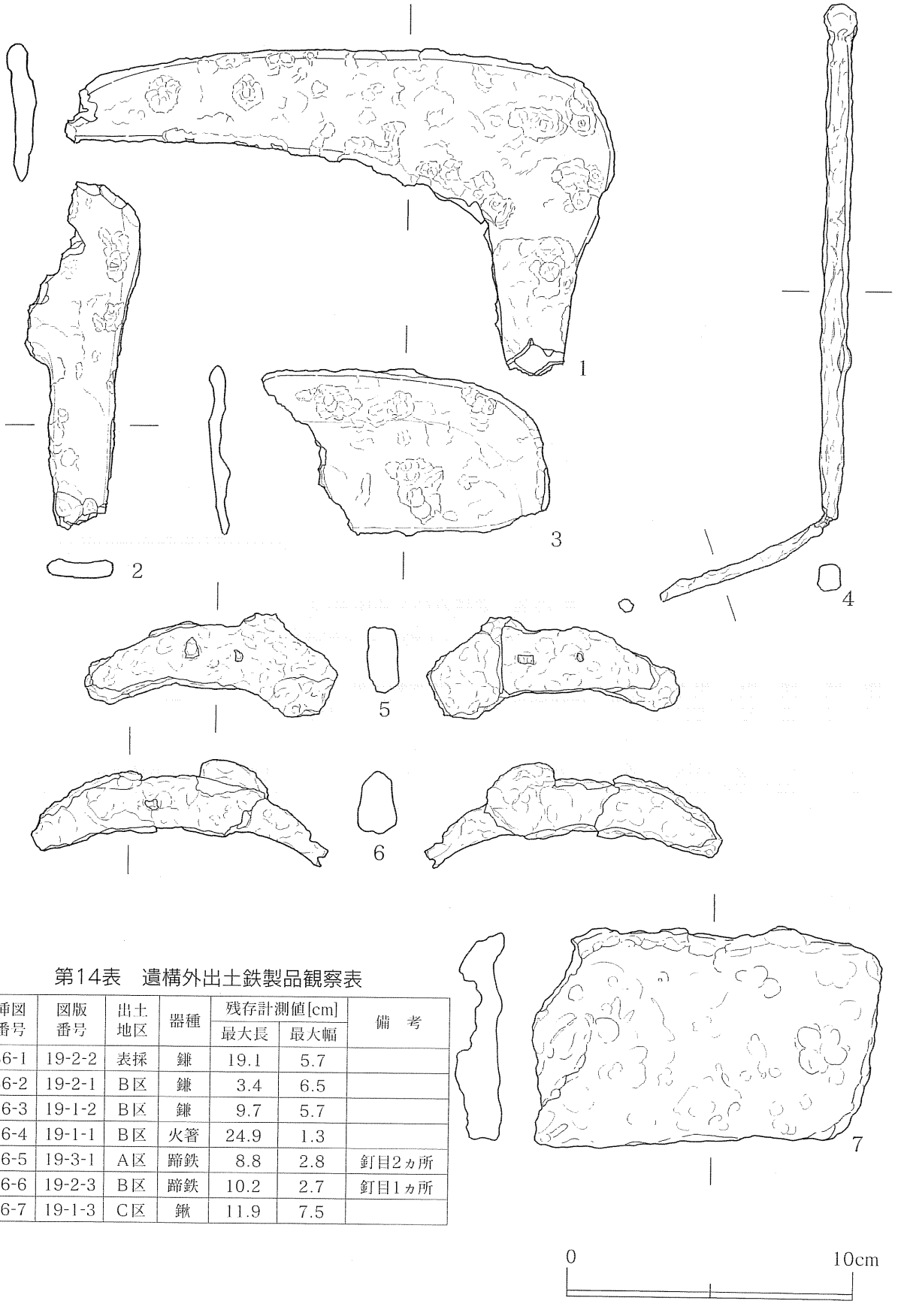
挿図番号	図版番号	出土地区	器種	残存部位	計測値〔cm〕			備考
					口径	底径	器高	
34-1	16-2-5	C区	蛇の目凹形高台皿	底部	—	(8.8)	—	高台内蛇の目釉剥ぎ
34-2	16-2-2	表採	蕎麦猪口	口縁～底部	(8.2)	(6.8)	6.1	染付施文、腰輪高台
34-3	16-2-4	B区	丸皿	口縁～体部	(10.4)	—	—	型紙転写施文
34-4	16-2-1	B区	丸皿	口底～体部	(10.0)	—	—	端反形、染付施文



第35図　遺構外出土陶磁器(9)

第13表　遺構外出土陶磁器観察表(9)

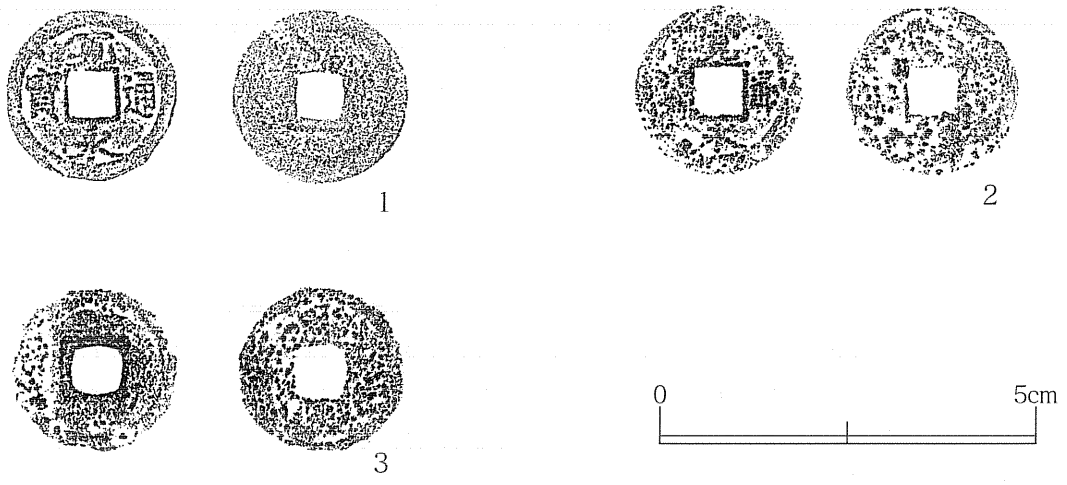
挿図番号	図版番号	出土地区	器種	残存部位	計測値〔cm〕			備考
					口径	底径	器高	
35-1	16-2-3	C区	瓶	体部	—	—	—	外面染付施文、内面ロクロ目無釉
35-2	17-1-2	A区	皿	底部	—	(5.2)	—	畳付部を除く前面施釉
35-3	17-1-1	B区	瓶	口頸部	(3.4)	—	—	口縁部を除き内面ロクロ目無釉



第14表　遺構外出土鉄製品観察表

挿図番号	図版番号	出土地区	器種	残存計測値[cm]		備　考
				最大長	最大幅	
36-1	19-2-2	表採	鎌	19.1	5.7	
36-2	19-2-1	B区	鎌	3.4	6.5	
36-3	19-1-2	B区	鎌	9.7	5.7	
36-4	19-1-1	B区	火箸	24.9	1.3	
36-5	19-3-1	A区	蹄鉄	8.8	2.8	釘目2ヵ所
36-6	19-2-3	B区	蹄鉄	10.2	2.7	釘目1ヵ所
36-7	19-1-3	C区	鍬	11.9	7.5	

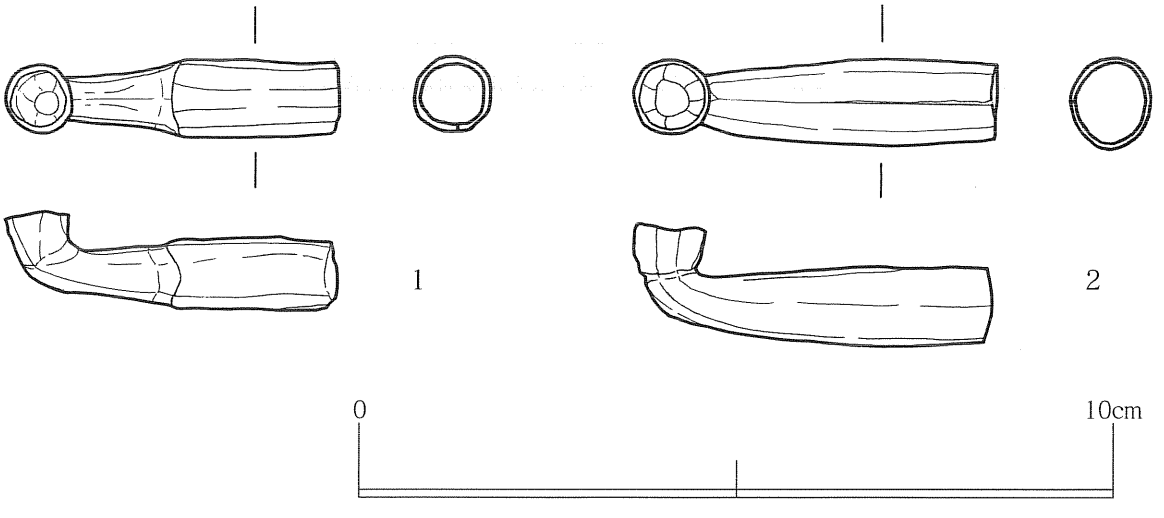
第36図　遺構外出土鉄製品



第37図　遺構外出土銭貨

第15表　遺構外出土銭貨観察表

挿図番号	図版番号	出土地区	銭種	残存部位	計測値				備考
					銭径〔mm〕	内径〔mm〕	銭厚〔mm〕	量目〔g〕	
37-1	17-2-2	表採	一文銭	寛永通寶	23.25	18.40	1.15	2.5	銅銭
37-2	17-2-1	A区	一文銭	寛永通寶	22.80	17.24	1.86	1.9	銅銭
37-3	17-2-3	A区	不明	不明	22.13	17.67	1.10	1.9	銅銭



第38図　遺構外出土煙管

第16表　遺構外出土煙管観察表

挿図番号	図版番号	出土地区	残存部位	残存計測値			備考
				最大長〔mm〕	最大径〔mm〕	重量〔g〕	
38-1	18-1-2	B区	雁首	42.55	9.40	6.4	19世紀、肩付
38-2	18-1-1	B区	雁首	46.25	11.03	5.2	19世紀

参考文献

・秋田県教育委員会　『秋田県の中世城館』　秋田県文化財調査報告書第86集　1981(昭和56)年
・千田嘉博　小島道裕　前川　要　『城館調査ハンドブック』　新人物往来社　1997(平成9)年
・新人物往来社　『城郭研究最前線　ここまで見えた城の実像』　別冊歴史読本71　第21巻　第41号　1996(平成8)年
・帝京大学山梨文化財研究所　「小特集　中世城館と民衆」　『研究報告』　第5集　1994(平成6)年
・郡山市教育委員会　『郡山館跡―第1次遺構確認調査報告―』　1998(平成10)年
・いわき市教育委員会　『常磐自動車道遺跡調査報告　7　大平B遺跡・大平C遺跡―古代集落・近代屋敷跡の調査―』　いわき市埋蔵文化財調査報告　第44冊　1996(平成8)年
・よねしろ考古学研究会　「特集　中世城館」　『よねしろ考古』　第4号　p1～62　1988(昭和63)年
・鹿角市教育委員会　『鹿角の館―館跡航空写真測量調査報告書(5)―』　鹿角市文化財調査資料30　1986(昭和61)年
・男鹿市教育委員会　『脇本城と脇本城跡』　男鹿市文化財調査報告第9集　1994(平成6)年
・男鹿市教育委員会　『脇本城と脇本城跡―第2次・第3次調査報告―』　男鹿市文化財調査報告第14集　1996(平成8)年
・男鹿市教育委員会　『脇本城と脇本城跡―第4次～第6次調査報告―』　男鹿市文化財調査報告第19集　1999(平成11)年
・仁賀保町教育委員会　『山根館跡―「にかほ史跡の里づくり事業」に係る予備発掘調査報告書―』　1999(平成11)年
・秋田県教育委員会　『石鳥谷館跡発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第279集　1998(平成10)年
・秋田県教育委員会　『脇神館跡発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第284集　1999(平成11)年
・秋田県教育委員会　『虫内Ⅰ遺跡発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第274集　1998(平成10)年
・駒沢大学考古学研究室　『先史26　東京・太陽の丘遺跡』　1987(昭和62)年
・秋田県教育委員会　「上ノ山Ⅱ遺跡」　『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅱ』　下　秋田県文化財調査報告書第166集　1988(昭和63)年
・佐々木秀憲　「伊万里焼―磁器の誕生」　矢部良明監修　『カラー版　日本やきもの史』　第6章　美術出版社　1999(平成11)年
・佐々木達夫　『日本史小百科　陶磁』　東京堂出版　1994(平成6)年
・秋田市教育委員会・秋田城跡発掘調査事務所　『寺内焼窯跡―寺内小学校建設に伴う近世陶磁器・瓦・煉瓦窯跡の発掘調査―』　1991(平成3)年
・九州近世陶磁学会　『九州陶磁の編年―九州近世陶磁学会10周年記念―』　2000(平成12)年
・安西　剛編　『骨董の名人に聞くやきものの見分け方　伊万里』　GAKKEN GRAPHIC BOOKS DELUXE⑥　学習研究社　1999(平成11)年
・出川直樹監修　『やきもの鑑定入門』　芸術新潮編集部　新潮社　1991(平成3)年
・永井久美男編　『日本出土銭総覧　1996年版』　兵庫埋蔵銭調査会　1996(平成8)年
・古泉　弘　『江戸を掘る』　柏書房　1983(昭和58)年
・古泉　弘　「銅製品」　『江戸―都立一橋高校地点発掘調査報告』　都立一橋高校内遺跡調査団　1985(昭和60)年
・古泉　弘　「江戸の街の出土遺物」　『季刊考古学』　第13号　1985(昭和60)年
・秋田県教育委員会　『国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財調査報告書Ⅴ―山王岱遺跡―』　秋田県文化財調査報告書第221集　1992(平成4)年

第5章　自然科学的分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

第1節　はじめに

御嶽公園館跡で検出された各遺構に関して、性格や構築時期の解明を目的として、調査実施する。分析を行う遺構は空堀跡(SD01)、多量の炭化物と少量の焼土が出土する遺構(SX04、SX07)、焼土と炭化物の密集域(SX05、SX15)、落とし穴と思われる遺構(SK11、SK16、SK17)である。この中でSK17は墓として二次利用された可能性が指摘されている。また、調査区内の段状地形に関してもその時期推定のための調査を実施する。以下に分析目的と対象となる遺構、分析手法を述べる。

・調査区内の地形改変の時期

調査区内でみられた段状地形が構築(切土・盛土・整地)された時期として、現代と中世の2つの可能性があるが、これを検討する目的で放射性年代測定を実施する。

・遺構の構築年代推定

遺構が利用されていた時期を推定するために、SD01、SX04、SX05、SX07、SX15、SK16の各遺構を対象に、放射性炭素年代測定を実施する。

・遺構の性格や利用法の推定

遺構の性格や利用法について検討する目的で、SD01は珪藻分析と植物珪酸体分析、SX04、SX05、SX07、SX15については微細遺物抽出同定、SK17ではリン分析、SK11とSK16では灰像分析をそれぞれ実施する。特にSD01は埋積時の堆積環境を、SX04、SX05、SX07、SX15、SK11、SK16については当時の燃料材などの植物利用について、SK17は遺体埋納の可能性に着目して調査を行う。

1　試料

分析試料ならびに分析項目は、第17表にまとめる。分析試料ならびに項目の選択にあたっては、先に述べた目的を考慮した。

2　方法

(1)放射性炭素年代測定

測定は、㈱地球科学研究所に依頼した。前処理として、酸－アルカリ－酸洗浄を行い、測定は加速器質量分析(AMS)を用いている。

(2)珪藻分析

試料を湿重で7g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する。種の同定は、K.Krammer and Lange-Bertalot(1986・1988・1991a・1991b)、K.Krammer(1992)などを用いる。

同定結果は、海水～汽水生種、淡水～汽水生種、淡水生種の順に並べ、その中の各種類はアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお、淡水生種についてはさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度(pH)・流水に対する適応能についても示す。また、環境指標種についてはその内容を示す。そして、産出個体数100個体以上の試料については、産出率1.0%以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集図を作成する。また、産出した化石が現地性か異地性かを判断する目安として完形殻の出現率を求め考察の際に考慮した。堆積環境の解析にあたって、淡水生種については安藤(1990)、陸生珪藻については伊藤・堀内(1991)、汚濁耐性については、Asai,K.&,Watanabe,T.(1995)、生活型などについてはVOS,P.C.& DE WOLF,H.(1993)の環境指標種を参考とする。

(3)植物珪酸体分析

植物珪酸体分析は、近藤・佐瀬(1986)の方法を参考にした。数gを秤量後、過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理(70W,250KHz,1分間)、沈定法、重液分離法(ポリタングステイト,比重2.4)の順に物理・化学処理を行って分離・濃集する。これを検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥する。乾燥後、プリュウラックスで封入しプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)、これらの珪酸体を包含する組織片を近藤・佐瀬(1986)の分類に基づいて同定・計数する。

(4)灰像分析

灰の保存状態が良好な場合には、一部を採取し、プレパラートにそのまま封入するのであるが、今回のものは保存が悪いためそのままでは難しい。そこで、試料を通常行っている植物珪酸体処理を行い、同定の際組織片の産状に注目した。これは、植物体が土壌中に取り込まれた後は、ほとんどが土壌化や撹乱などの影響により分離して単体となるが、植物遺体や植物が燃えた後の灰には組織構造が植物珪酸体列などの形で残されている場合が多い(例えば、パリノ・サーヴェイ株式会社, 1993)ためである。

(5)微細遺物分析

試料を秤量したあと、数%の水酸化ナトリウム水溶液に浸して放置し、試料を泥化させる。0.5mmの篩に通して水洗し、残渣を集めたあと、残渣を水流中に投入して、浮遊する炭化物を回収する。炭化物は自然乾燥させたあと重量を測定し、同定可能なものを抽出する。浮遊しなかった残渣は、双眼実体顕微鏡で観察し、同定可能な遺物がないか精査する。

(6)リン酸分析

リン酸は硝酸・過塩素酸分解－バナドモリブデン酸比色法で行った(土壌養分測定法委員会, 1981)。以下に各項目の操作工程を示す。

試料を風乾後、軽く粉砕して2.00mmの篩を通過させる(風乾細土試料)。風乾細土試料の水分を加熱減量法(105℃、5時間)により測定する。風乾細土試料2.00gをケルダール分解フラスコに秤量し、はじめに硝酸(HNO_3)約5mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸($HClO_4$)約10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100mlに定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸(P_2O_5)濃度を測定する。測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン含量(P_2O_5mg/g)を求める。

第2節　分析結果

1　結果

(1)放射性炭素年代測定

結果を第18表に示す。この中での^{14}C年代値は、試料の^{14}Cと^{12}Cの比から単純に現在(西暦1950年)から何年前(BP)かを計算した年代を示す。半減期としては5568年を用いている。補正^{14}C年代は、試料の炭素安定同位体比(^{13}C／^{12}C)を測定して試料の炭素の同位体分別を知り、^{14}C／^{12}Cの測定値に補正値を加えた上で、産出した年代である。δ^{13}Cは、試料の測定^{14}C／^{12}Cを補正するための^{13}C／^{12}Cの比率(千分偏差)である。暦年代は、過去の宇宙線強度の変動による大気中^{14}C濃度の変動に対する補正を行った値である。補正には、年代既知の樹木年輪の14Cの測定、サンゴのU-Th年代と14C年代との比較により補正曲線を作成し、暦年代を産出する。なお、補正に用いたデーターベースは、INCAL98 Radio-carbon Age Calib-ration(1998年版)である。

(2)珪藻分析

結果を第39図・第19表に示す。陸上のコケや土壌表面などの好気的環境に耐性のある陸生珪藻が優占することを特徴とする。完形殻の出現率は、約70%である。主な産出種は、陸生珪藻の中でも分布が陸域に限られるA群(伊藤・堀内,1991)の*Hantzschia amphioxys*、*Navicula contenta fo.bicepsが*優占し、同じくA群の*Navicula mutica*、*Neidium alpinum*、水域にも陸域にも生育する陸生珪藻B群(伊藤・堀内，1991)の*Nitzschia brevissima*、未区分陸生珪藻(伊藤・堀内，1991)の*Pinnularia schoenfelderi*などを伴う。

(3)植物珪酸体分析

結果を第40図・第20表に示す。植物珪酸体が検出されるものの、保存状態の悪いものが多く、表面に多数の小孔(溶食痕)が認められる。検出される種類はイネ属、タケ亜科、ウシクサ族(ススキ属を含む)、イチゴツナギ亜科などであり、特にタケ亜科の産出が目立つ。また、イネ属やタケ亜科の珪化組織片もわずかに認められる。

(4)灰像分析

SK11、SK16ともに珪化組織片は、全く認められない。単体のタケ亜科がわずかに認められるに過ぎない。

(5)微細遺物分析

結果を第21表に示す。検出された炭化物は少なく、ほとんど炭化材である。大きさが1～2mmと微細なため、種類の特定は難しい。

(6)リン酸分析

結果を第22表に示す。比較試料として行った基本土層は、約1.5mg/gである。しかし、SK17の遺構覆土はこれより低く、いずれも1mg/gを下回っている

2　考察

(1)遺構の時代観について

放射性炭素年代測定の結果、各遺構から検出された炭化物の時代観を得ることができた。測定値からすると、縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代、現代にわかれるようにみえる。しかし、後代の炭

素による汚染や古い時代からの炭素の二次堆積などの可能性もあり、時代の推定には他の情報も加味しながら総合的にとらえていく必要がある。一方、地形改変された土壌に関しては、現在に近い値がえられていることから、改変された時期は比較的新しい可能性がある。

(2)遺構の性格や利用法の推定

・ＳＤ01

遺構覆土からは、陸上の好気的環境に耐性のある陸生珪藻が90％以上と優占する。陸生珪藻の割合(特にＡ群)が高い場合、当時の堆積環境は水成堆積したのではなく、陸上の乾いた好気的環境であったとされる(伊藤・堀内，1991)。よって、SD01の溝内は乾いており、風などによって周囲から土壌が運ばれながら埋積が進んだことが推定される。一方、検出された植物珪酸体の種類はタケ亜科、ウシクサ族(ススキ属を含む)、イチゴツナギ亜科などであり、これらが周囲に生育していたものと考えられる。いずれも人里など開けた草地によく見られる種類である。また、イネ属の珪化組織片もわずかに認められた。イネ属の植物体、すなわち稲藁は農耕地に残されるだけでなく、構築材や燃料材などの生活資材として利用される。今回検出されたイネ属珪酸体は、こういった資材に由来する可能性がある。

・ＳＸ04、ＳＸ05、ＳＸ07、ＳＸ15

いずれの試料も、水洗後の残渣では、炭化物があまりみられなかった。分析前の土壌を見た限りでは、もう少し多いようにも感じたが、水洗後の残渣は少なかった。おそらく、炭化物の保存が悪く、水洗によって分解されてしまったと考えられる。したがって、今回の手法では、遺構の性格に関する有用な情報を得ることは難しかった。

・ＳＫ11、ＳＫ16

分析の結果、イネ科と思われる組織片はみられなかった。このことから、炭化物の由来がイネ科以外の植物に由来する可能性もある。今回の手法では、遺構の性格に関する有用な情報を得ることは難しかった。

・ＳＫ17

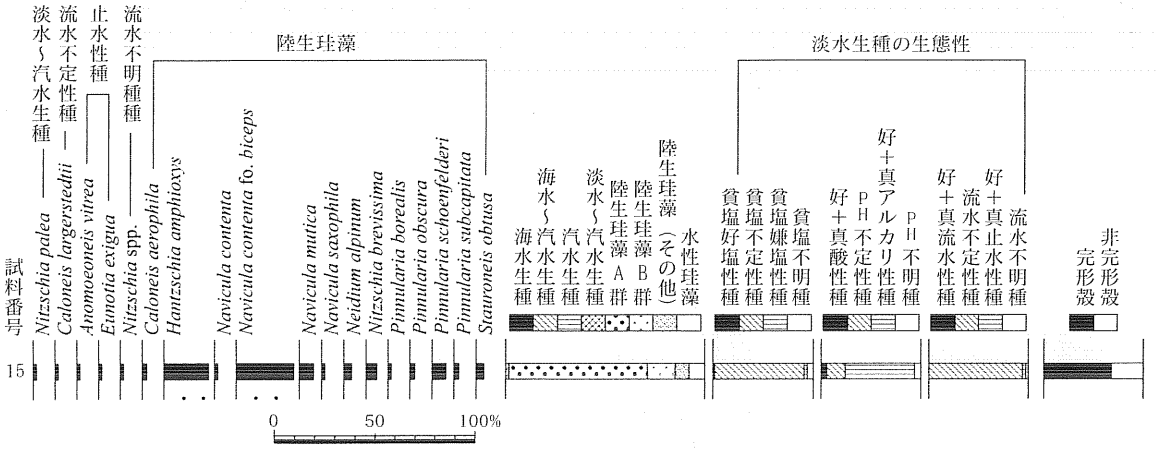
今回は、遺体埋納推定を目的として土壌理化学分析を行った。分析を行ったリン酸は土壌中に普遍的に存在する元素である。しかし、これらは生物に取り込まれて濃集されることから、遺体などが埋葬されている場合、他の地点より相対的に高くなると考えられる。今回の分析成果をみると、値のばらつきが比較的小さく、また対象試料とした基本土層の値よりも低いことから、周溝内の覆土が本質的に持っている含量に近いと思われる。このように、今回の結果から、遺体埋納の可能性を推定することは困難である。ヒトなどの大型の場合は、豊島馬場遺跡の例にあるように(辻本，小林，1995)、ある程度範囲をもって濃集部があると考えられる。今後、平面的に分析点数を増やすなどの方法も試みる必要があろう。

第17表　分析試料一覧表

試料番号	試料名など		試料の質	分析項目					
				年代測定	珪藻分析	植物珪酸体分析	灰像分析	リン分析	微細遺物分析
1	第２基本土層（II層）内採取炭化物		炭化物	○					
2	第３基本土層（II層）内採取炭化物		炭化物	○					
3	南端部テラス状地形地山面採取炭化物		炭化物	○					
4	SD01覆土中採取炭化物		炭化物	○					
5	SX04覆土中採取炭化物		炭化物	○					
6	SX05覆土中採取炭化物		炭化物	○					
7	SX07覆土中採取炭化物		炭化物	○					
8	SX15覆土中採取炭化物		炭化物	○					
9	SK16覆土中採取炭化物		炭化物	○			○		
10	第３基本土層の上層サンプル	I層	土壌						
11		II層	土壌					○	
12		III層	土壌						
13		IV層	土壌						
14		V層	土壌						
15	SD01覆土サンプル		土壌		○	○			
16	SX04覆土サンプル（焼土を含む）		土壌						○
17	SX05覆土サンプル（焼土を含む）		土壌						○
18	SX07覆土サンプル（焼土を含む）		土壌						○
19	SK11覆土サンプル	北側上部	土壌						
20		北側下部	土壌						
21		中央上部	土壌				○		
22		中央下部	土壌						
23		南側上部	土壌						
24		南側下部	土壌						
25	SX15サンプル（焼土を含む）		土壌						○
26	SK17覆土サンプル	最上層部	土壌					○	
27		中上層部	土壌					○	
28		中央層部	土壌					○	
29		中下層部	土壌					○	
30		最下層部	土壌					○	
合計点数				9	1	1	2	6	4

第18表　放射性炭素年代測定結果

番号	試料の内容など	^{14}C年代 (y.B.P)	δ^{13}C (Permil)	補正^{14}C年代 (y.B.P)	暦年代 (95%区間推定)		Code No.
1	第２基本土層（II層）内採取炭化物	120 ± 30	-26.5	100 ± 30	cal AD 1680～1745 cal AD 1805～1935	Cal BP 270～ 205 Cal BP 145～ 15	Beta-136312
2	第３基本土層（II層）内採取炭化物	1020 ± 50	-26.1	1000 ± 50	cal AD 970～1160	Cal BP 980～ 790	Beta-136313
3	南端部テラス状地形地山面採取炭化物	180 ± 50	-26.8	150 ± 50	cal AD 1650～1950	Cal BP 300～ 0	Beta-136314
4	SD01覆土中採取炭化物	250 ± 60	-28.6	190 ± 60	cal AD 1530～1545 cal AD 1635～1950	Cal BP 420～ 425 Cal BP 315～ 0	Beta-136315
5	SX04覆土中採取炭化物	1370 ± 50	-25.5	1360 ± 50	cal AD 615～ 765	Cal BP1335～1185	Beta-136316
6	SX05覆土中採取炭化物	1500 ± 60	-27.0	1470 ± 60	cal AD 440～ 670	Cal BP1510～1280	Beta-136317
7	SX07覆土中採取炭化物	950 ± 40	-28.6	890 ± 40	cal AD 1030～1235	Cal BP 920～ 715	Beta-136318
8	SX15覆土中採取炭化物	1210 ± 60	-26.0	1190 ± 60	cal AD 685～ 990	Cal BP1265～ 960	Beta-136319
9	SK16覆土中採取炭化物	6000 ± 60	-27.0	5970 ± 60	cal BC 4985～4715	Cal BP6935～6665	Beta-136320



汽水―淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は1%未満の種類を示す。

第39図　主要珪藻化石群集

第19表　珪藻分析結果

種　　類	生態性			環境指標種	試料No.15 SD01覆土サンプル
	塩分	pH	流水		
Nitzschia palea (Kuetz.)W.Smith	Ogh-Meh	ind	ind	S	2
Anomoeoneis vitrea (Grun.)Ross	Ogh-hob	ac-il	l-ph	T	2
Caloneis aerophila Bock	Ogh-ind	al-il	ind	RA	3
Caloneis largerstedtii (Lagerst.)Cholnoky	Ogh-ind	al-il	ind	S	2
Eunotia exigua (Breb.)Grunow	Ogh-hob	ac-bi	l-ph	P	2
Gomphonema parvulum Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	1
Hantzschia amphioxys (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,U	29
Navicula contenta Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	2
Navicula contenta fo. biceps (Arnott)Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	37
Navicula mutica Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	RA,S	9
Navicula saxophila Bock	Ogh-ind	ind	ind	RB	2
Neidium alpinum Hustedt	Ogh-unk	unk	ind	RA	5
Nitzschia brevissima Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RB,U	7
Nitzschia debilis (Arnott)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RB,U	1
Nitzschia spp.	Ogh-unk	unk	unk		2
Pinnularia borealis Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA	2
Pinnularia obscura Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA	3
Pinnularia schoenfelderi Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	9
Pinnularia subcapitata Gregory	Ogh-ind	ac-il	ind	RB,S	3
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	unk		1
Stauroneis obtusa Lagerstedt	Ogh-ind	ind	ind	RB	5
海水生種合計					0
海水～汽水生種合計					0
汽水生種合計					0
淡水～汽水生種合計					2
淡水生種合計					127
珪藻化石総数					129

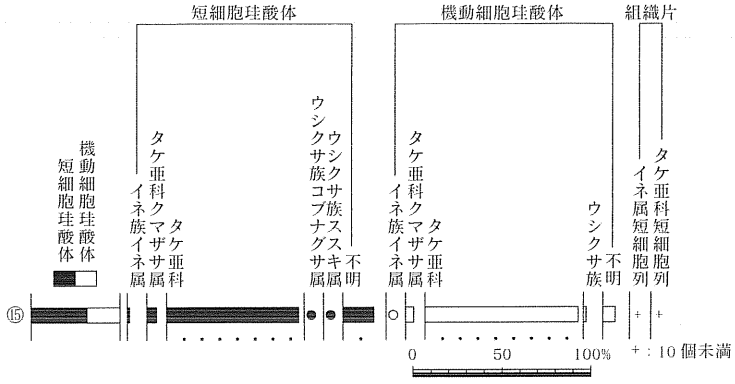
凡例

H.R.：塩分濃度に対する適応性
- Ogh-Meh　：淡水ー汽水生種
- Ogh-ind　：貧塩不定性種
- Ogh-hob　：貧塩嫌塩性種
- Ogh-unk　：貧塩不明種

pH：水素イオン濃度に対する適応性
- al-bi　：真アルカリ性種
- al-il　：好アルカリ性種
- ind　：pH 不定性種
- ac-il　：好酸性種
- unk　：pH 不明種

C.R.：流水に対する適応性
- l-ph　：好止水性種
- ind　：流水不定性種
- unk　：流水不明種

環境指標種群
P:高層湿原指標種（安藤，1990）
S:好汚濁性種，U:広域適応性種，T:好清水性種（以上は Asai，K. & Watanabe，T.，1986）
R:陸生珪藻（RA:A 群，RB:B 群，RI 群、伊藤・堀内，1991）



出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満の種類を示す。また、組織片の産状を検出個数により＋の記号で示す。

第40図　植物珪酸体群集と組織片の産状

第20表　植物珪酸体分析結果

種　　類	試料No.15 SD01覆土サンプル
イネ科葉部短細胞珪酸体	
イネ族イネ属	3
タケ亜科クマザサ属	12
タケ亜科	167
ウシクサ族コブナグサ属	1
ウシクサ族ススキ属	2
不明キビ型	27
不明ヒゲシバ型	1
不明ダンチク型	11
イネ科葉身機動細胞珪酸体	
イネ族イネ属	1
タケ亜科クマザサ属	6
タケ亜科	113
ウシクサ族	2
不明	9
合　　計	
イネ科葉部短細胞珪酸体	224
イネ科葉身機動細胞珪酸体	131
総計	355
組　織　片	
イネ属短細胞列	3
タケ亜科短細胞列	3

第21表　微細遺物分析結果

試料番号	試料名など	試料の質	分析量	炭化物量
16	SX04覆土サンプル（焼土を含む）	土壌	150g	0.4g
17	SX05覆土サンプル（焼土を含む）	土壌	150g	0.1g>
18	SX07覆土サンプル（焼土を含む）	土壌	190g	0.9g
25	SX15サンプル（焼土を含む）	土壌	90g	0.1g>

第22表　リン酸分析結果

試　料　名	土　性	土　色	P205(mg/g)	備　考
試料No.11　第3基本土層サンプル	SiCL	10YR4/2　灰黄褐	1.47	
試料No.26　SK17覆土サンプル	SiCL	10YR4/4　褐	0.63	
試料No.27　SK17覆土サンプル	HC	10YR4/3　にぶい黄褐	0.64	
試料No.28　SK17覆土サンプル	HC	10YR4/3　にぶい黄褐	0.68	
試料No.29　SK17覆土サンプル	HC	10YR4/4　褐	0.73	
試料No.30　SK17覆土サンプル	HC	10YR4/4　褐	0.95	

注．（1）土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修，1967）による。
（2）土性：土壌調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編，1984）の野外土性による。
SiCL･･･シルト質埴壌土（粘土15～25%、シルト45～85%、砂0～40%）
HC･･･重埴土（粘土45～100%、シルト0～55%、砂0～55%）

参考文献

・安藤一男「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『東北地理』42　p.73-88　1990(平成2)年
・Asai,K. and Watanabe,T. (1995)Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom, 10, p.35-47.
・土壌養分測定法委員会編『土壌養分分析法』440p　養賢堂　1981(昭和56)年
・伊藤良永・堀内誠示「陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用」『珪藻学会誌』6　p.23-45　1991(平成3)年
・近藤錬三・佐瀬　隆「植物珪酸体分析，その特性と応用」『第四紀研究』25　p.31-64　1986(昭和61年)
・Krammer,K. and Lange-Bertalot,H. (1986)Bacillariophyceae,Teil 1,Naviculaceae. Band 2/1 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 876p., Gustav Fischer Verlag.
・Krammer,K. and Lange-Bertalot,H. (1988)Bacillariophyceae,Teil 2,Epithemiaceae, Bacillariaceae,Surirellaceae. Band 2/2 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 536p., Gustav Fischer Verlag.
・Krammer,K. and Lange-Bertalot,H. (1991a)Bacillariophyceae,Teil 3,Centrales, Fragilariaceae,Eunotiaceae. Band 2/3 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 230p., Gustav Fischer Verlag.
・Krammer,K. and Lange-Bertalot,H. (1991b)Bacillariophyceae,Teil 4,Achnanthaceae, Kritsche Ergaenzungen zu Navicula(Lineolatae)und Gomphonema. Band 2/4 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 248p., Gustav Fischer Verlag.
・Krammer,K. (1992)PINNULARIA, eine Monographie der europaischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND 26, p.1-353. , BERLIN·STUTTGART.
・Lange-Bertalot,H.unter Mitarbeit von A.Steindorf(1995)Rote Liste der Kieselalgen (Bacillariophyceae) Deutschlands. Schr.-R.f.Vegetationskde.H.28 000-000 BfN, Bonn-Bad Godesberg p.1-31.
・農林省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』　1967(昭和42)年
・パリノ・サーヴェイ株式会社「自然科学分析からみた人々の生活(1)」慶應義塾藤沢校地埋蔵文化財調査室編『湘南藤沢キャンパス内遺跡 第1巻 総論』p.347-370　慶應義塾　1993(平成5)年
・ペドロジスト懇談会編『土壌調査ハンドブック』156p　博友社　1984(昭和59)年
・辻本崇夫・小林　高「豊島馬場遺跡における周溝内埋葬について　－土壌分析結果を中心として－」『豊島馬場遺跡(本文編)』北区埋蔵文化財調査報告16集　p.368-371　東京都北区教育委員会　1995(平成7)年
・Vos,P.C. and H.de Wolf(1993)Reconstruction of sedimentary environments in Holocene
・costal depositsof the southwest Netherlands; the Poortvliet boring, a case study of palaeoenvironmental diatom research. Twelfth International Diatom Symposium, p.297-296.

第6章　まとめ

御嶽公園館跡は、第3章で既述のとおり通称「御嶽公園」と呼ばれている台地とその周辺域一帯で、東西約800m、南北約500mを測り、面積にして約400,000m²の広がりを有する非常に大規模なものとなっている。しかし、今回の調査区は主要部と見られる区域の南西側斜面中腹(標高63～73m)に位置し、面積は8,400m²で館跡全体の推定規模に対して僅か2%余りに過ぎない。その調査結果については、第3章および第4章で詳細に述べてきたとおりである。そこで、本章では調査区外にも目を向けて、中世の館跡であるということに視点を絞って述べてみたいと思う。

御嶽公園内には現況で確認でき得る、かつて館を構成していたに違いないと判断するに難くない人工施設的地形が、植林による杉林や雑木林となっている山林および背丈の高い雑草が生い茂る原野によって大部分覆いが掛けられているが、その隙間を縫って方々で素顔を覗かせている。自然の地形を巧みに利用して部分的には帯曲輪様や腰曲輪様の段築、元来急峻な斜面をさらにきつい傾斜にした切岸、部分的に土塁を伴う空堀、そして極め付きは、段築と石囲いによって方形に区画された曲輪群である。昼なお薄暗い杉木立の裾に繁茂する下草に覆い隠されているが、その聖域とも言うべき一角に一歩足を踏み入れると、整然と重なり合う曲輪の群れの中には凛とした空気が漂い、何か張り詰めた気配すら感じさせる。兵どもが残せし遺産の重みであろうか。

このような館跡の横顔とも言うべき人工地形をできる限り漏らさず記録すべく、空撮と地上踏査および光波測量を駆使して第6図のような現況地形図を作成したところ、まず第1に、段築の数の多さと、薬研堀状(断面形がV字)を呈する空堀が、鬱蒼とした雑草の中にあってもしっかりとその存在を確認できたことは驚きであった。第2に、作成された地形図を「縄張図」として見たとき、事前に目を通しておいた『秋田県の中世城館』に幾例かの類似する図が掲載されていたのを想起させられた。その1例目は合川町に所在する杉館である。比高およそ45mの連郭性形状を呈し、全体が主郭と西郭および東部腰曲輪から構成される。主郭は東西40～45m、南北25～30mの曲輪状平坦面で長方形を成し、その西側に2条の空堀があって西郭に連なる。東部の腰曲輪は7段に分かれて主郭に連結する。西方は沢になって天然の堀を成す。合川の中心部より米内沢方面を遠望できる要衝である。2例目は同じく合川町に所在する西根田館である。北流する小阿仁川左岸西根田地区の西、標高108～124mの丘陵上に位置する。北部苗代沢側の郭は落長根の館と称され比高およそ80m、主郭は東西およそ30m、南北およそ18mの台地で2条の空堀を配し、南部湯殿側の郭は比高およそ100mで西根田の館と称され、東西およそ15m、南北およそ8mの長方形状の6段の腰曲輪状平坦面から構成され、北側尾根に3条の空堀が見られる。3例目は鹿角市に所在する長嶺館である。比高20～40mで5つ前後の郭が連続して認められる。これら連郭の西側斜面に5～6段にも及ぶ帯曲輪が設けられている。郭間には空堀が設けられているかあるいは急斜面となっている。4例目は男鹿市に所在する脇本城跡である。同城跡は、平成7年2月の男鹿市文化財指定のあと、平成9年3月には秋田県文化財の指定も受ける史跡となっている。脇本城は日本史上でも注目される位置を占めていた城であり、国指定文化財の可能性も指摘されている城跡で、御嶽公園館跡と比較類推するにはいろいろな意味で完成度が高すぎるのではあるが、その多方面かつ多岐にわたる計画的な調査研究の成果から多くの示唆を与えられているこ

とは間違いないところである。脇本城跡で注目したいのは夥しい数の曲輪群を持つということである。特に兜ヶ崎曲輪群の南側から東側にかけて造成された見事な腰曲輪群は、同城内の腰曲輪群の中で最も丹念に造られており、城下町から遠望する者ばかりか、城内から仰ぎ見る者に対しても威圧感を与えずにはおかない。

以上、館跡の構成要素としての現況地形を縄張り調査という視点から捉えて、御嶽公園館跡と比較できる4例について紹介してきたが、立地環境について共通して言えることは、舌状台地や丘陵状台地等の自然の地形を上手に利用し巧みに館が構築されているという点である。この点で御嶽公園館跡も自然地形を見事に利用して無駄なく、無理なく広大な築館に奏功していたといえるのではないだろうか。また、敢えて逆の見方をするならば、幾重にも連なる空堀や土塁、数段に及ぶ見事な曲輪群などは、石積み技法を持たない東北の築城技術における最高の発展段階を示すものであり、連続する人工地形によって長大な壁面を構成するようなものは、まさに石積みや石垣による壁面処理に替わるものであったと評価することができよう。

最後に、男鹿市文化財調査報告第19集『脇本城と脇本城跡』の中に非常に興味深い記述があったので、以下にその幾つかを引用して本章の結びとしたい。「連続竪堀・竪土塁群は、斜面を上り来る敵に対する備えであると同時に、城外からの往来人に対する脇本城主の権威誇示の舞台装置の1つでもあった」、「尾根裾・堀底・谷などから脇本城の諸曲輪を仰ぎ見させることによって、人々にその威容を眺望させる」、「脇本城の巨大さとその荘厳を演出する役割を果たす装置」、「竪堀竪土塁状遺構の最大の特徴は、見る人に対する“見せびらかし”であり、“権威の象徴”であり、“権力の威容を漂わせること”を意識したなかで作り出されたもの」、「脇本城は“見せる城”として、遺憾なくその機能を発揮した」等々である。御嶽公園館跡の全貌および詳細については不明な点が多いが、何か脇本城跡に共通する匂いが漂っている、というのは言い過ぎであろうか。

参考文献

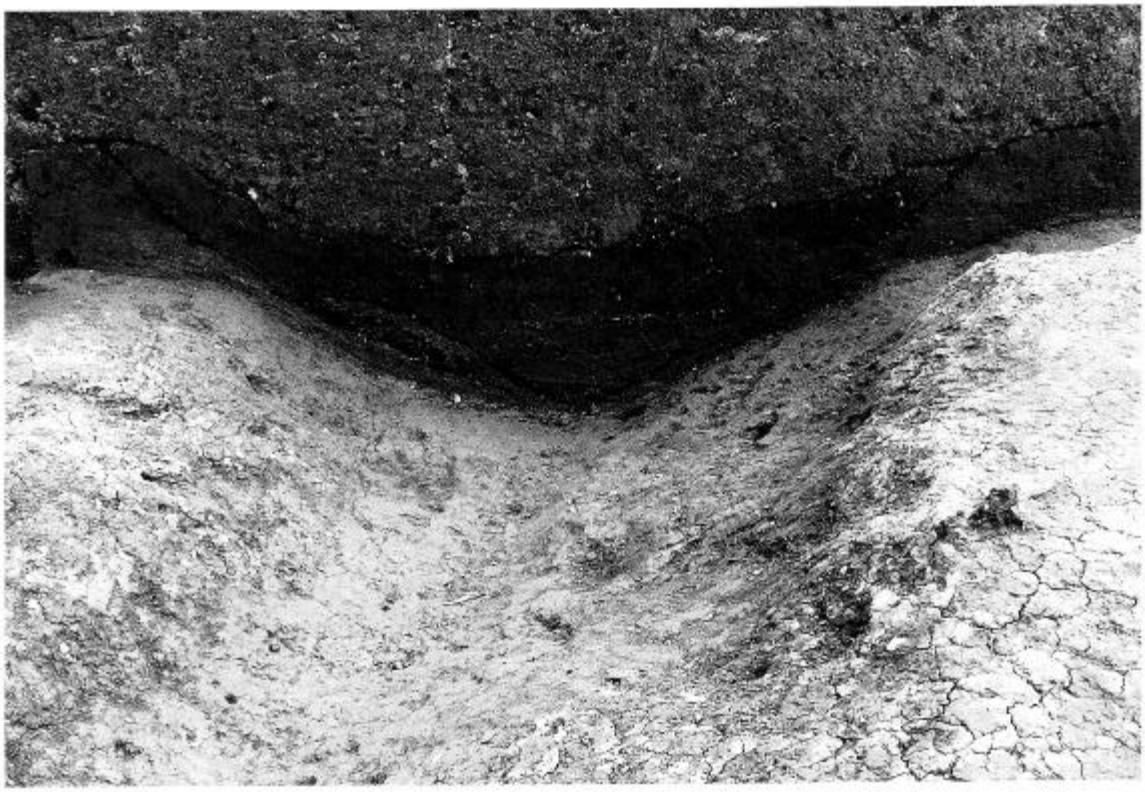
・秋田県教育委員会　『秋田県の中世城館』　秋田県文化財調査報告書第86集　1981(昭和56)年
・男鹿市教育委員会　『脇本城と脇本城跡』　男鹿市文化財調査報告第9集　1994(平成6)年
・男鹿市教育委員会　『脇本城と脇本城跡―第2次・第3次調査報告―』　男鹿市文化財調査報告第14集　1996(平成8)年
・男鹿市教育委員会　『脇本城と脇本城跡―第4次～第6次調査報告―』　男鹿市文化財調査報告第19集　1999(平成11)年
・千田嘉博　小島道裕　前川　要　『城館調査ハンドブック』　新人物往来社　1997(平成9)年
・新人物往来社　『城郭研究最前線　ここまで見えた城の実像』　別冊歴史読本71　第21巻　第41号　1996(平成8)年
・鹿角市教育委員会　『鹿角の館―館跡航空写真測量調査報告書(5)―』　鹿角市文化財調査資料30　1986(昭和61)年
・よねしろ考古学研究会　「特集　中世城館」　『よねしろ考古』　第4号　p1～62　1988(昭和63)年

御嶽公園館跡全景

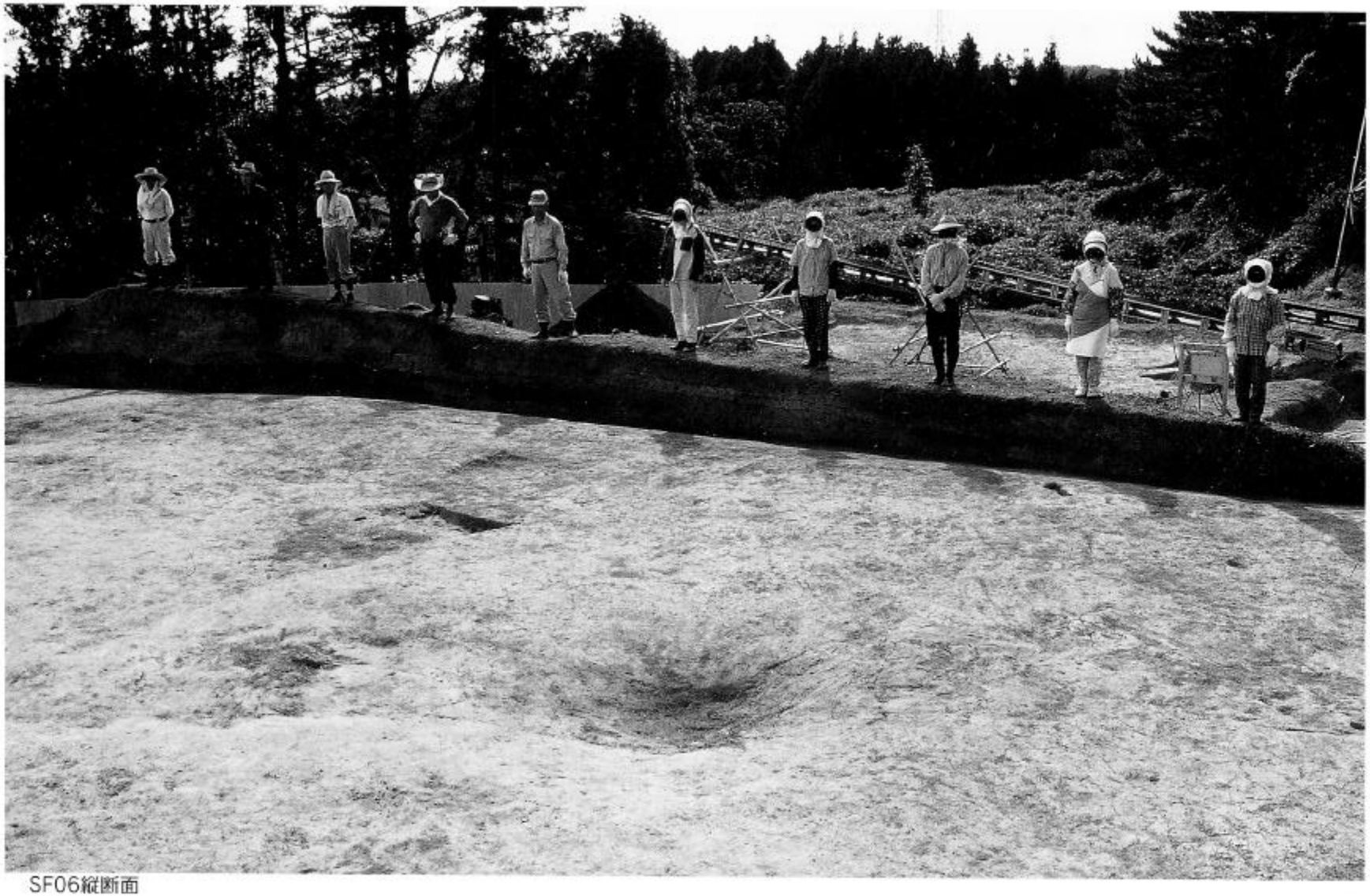
一覧図

図版2

1．段状地形断面(第2基本土層の一部)



2．SD01断面(C—D)

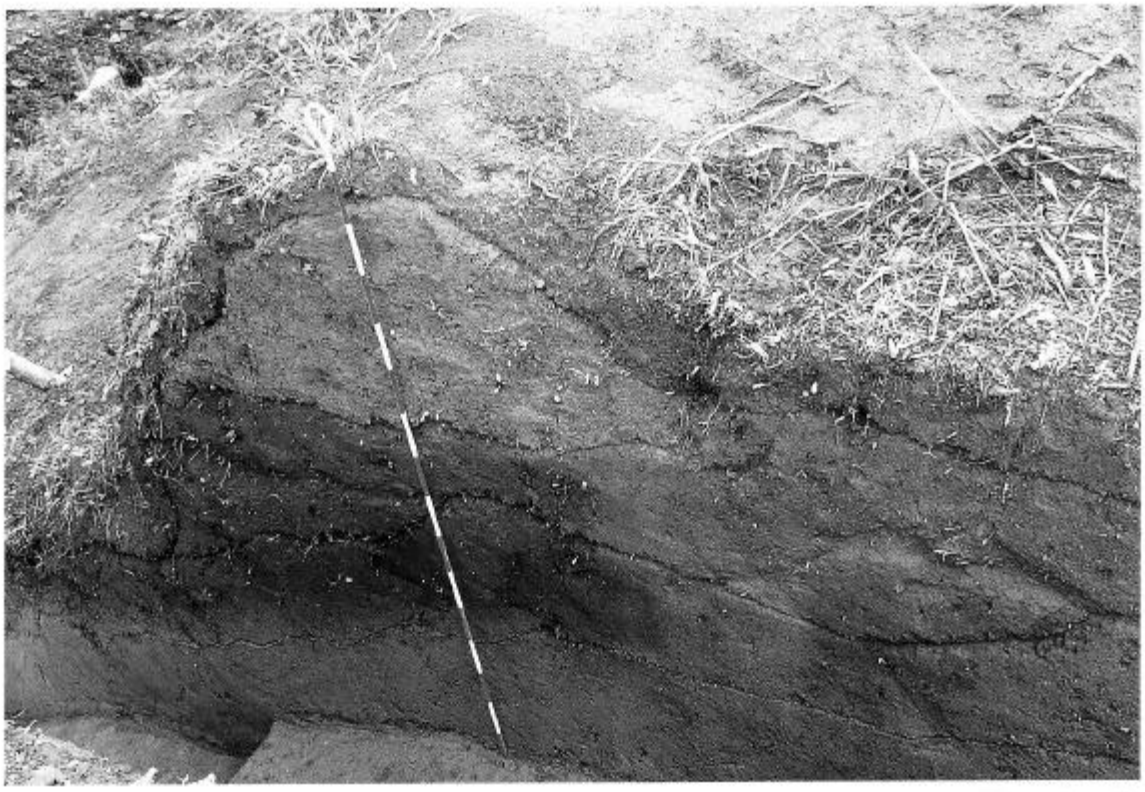


SF06縦断面

1. SF06横断面(E—F)

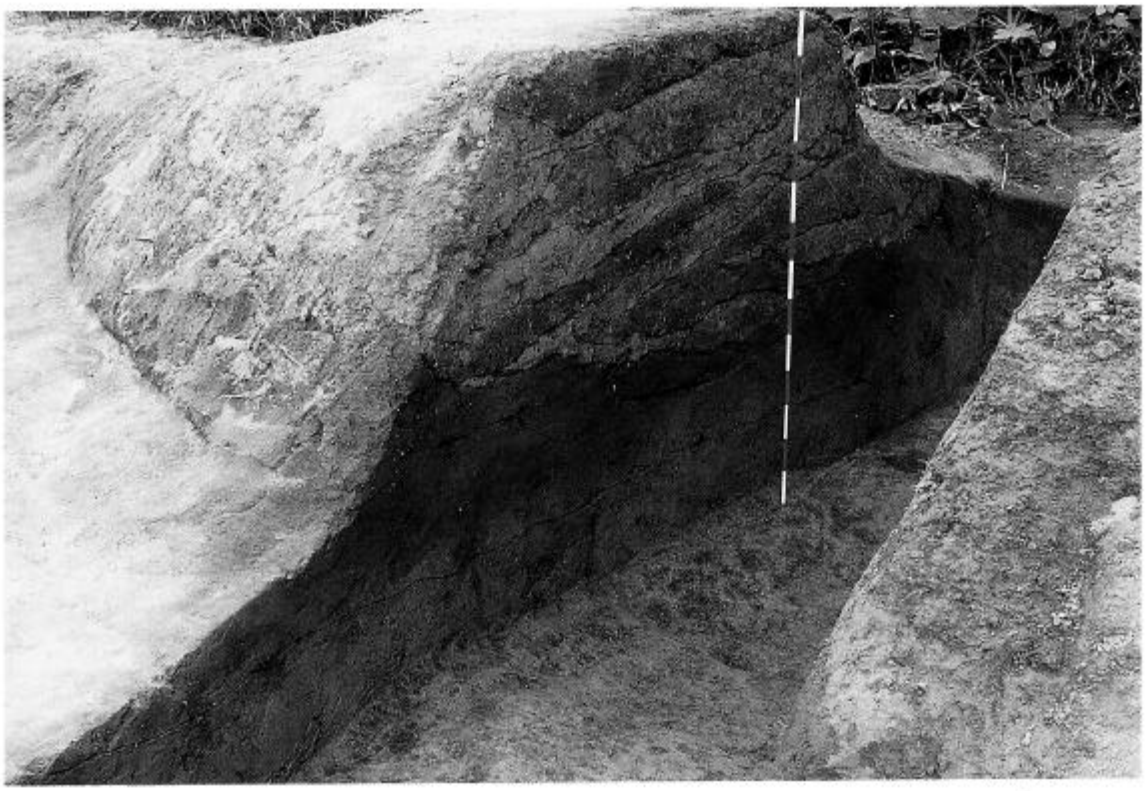
2. SF06横断面(G—H)

1．SF06横断面(C—D)

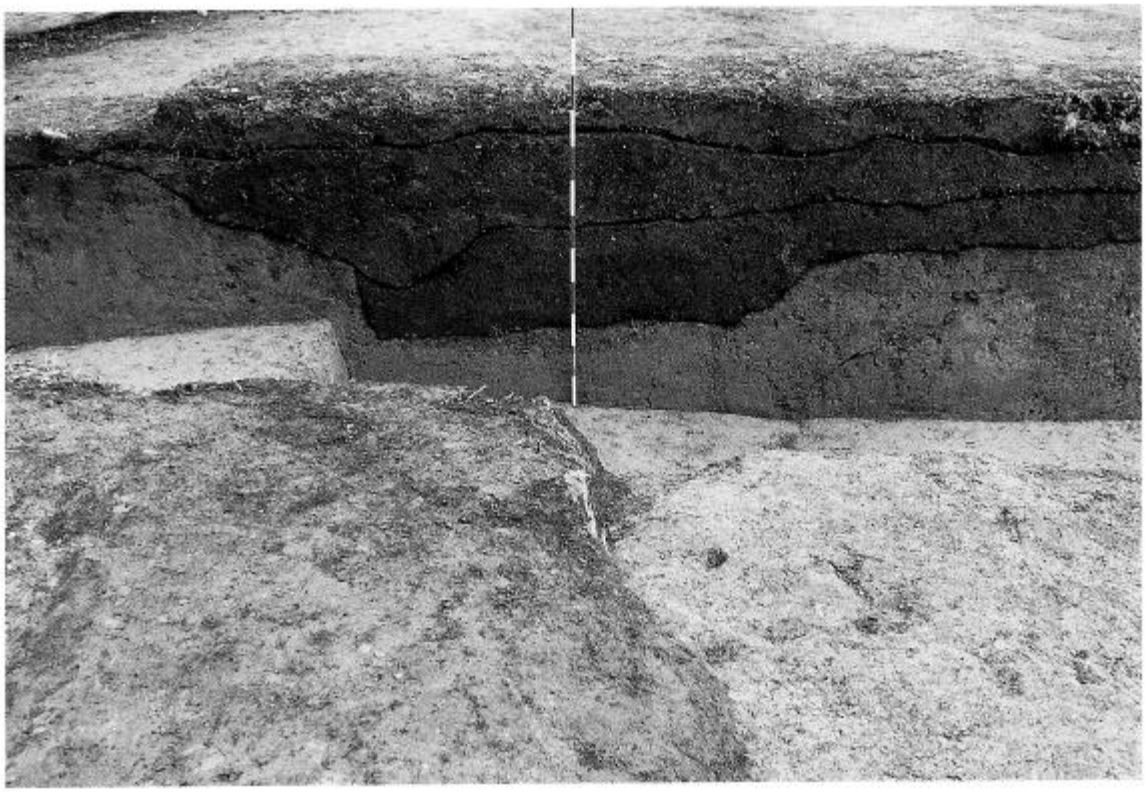


2．SF06横断面(A—B)

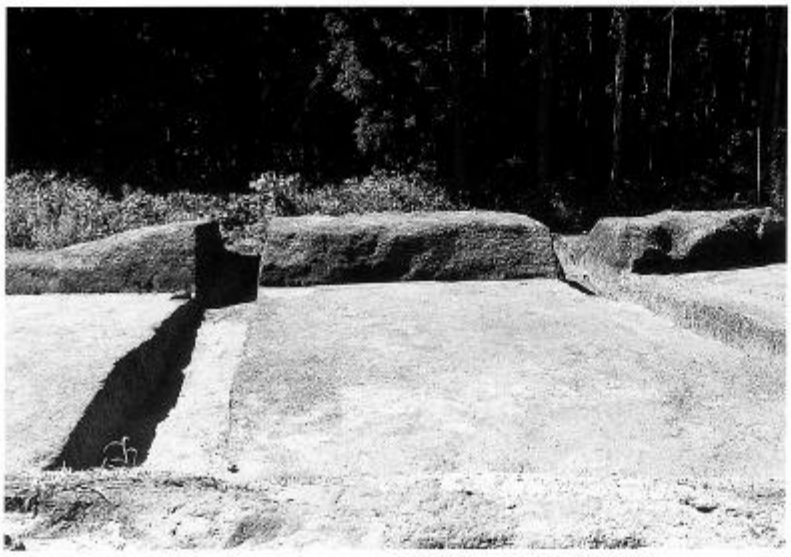
図版6



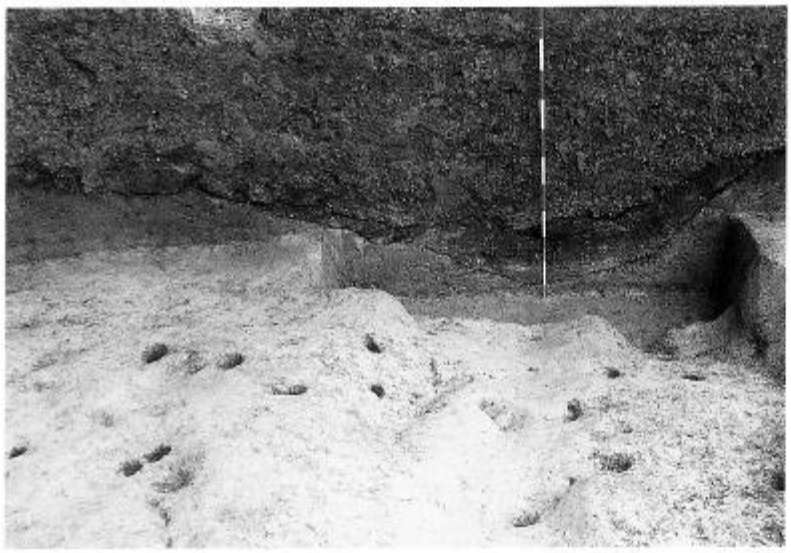
1．SF08断面



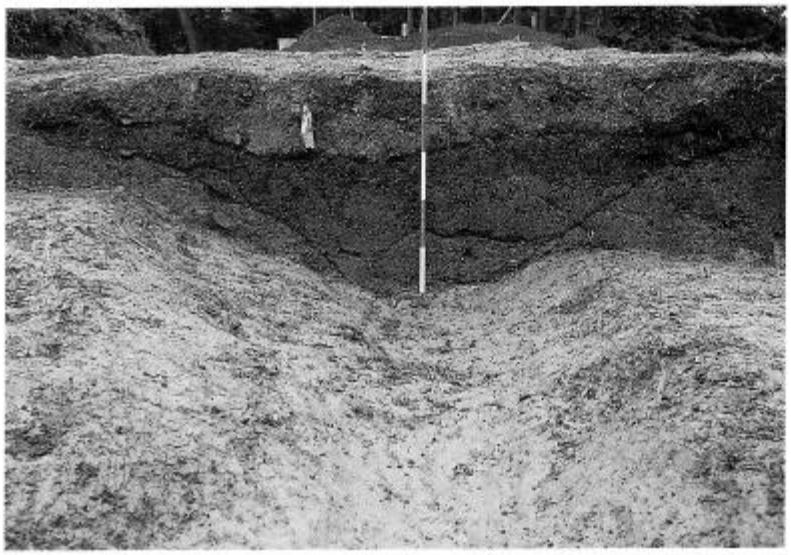
2．SD09断面



1. SF08完掘状態



2. SD01断面(A—B)



3. SD01断面(E—F)

図版8

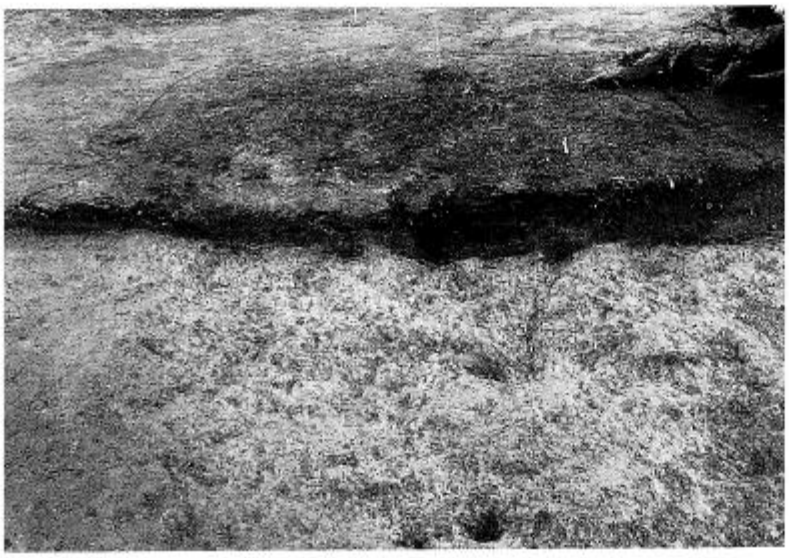
1．段状地形調査前状況

2．段状地形と
基本土層観察用トレンチ

3．作業風景

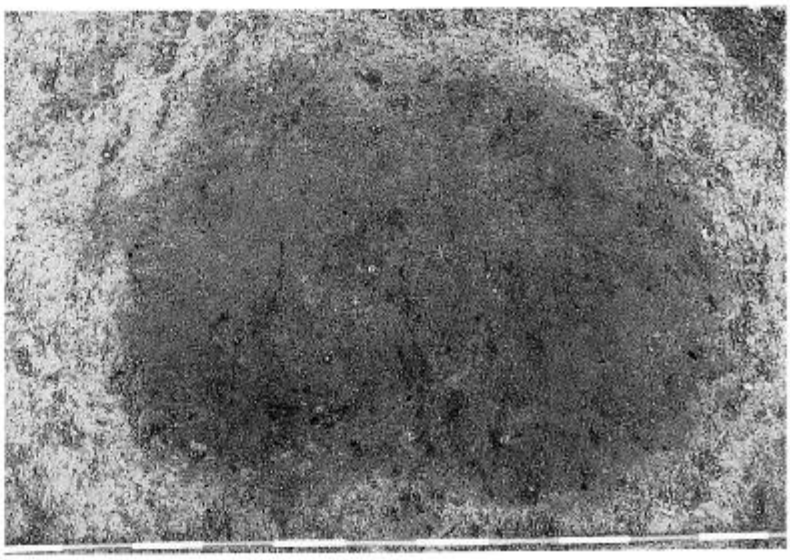
1. SX05確認状態

2. SX04確認状態



3. SX07半截状態

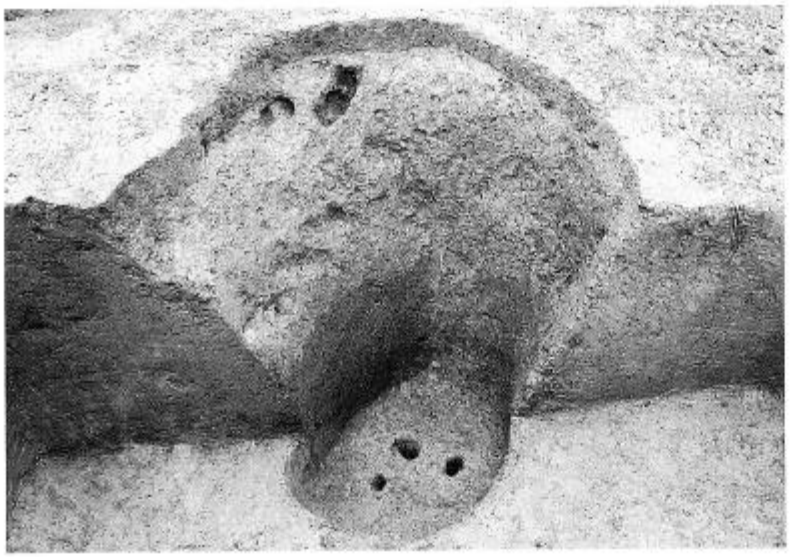
図版10



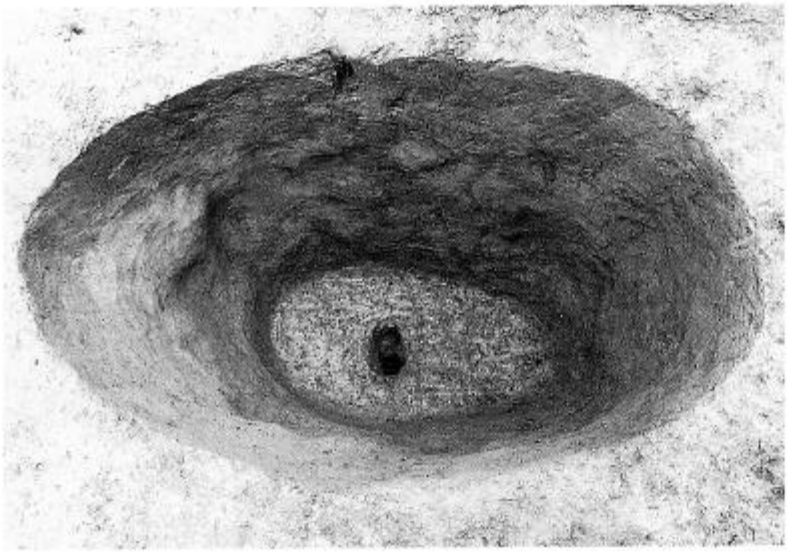
1. SX15確認状態

2. SX15半截状態

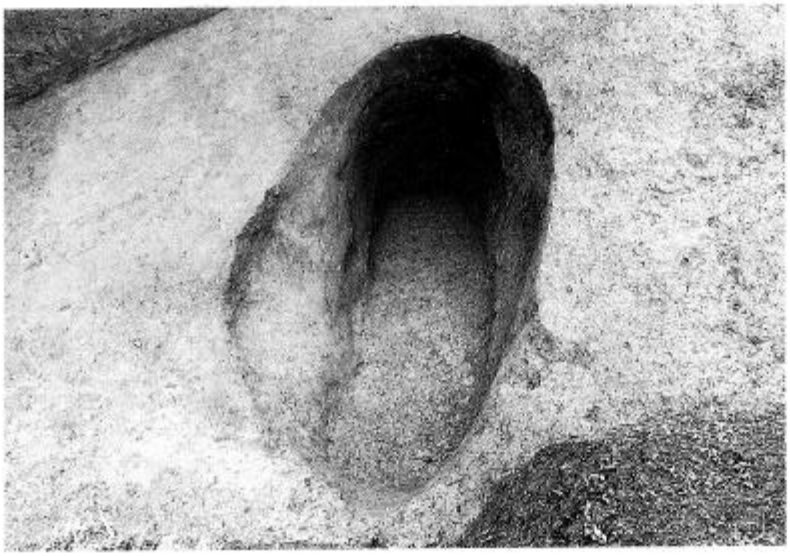
3. SK17完掘状態



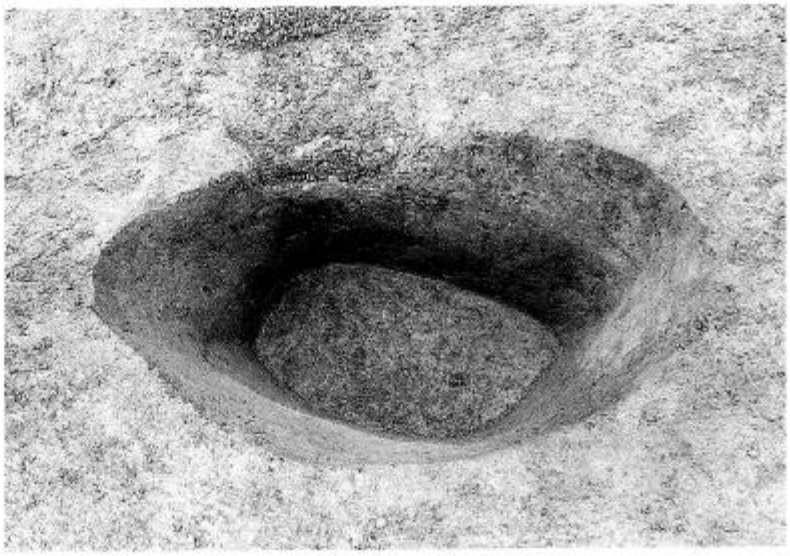
1. SK18完掘状態



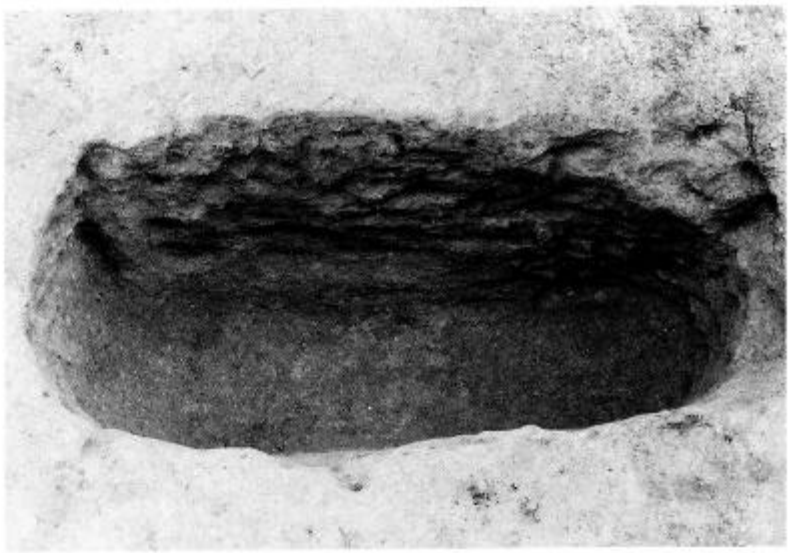
2. SK20完掘状態



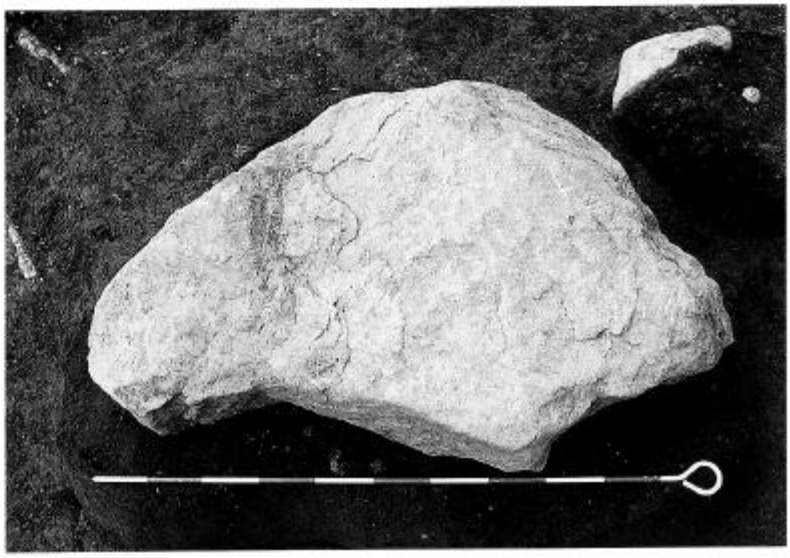
3. SK11完掘状態



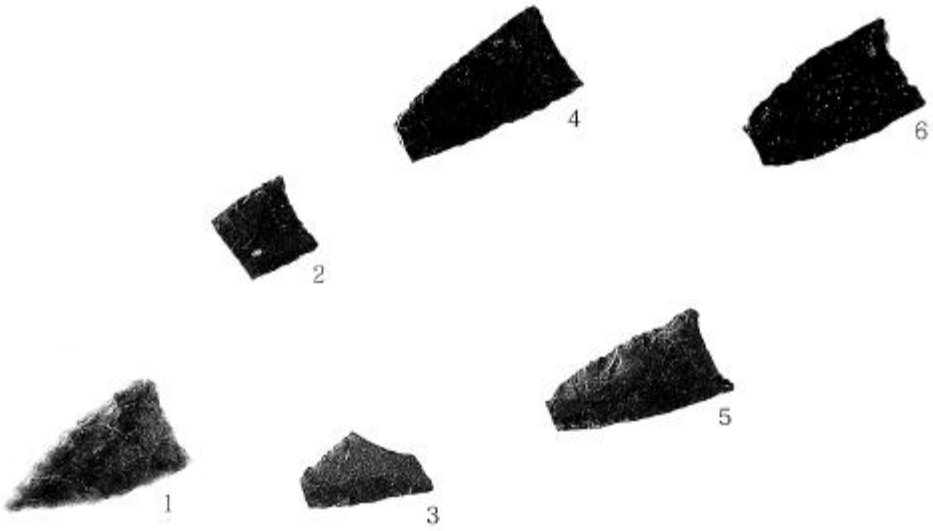
1. SK16完掘状態



2. SK19完掘状態

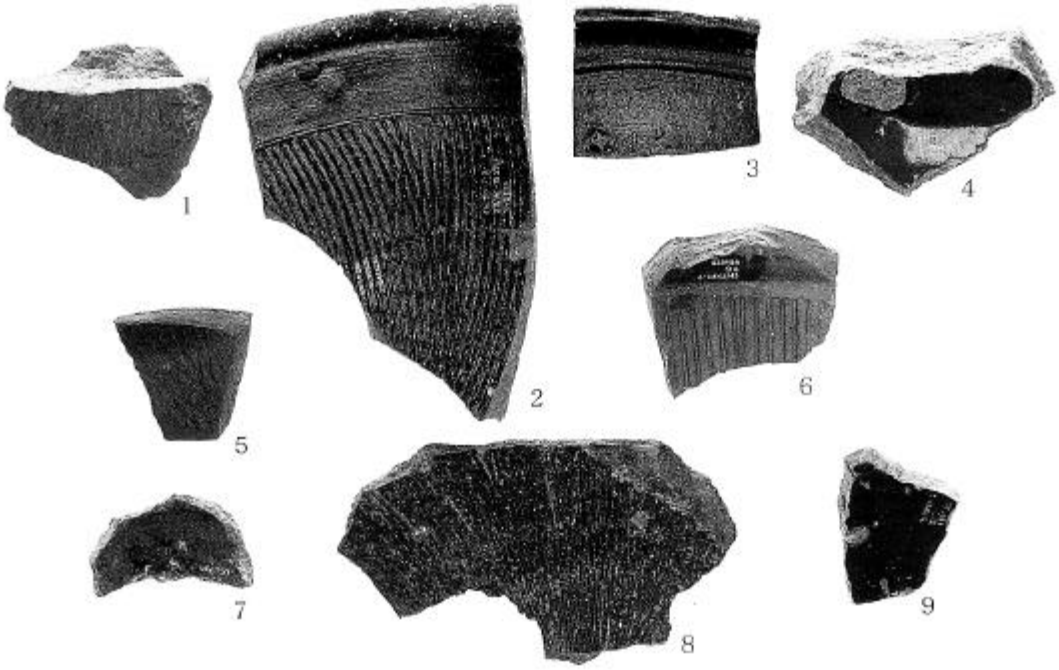


3. S1検出状態



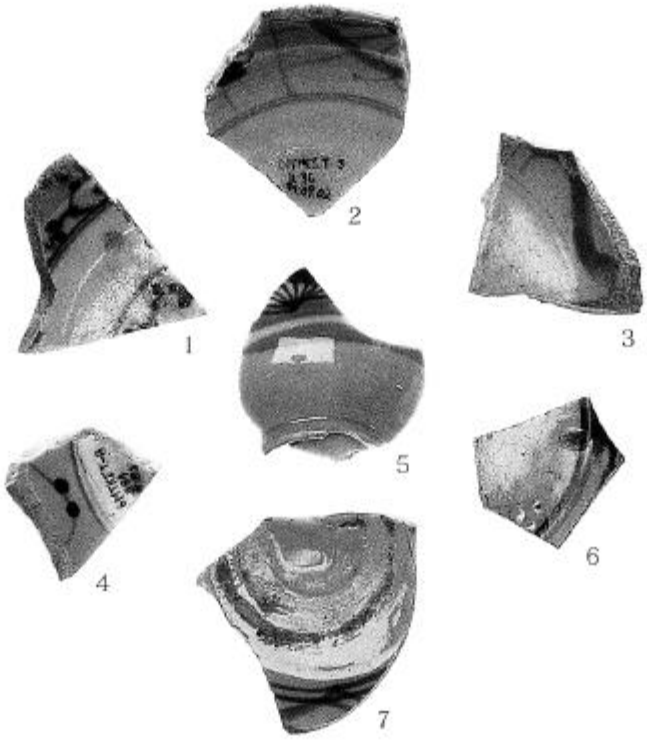
1. SK17出土石鏃

2. スクレイパー

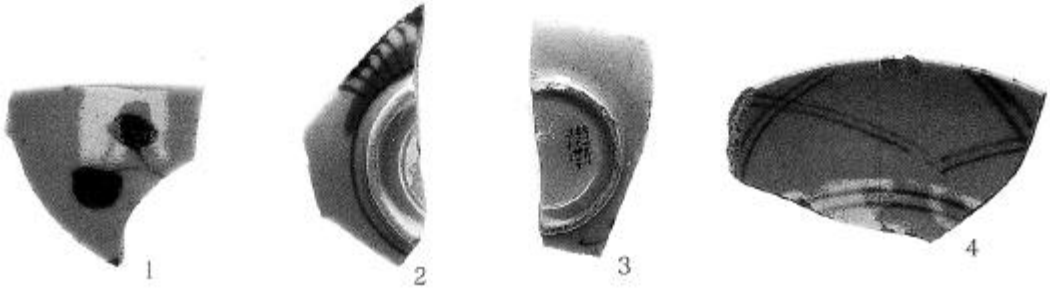


1．陶磁器(擂鉢 他)

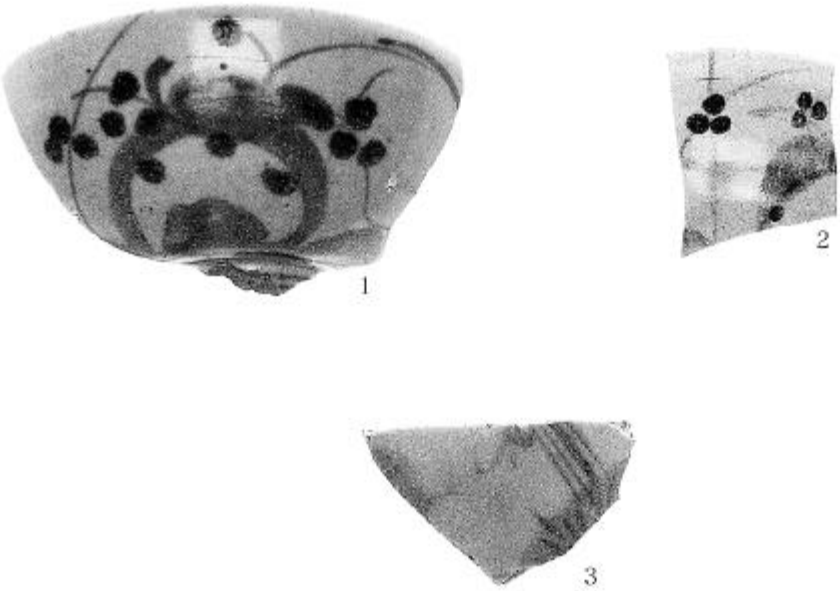
2．陶磁器(寺内焼系)



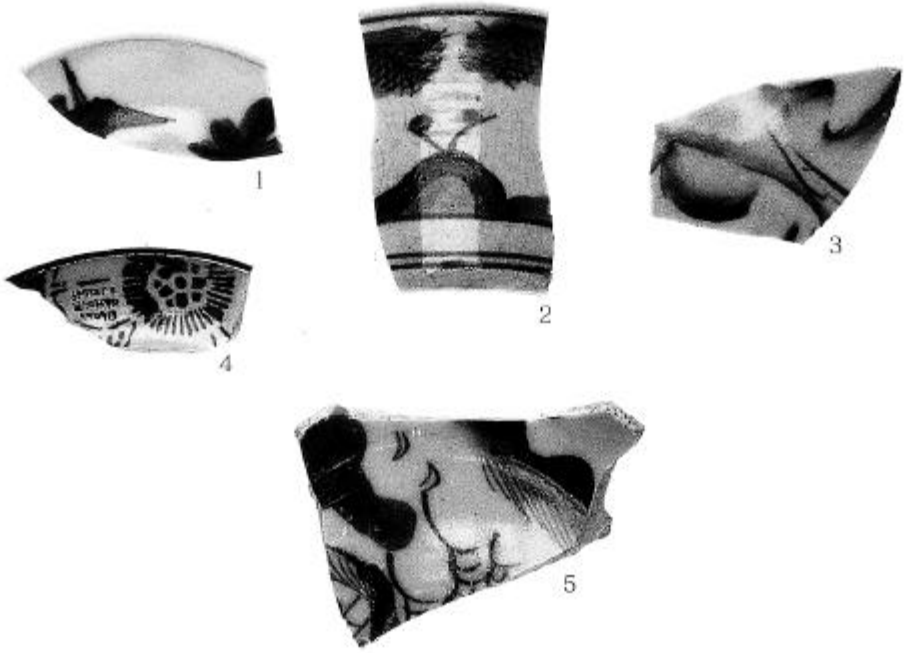
1．陶磁器(肥前系)



2．陶磁器(肥前系)

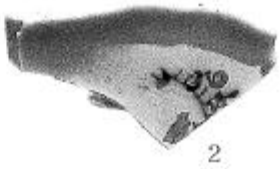


1．陶磁器(肥前系)



2．陶磁器

1


2

1．陶磁器

1

2

3

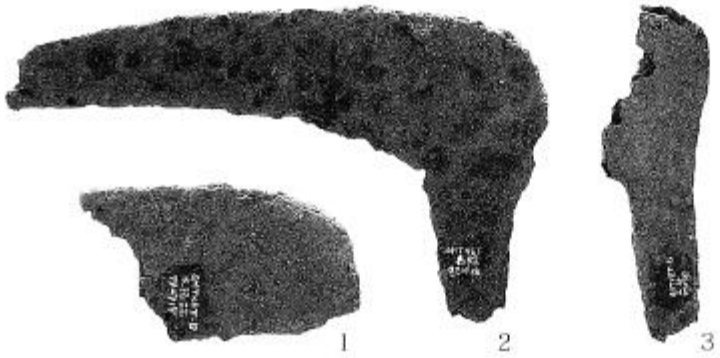
2．銭貨

1

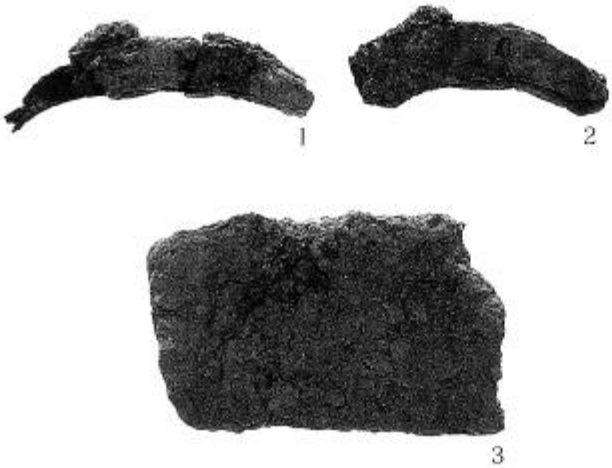
2

1．煙管(雁首)

2．獣骨

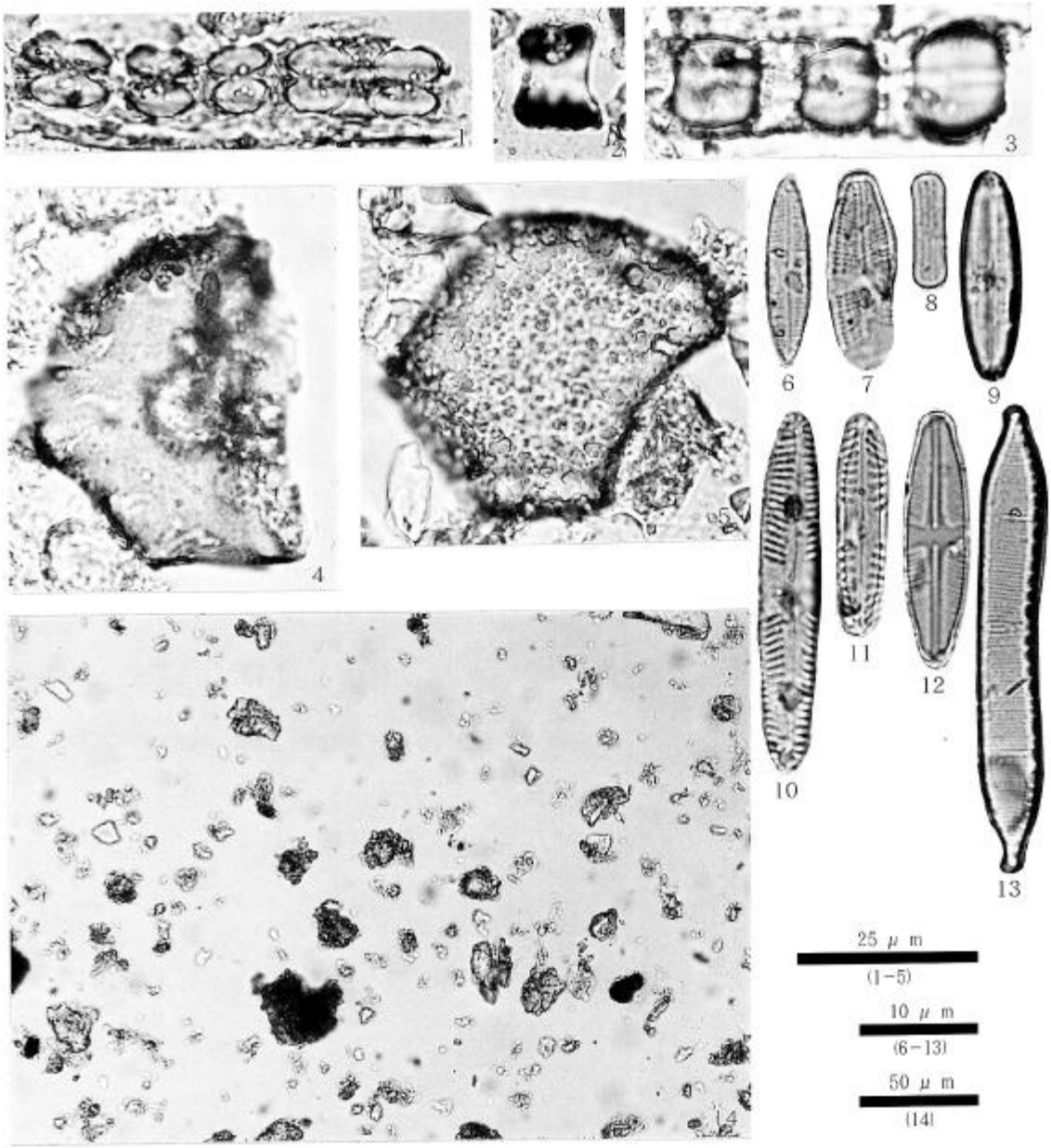


1．鉄製品(鎌)



2．鉄製品(蹄鉄、鋤)

3．鉄製品(火箸)



1. イネ属短細胞列(SD01:No.15)
2. クマザサ属短細胞珪酸体(SD01:No.15)
3. タケ亜科短細胞列(SD01:No.15)
4. クマザサ属機動細胞珪酸体(SD01:No.15)
5. タケ亜科機動細胞珪酸体(SD01:No.15)
6. Caloneis aerophila Bock(SD01:No.15)
7. Navicula mutica Kuetzing(SD01:No.15)
8. Navicula contenta Grunow(SD01:No.15)
9. Neidium alpinum Hustedt(SD01:No.15)
10. Pinnularia schoenfelderi Krammer(SD01:No.15)
11. Pinnularia obscura Krasske(SD01:No.15)
12. Stauroneis obtusa Lagerstedt(SD01:No.15)
13. Hantzschia amphioxys (Ehr.)Grunow(SD01:No.15)
14. 状況写真(SK16:No.9)

植物珪酸体　：1・2・3・4・5

珪藻化石　　：6・7・8・9・10・11・12・13

灰像分析状況：14

植物珪酸体・珪藻化石・灰像分析プレパラート内の状況

報告書抄録

ふりがな	みたけこうえんたてあと
書名	御嶽公園館跡
副書名	緊急地方道路整備事業象潟矢島線に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書
シリーズ番号	第311集
編著者名	小林芳行　山中　徹　佐々木政任　太田　剛　佐藤茂樹
編集機関	秋田県埋蔵文化財センター
所在地	〒014－0802　秋田県仙北郡仙北町払田字牛嶋20　TEL 0187－69－3331
発行年月日	西暦2001年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
御嶽公園館跡 (みたけこうえんたてあと)	秋田県由利郡 (あきたけんゆりぐん) 象潟町字横山 (きさかたまちあざよこやま) 138外 (ほか)	05403		39° 11′ 50″	139° 55′ 16″	19990607 ～ 19991013	8,400㎡	緊急地方道路整備事業象潟矢島線に係る事前発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
御嶽公園館跡	狩猟場	縄文時代	土坑(陥し穴)　6基	石器	
	館跡	中世	空堀跡　1条 土塁　2条 溝跡　2条 土坑　1基 柱穴様ピット　5基		
	遺物包含地	近世		陶磁器・石製品 鉄製品 銭貨・煙管 骨(哺乳動物)	
		時期不明	性格不詳遺構　5基		

あ と が き

発掘調査の準備から実際の調査、そして報告書の作成から刊行に至るまで、実に多くの方々からご協力とご指導を賜り、また、支えていただきました。その全ての方々に厚くお礼申し上げます。誠にありがとうございました。

最後になりましたが、発掘調査及び整理作業に携わり、ご尽力くださいました皆様に、お名前を記して深甚なる感謝の意を表します。(五十音順、敬称略)

(調査参加者) 池田トキコ　小笠原栄子　小野寺ミヤコ　木内サト子　今野ひとみ　斎藤　明美
斎藤　幸子　斉藤　正子　齋藤フジエ　斎藤　義子　佐々木美代　佐藤　敏子
佐藤百合子　菅原　京子　須田カツ子　須田タヅ子　須藤真由美　本間　トミ
村上カネノ　村上喜美子　横山　敏子　阿部　忠治　池田　保雄　太田　新一
小笠原　泰　斉藤　　勇　斎藤　久治　斉藤　二郎　斎藤　隆志　齋藤　孝志
斎藤知加良　斉藤　春雄　佐々木浩一　佐々木耕吉　佐々木定男　佐々木正治
佐々木悌造　佐々木正男　佐々木好哉　佐藤　勇治　佐藤　裕介　篠原　辰雄
須田　周一　須藤　文男　竹内　安治　竹島　徳蔵　富樫　恒雄　長谷部雄一
前田　　健　村上　忠蔵　村上　光信　安田　謙造　横山　健一
(整理参加者) 樫尾智恵子　竹村　和子　本間美紀子

秋田県文化財調査報告書第311集

御嶽公園館跡

－緊急地方道路整備事業象潟矢島線に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書－

印刷・発行　平成13年3月
編　　集　秋田県埋蔵文化財センター
〒014－0802 仙北郡仙北町払田字牛嶋20番地
電話(0187)69－3331 FAX(0187)69－3330
発　　行　秋田県教育委員会
〒010－8580 秋田市山王三丁目1番1号
電話(018)860－5193 FAX(018)860－5886
印　　刷　株式会社佐藤印刷